ISBN 978-4-905853-26-8

國學院大學研究開発推進機構
日本文化研究所年報

Annual Report of Institute for Japanese Culture and Classics
Kokugakuin University

第１号（創刊号）

平成 20 年 (2008) 9 月発行

熱田神宮・摂社、御田神社
祈年祭で舞われる韓神舞。EOS の素材として撮影。　　撮影　平藤喜久子

靖国神社・手水舎
國學院大學の大学院生が、留学生に手水の作法を教えている。　　撮影　平藤喜久子

神楽岡墓地（神葬墓地）　撮影　松本久史

羽田八幡宮（羽田野敬雄が神主を務めた）　撮影　遠藤 潤

國學院大學研究開発推進機構
日本文化研究所年報

第１号（創刊号）

目次

創刊の辞　井上　順孝……1

【プロジェクト活動紹介】

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」　井上順孝・加藤里美……3

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト内、ワーキンググループ活動報告　星野　靖二……9

「近世国学者の霊魂観をめぐる思想と行動の研究」　松本　久史…… 13

「日本神話の神話学的研究」　平藤喜久子…… 17

【昨年度の活動報告】

オーストリア科学アカデミーアジア文化・思想史研究所主催国際シンポジウム Shinto Studies and Nationalism に参加して　遠藤　　潤…… 21

フォーラム「画像資料の公開と知的財産権」　黒﨑　浩行…… 24

【研究論文】

霊能番組への関心と宗教情報リテラシー―第９回学生宗教意識調査の結果を中心に―　井上　順孝…… 27

【スタッフ紹介】

専任・兼担教員…… 55

客員研究員・PD 研究員・研究補助員 …… 64

客員教授・共同研究員…… 68

【出版物紹介】…… 75

【研究所からのお知らせ】…… 81

創刊の辞

日本文化研究所・所長　井上順孝

國學院大學日本文化研究所は、平成19（2007）年度から國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所となった。この間の経緯についてはすでに『國學院大學日本文化研究所紀要』100輯の巻頭にも述べておいたが、主として従来の日本文化研究所の総合プロジェクト部分が研究開発推進機構日本文化研究所で継承されることとなったのである。すなわち「デジタル・ミュージアムの構築と展開」及び「近世国学者の霊魂観をめぐる思想と行動の研究」のプロジェクトである。

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」のプロジェクトは、英文オンライン事典であるＥＯＳ（Encylopedia of Shinto）をはじめとする神道・日本文化関連の基本的資料・データのデジタル化を推進するとともに、日本文化研究所のみならず、機構のすべての部署のウェブ上での発信、さらに國學院大學図書館所蔵の貴重本や資料類のウェブ上での情報発信の体系的推進を行なう。研究開発推進機構が置かれている建物は学術メディアセンター（Academic Media Center 略称ＡＭＣ）と呼ばれているが、ここは國學院大學の研究センターであり、情報センターでもある。機構における研究が学内外の研究推進に貢献し、國學院大學の教育にも寄与し、さらに社会的貢献も果たせるようにと考えたときに、情報発信は重要な役割をもつことになる。

「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」（平成20年度より改称）のプロジェクトは、國學院大學の特色の１つである国学研究を深めていくためのプロジェクトである。これまでの日本文化研究所の学的蓄積の上にさらなる展開を目指すものである。

旧日本文化研究所時代と比べると人員は縮小されたが、それでも平成20年度は共同研究員を含めて30名近いスタッフを擁する。上記のプロジェクト遂行に一致協力するとともに、それぞれの研究者の個性ある研究も展開されている。

この年報はこうした日本文化研究所の研究成果を公表することを主目的として創刊された。年１冊の刊行であるが、前年度の研究成果及び当該年度の研究計画が概観できるような構成となっている。またスタッフが個人的に手がけている研究を紹介する意味もこめて、研究ノートの類も掲載していく。創刊号では、スタッフ紹介も行っている。

本誌に紹介するスタッフの研究分野を眺めると、かなり多岐にわたることが分かる。外国人スタッフも７名いる。情報機器の扱いに熟練した人もいる。ＥＯＳの他、神道関連の最近の論文を日本語から外国語へ、また外国語から日本語へと翻訳してオンラインで紹介するなど、各種の有用なコンテンツも蓄積されていくことになる。同時に、国学研究の新たな地平を開こうとしている研究者も集まっており、重厚な研究成果が示されることとなろう。

以上のような目的で新しく刊行される本誌をこれから見守っていただきたい。

平成20年９月

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」(A)

プロジェクト責任者　井上順孝

1. プロジェクトの概要

このプロジェクトは、平成19(2007)年度から3年計画で開始されたものであるが、大きく2つの課題を有する。1つは研究開発推進機構の各プロジェクトのデジタル化の統合的推進である。この目的のために機構の各機関のスタッフを横断するような企画委員会、及びワーキング・グループを編成している。もう一つは本プロジェクト独自のコンテンツの構築と研究の推進である。ＥＯＳの展開、双方向の論文翻訳、教派神道関係の基礎データのオンライン公開などである。いずれも平成14年度から18年度にわたった21世紀ＣＯＥプログラムの後継事業としての性格を担っている。以下、この大きく2点について昨年度の成果と今年度の計画について概要を述べる。

なお、本年度のスタッフは次のとおりである。

責任者　井上順孝

分担者

平藤喜久子、星野靖二(専任教員)

石井研士、黒崎浩行、ノルマン・ヘイヴンズ(兼担教員)

市川収(客員研究員)

市田雅崇、大澤広嗣(PD研究員)

李和珍、ラウラ・ココラ、ジェシー・ラフィーバ(研究補助員)

ナカイ・ケイト、関守ゲイノー(客員教授)

アンネマリー・アイフラ、エリック・シッケタンツ、江島尚俊、武井順介、高橋典史、ドロシア・フィルス、松本喜以子、山田美紀子(共同研究員)

2. 昨年度の成果

① 機構全体に関わる成果

研究開発推進機構の各プロジェクトのデジタル化の統合的推進に関しては、昨年度、次のような成果があった。計画を円滑に実施するため企画委員会を設置し、相互の事業の目指すところについての理解を深めた。もっとも大きな課題は、平成20年度に導入予定の新しいソフトウェアに関する検討であったので、技術的な問題を中心的に議論するために、ワーキング・グループを発足させて細かな点を検討した。

なお、企画委員会のメンバーは次のとおりであった。井上順孝(責任者)、石井研士、市川収、内川隆志、遠藤潤、大澤広嗣、小川直之、加瀬直弥、加藤里美、黒崎浩行、千々和到、平藤喜久子、藤田大誠、Ｎ・ヘイヴンズ、星野光樹、星野靖二、堀越祐一、松本久史(以上教員)、安達匠、及川聡、後藤幸雄、古山悟由、斉藤崇樹、堀内弘行(以上職員)

機構には、各プロジェクト独自のコンテンツがすでに存在していた。本プロジェクトではＥＯＳと神道関係の論文の双方向の翻訳がアップロードされており、学術フロンティアの成果としては、「大場磐雄博士写真資料」「柴田常恵写真資料」「折口信夫博士歌舞伎絵葉書資料」「宮地直一博士写真資料」「杉山林継博士収蔵資料」(「考古学資料館所蔵縄文土器」が公開されていた。またＣＯＥプログラムでの成果をもとに「神社資料データベース」、「国学関連人物データベース」が構築され、拡充

がはかられていた。

これらを統一的なソフトで公開するとともに、國學院大學図書館のデジタル・ライブラリーの事業も連携させていくことを目的として数度にわたる企画委員会及びワーキング・グループの会合を開催した。すでに公開されているコンテンツは、独自のデータベースソフトが用いられているが、これを統一することでさまざまなメリットが生じる。ソフトの選択と基本的構想については、繰り返し議論がなされた。ＡＭＣ（学術メディアセンター）に設置される学術資料館の収蔵物及び展示物に関するデータベースの構築、ＯＲＣ（オープン・リサーチ・センター、平成19年度採択）の事業によって構築されるデジタルデータ、また本学教員が科学研究費補助金等外部資金を得て作成したデータベースの公開にも、このソフトが利用できるようにとの配慮もあったので、その調整には関係者の意見を細かく聴取した。とりわけ検索システム、及びローマ字入力方式については多くの時間を費やした。

②プロジェクト独自の成果

独自のコンテンツ作成と研究に関しては、ＥＯＳの拡充、双方向翻訳の推進、教派神道等の基礎資料のデジタル化がなされた。ＥＯＳの拡充に関しては、新たな事項の追加、グロッサリーの作成、各項目にリンクされた画像・映像の大幅な追加を行なった。このなかには、平成18年度に本学の大学院でＣＯＥ関連の講義を受講した院生によって作成された事項や画像、映像が含まれている。グロッサリーは日本語から及び英語の双方から調べられるようにした。とくに神社については別途一覧表を作成し、資料編に登場する神社名も含めてリストアップした。（図１参照）

また神道についての専門的な知識を得ていない外国人の学生その他を念頭においた画像を中心とした用語解説（Images of Shinto: A Beginner's Pictorial Guide）の作成も開始された。最初に手がけられたのは、神社の境内図で、ここに鳥居、境内、社殿、手水舎、絵馬、社務所、などの絵が描かれており、それをどう呼ぶか分からない人でもＥＯＳの解説へとリンクできるようにしてある。（図２参照）

双方向の論文翻訳、すなわち神道関係の論文を、日本語から外国語へ、また外国語から日本語へと翻訳する事業が平成18年度から始められたが、19年度は次の４点が翻訳された。日本語から英語へ２点、日本語から英語へ２点である。

日本語から英語へ翻訳された論文は、岡田荘司「天皇と神々の循環型祭祀体系―古代の祟神―」（英訳 The Circular System of Rites Linking the Emperor and the Kami—Menacing Apparitions of the Kami in Antiquity）と、中西裕二「“ネイティヴの人類学”のもう一つの可能性―黒田俊雄と神仏習合の人類学的理解から」（英訳 Another Possibility of “Native Anthropology”: The Anthropological Understanding of Kuroda Toshio and Shinbutsu Shugo）である。

英語から日本語へ翻訳されたのは、John Breen, “Pacific trauma: Yasukuni and the fetishised narrative of war”（邦訳「靖国神社による戦争語りのフェティシズム」）と、Sarah Thal, “Shinto: Beyond Japan’s Indigenous Religion”（邦訳「神道―日本の固有宗教をこえて」）である。

なお、ＥＯＳの総論部分は英語以外にも、韓国語、中国語、ドイツ語、フランス語、ロシア語に翻訳されている。双方向の翻訳も日英間には限られておらず、一昨年に日本語から韓国語への翻訳が一点なされている（井上順孝「神道大教にみられる『神道』の教団化過程」）。欧米の言語のみならず、アジアの言語、とくに中国語と韓国語との双方向での翻訳を視野に入れている。

教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料

図１　グロッサリ（神社一覧：抜粋）

あ行				
あがたじんじゃ	県神社	Agata Jinja		E2
あきはさんほんぐうあきはじんじゃ	秋葉山本宮秋葉神社	Akihasan Hongū Akiha Jinja		E2
あきはじんじゃ	秋葉神社	Akiha Jinja		E2
あざかじんじゃ	阿邪加神社	Azaka Jinja		E2
あさまじんじゃ	浅間神社	Asama Jinja		E2
あすかにいますじんじゃ	飛鳥坐神社	Asukani'imasu Jinja		E2
あすすきじんじゃ	阿須須岐神社	Asusuki Jinja		E2
あそじんじゃ	阿蘇神社	Aso Jinja		E2
あたごじんじゃ	愛宕神社	Atago Jinja		E2
あつたじんぐう	熱田神宮	Atsuta Jingū		E2
あなしじんじゃ	穴師神社	Anashi Jinja		E2
あなしにますひょうずじんじゃ	穴師坐兵主神社	Anashinimasuhyouzu Jinja		E2
あぶらびじんじゃ	油日神社	Aburabi Jinja		E2
あふりじんじゃ	阿夫利神社	Afuri Jinja		E2
あまてるじんじゃ	阿麻氐留神社	Amateru Jinja		E2
あめのいわとじんじゃ	天石門神社	Amenoiwato Jinja		E2
あやべはちまんじんじゃ	綾部八幡神社	Ayabe Hachiman Jinja		E2
あわじんじゃ	安房神社	Awa Jinja		E2
あんとうじんじゃ	安東神社	Antō Jinja		E2
A				
Aburabi Jinja	油日神社	あぶらびじんじゃ		E2
Afuri Jinja	阿夫利神社	あふりじんじゃ		E2
Agata Jinja	県神社	あがたじんじゃ		E2
Akiha Jinja	秋葉神社	あきはじんじゃ		E2
Akihasan Hongū Akiha Jinja	秋葉山本宮秋葉神社	あきはさんほんぐうあきはじんじゃ		E2
Amateru Jinja	阿麻氐留神社	あまてるじんじゃ		E2
Amenoiwato Jinja	天石門神社	あめのいわとじんじゃ		E2
Anashi Jinja	穴師神社	あなしじんじゃ		E2
Anashinimasuhyouzu Jinja	穴師坐兵主神社	あなしにますひょうずじんじゃ		E2
Antō Jinja	安東神社	あんとうじんじゃ		E2
Asama Jinja	浅間神社	あさまじんじゃ		E2
Aso Jinja	阿蘇神社	あそじんじゃ		E2
Asukani'imasu Jinja	飛鳥坐神社	あすかにいますじんじゃ		E2
Asusuki Jinja	阿須須岐神社	あすすきじんじゃ		E2
Atago Jinja	愛宕神社	あたごじんじゃ		E2
Atsuta Jingū	熱田神宮	あつたじんぐう		E2
Awa Jinja	安房神社	あわじんじゃ		E2
Ayabe Hachiman Jinja	綾部八幡神社	あやべはちまんじんじゃ		E2
Azaka Jinja	阿邪加神社	あざかじんじゃ		E2

のデジタル化は、神理教、神道修成派、黒住教について進め、おおよそ完了した。ＴＩＦファイルとしてデジタル化し、その目録もデータベース化した。

3. 今年度の研究計画等

今年度の計画も機構全体に関わる部分と、本プロジェクト独自の部分とがある。機構のデジタル・ミュージアム構想の推進については、統一的なソフトの導入が決定された。富士通が開発したミューズテークが採用となったので、この基本仕様の説明を受けたのち、それぞれのデータベース、その他がどのように設計しなおされなくてはならないかを議論していく。前年同様に技術的な問題はワーキング・グループによって検討し、富士通の担

図２　境内図

当者とも相談の上で基本設計を行う。新しいソフトを用いてのデジタル・ミュージアム関係のホームページの更新は本年度中に終了する予定で計画を立てている。これによって、ＥＯＳ、学術フロンティアにより構築されたデータベース、神社データベース、国学者データベースなどが、統一的な仕様により公開されることになるので、より多くの人にアクセスされると予測している。

独自のコンテンツ構築は、ＥＯＳの拡充、双方向翻訳の継続、教派神道・神道系新宗教関係の基礎資料のデータベース化とそのオンライン公開を柱とする。神道についての知識が比較的乏しい人を対象とする画像による用語説明は、境内図に続いて、社務所図、人生儀礼・年中行事図などを作成し、解説する用語を増やしていく。

教派神道・神道系新宗教の基礎資料については、黒住教、神理教及び神道修成派のデジタル化された基礎資料（マイクロフィルム及びコピーとして収集したもの）の一部を教団本部と協議の上、オンラインで公開する予定である。昨年度末には、井上順孝が熊本県玉名郡長洲町に本部のある神道系新宗教の祖神道での教団資料調査を実施したが、その折に、教祖松下松蔵に関する資料（主として書簡類）の分析について了解が得られた。これらをデジタル化するとともに、記述内容の一部をデータベース化し、分析も行なう。この資料は教祖の生存中の宗教活動の内容を詳しく知る重要な手がかりとなるもので、この分析により祖神道の展開過程についての新たな研究成果が期待される。

また、21世紀ＣＯＥプログラムで確立された国際的な研究交流を継続・発展させるために、10月26日（日）に国際フォーラム「ウェブ経由の神道・日本宗教―インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ」を開催する。フォーラムは二部構成となっており、午前中は若手研究者を中心にしながら、現状認識や

今後の課題について自由に討議するという形式をとる。また、午後にはヨーロッパから外国人研究者3人を招聘し、発題とコメント、そしてフロアを交えての討議という形式をとる。

このテーマは、情報化がますます進行していくという研究・教育環境の中で、どのように神道・日本宗教についての情報を交換したらいいのか、また適切な宗教文化教育はどのようにして構築されるかなどについて議論することを目指している。

11月に実施される「日本文化を知る講座」は、今年度は本プロジェクトが中心となって企画することとなった。立教大学の月本昭男教授、東京外国語大学の丹羽泉教授、また本学の青木周平教授、平藤喜久子講師が講師予定者である。4週連続で行なわれるが、テーマは「現代人にとっての神々の物語―教材としての神話―」である。

なお、今年度の研究実施に当たっては、科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表者・大正大学教授星野英紀）の採択に伴い、この研究実施との連携を重視することとなった。この科研費による研究の研究分担者として、本プロジェクトメンバーの井上順孝、黒﨑浩行、平藤喜久子の3名が加わっており、この研究の推進に当たって重要な役割を担っていることによる。

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」(B)

加藤里美

・事業概要

[担当責任者]　小川直之
[分担者(＊印共同研究員)] 小川直之・黒﨑浩行・山内利秋*

文部省(当時)私立大学学術研究高度化推進事業(「学術フロンティア推進事業」)の拠点指定を受け、平成11年度より進めてきた「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクトは、本学で所蔵する多くの画像資料とその関連資料について、原画像資料の保全とデジタル化による再生活用に向けた取り組みを行い、劣化画像資料の保存・再生に関する方法論を確立するとともに、これまで研究資料として用いることが難しかったこれらを利用した研究を進めるなど、大きな成果を挙げてきた。デジタル化作業を続けてきた画像資料は、目録等を刊行するとともに「國學院大學学術資料データベース」として公開することによって学外からの検索も可能となり、研究者への提供はもちろんのこと、学校教育や教育委員会等の活動を通じて社会全体への還元も行うことができた。16年度以降は図書館・神道資料館・考古学資料館との共同研究体制のもとで、学内における学術資料の再生活用とその方法の構築について相互の連携を図りながら研究を進め、人文科学資料のアーカイブス構築に向けた研究を展開した。

上記の成果にもとづいて、平成19年度も本学所蔵の画像資料を核とする人文科学資料アーカイブスの構築に向けて継続して研究を進めるとともに、さらにこれらを活用した研究活動の一層の充実を図ることで、近代学術資産としての再構築を目指した。具体的には、保存のための措置を完了した宮地直一・柴田常恵(含、田沢金吾)旧蔵のガラス乾板について画像をデジタル化するとともに、乾板が有する画像以外の情報、あるいは周辺情報を加えて目録化・データベース化を行った。加えて、宮地直一旧蔵の神社関連絵葉書についてデジタル化に向けての準備を進めた。年度末には、「画像資料研究フォーラム『人文科学と画像資料研究』ＸＩ―画像資料の公開と知的財産権―」を開催し、デジタル・ミュージアムの構築に向けて、学術資料アーカイブスにおける知的財産権の問題についての議論を深めた。また、これまでの研究の一部をまとめた『写真資料デジタル化の手引き―保存と研究活用のために―』、『人文科学と画像資料研究』第５集を刊行し、成果の公開を行った。

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」
プロジェクト内、ワーキンググループ活動報告

星野靖二

以下、「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト内に設けられたワーキンググループでの活動について報告する。なお、下記概要に記したように本ワーキンググループが組織されたのは平成19（2007）年度末であるため、報告する活動の期間は平成20（2008）年度前半までを含めることとする。

1. 本ワーキンググループの概要

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」のプロジェクト活動紹介において述べられているように、研究開発推進機構の各プロジェクトのデジタル化を統合的に推進する一環として、各プロジェクトで運用中あるいは構築中の諸データベースを統一的なシステムにおいて管理・公開することが検討されており、平成20年度中に統合的なデータベース管理・公開ソフトウェアを採用する方向で議論が行われてきた。

既に同プロジェクト企画委員会では、平成19年度中から富士通のミューズテーク（Musetheque）というソフトウェアを一つの有力な候補として検討が行われてきており、平成20年度になって同ソフトウェアの採用が正式に承認された。これに関連して本ワーキンググループは、諸データベース間のデータの整合や、あるいはソフトウェアの移行に伴う技術的な問題を含めたより具体的な問題について協議するために、平成19年度第6回企画会議（平成19年11月21日開催）においてその組織が諮られ、平成19年12月6日に発足して第1回ワーキンググループ会議を行っている。

なお、平成19年度におけるワーキンググループのメンバーは以下の通りである（井上順孝、市川収、加瀬直弥、加藤里美、中村耕作、平藤喜久子、星野靖二、星野光樹、村瀬友洋、安達匠、及川聡、後藤幸雄、斉藤崇樹、堀内弘行）。また平成20年度におけるメンバーは以下の通りである（井上順孝、市川収、加瀬直弥、平藤喜久子、星野靖二、星野光樹、松本久史、中村耕作、安達匠、及川聡、後藤幸雄、斉藤崇樹、堀内弘行）。

なお、現在の段階でミューズテークへの移行が予定されているデータベースについては以下の通りである（「学術資料データベース」全9データベース［「大場磐雄博士写真資料」・「大場磐雄博士資料」・「柴田常恵写真資料」・「折口信夫博士歌舞伎絵葉書資料」・「宮地直一博士写真資料」・「杉山林継博士収蔵資料」・「考古学資料館所蔵縄文土器」・「原田敏明毎文社文庫写真資料」・「考古学資料館発掘調査報告書」］、「神道・神社史料データベース」、「国学関連人物データベース」、「図書館デジタルライブラリ」、「Encyclopedia of Shinto（EOS）」、「Basic Terms of Shinto」、「神字語彙」）。

また、これら以外にも今後データベースを追加していくことが想定されており、特に小規模なデータベースについては、後述するように管理者側での追加を可能にする機能の開発・実装を要望している。

2. 本ワーキンググループの目的

本ワーキンググループの目的とするところは、上述したように統一的なソフトウェア導

入にまつわる実務的・技術的な面までを含めた諸事項について協議を行うということであるが、より具体的には大きく分けて以下の二つの問題群について取り組んできた。

2-1. 諸データベース間の整合についての協議

第一に、既に存在する諸データベース間における共通性について協議を行った。これはすなわち、ミューズテーク導入に先行して既に稼働している、あるいは既に構築作業が行われている諸データベースについて、それぞれのデータ内容などについてどのように整合を取るかということについて調整し、今後追加されるデータベースが準拠すべき形式と書式について検討するというものである。

統一的なシステムを採用する重要な利点の一つは、諸データベース間の横断検索が可能になるという点にあるが、これを実現するためには同じ言葉が基本的に同じ表記において記述されている必要があり、ここで表記の統一という問題が生じる。また全てのデータに対して検索を実行する全文検索とは別に、特定のデータ項目を指定して横断検索を行う場合には、共通の項目を選定し、その書式を統一するという作業を前もって行っておく必要がある。本ワーキンググループではこうした問題について議論した。

2-1-1. 共通検索項目の設定

まず共通に設定すべき検索項目とその書式について検討した。作業の手順としては、既に諸データベースで設定されている諸項目を一覧にして比較し、続いてその中から必要と思われる項目を選定し、更に一部の項目については新規に設定することとした。現在、読みがなデータの項目を含む30項目程がリストアップされている。なお、読みがなについてはローマ字表記を採用することになったが、この表記にまつわる問題については次節で触れる。

より具体的な問題としては、例えば時代表記の問題が議論された。まず西暦表記と和暦表記との間のデータ互換の問題が取り上げられ、これについて諸データベースに共通する変換表を設定することで対応可能であることが確認された。また任意の1年と鎌倉時代・江戸時代のような「時代」データとの間の対応について議論が行われ、年と時代の変換表を作成することと、それを開発・実装予定である「時代」項目検索機能に組み込む方向性が確認された。

2-1-2. ローマ字表記の問題

これは共通検索項目の設定にも関連した問題であるが、平易に検索を行うことができる「読みがな」という検索項目を設定することが決定され、そしてこれをローマ字によって表記するという統一方針が確認された。これは、既に運用されているEOSにローマ字表記のデータが蓄積されていることに加えて、ローマ字表記を採用することによって非日本語圏からの利用を見込み、より広く活用してもらうためである。

しかし、総論としては採用が決定されたこのローマ字表記に関して、実際にどのようにアルファベットにおいて表記するかという点において問題が生じた。当初ヘボン式を採用すべきではないかという意見が出されたが、これに対してヘボン式表記が必ずしも直感的なものではないこと（例えば「難波」が「Nanba」ではなく「Namba」となる）[(1)]、またヘボン式を採用したとしても長音などの表記の揺れが解消できないこと[(2)]などが指摘された（例えば「オオノ」も「オノ」もヘボン式だと「Ono」になるが、ヘボン式を基本とするパスポート申請用の表記では「オオノ」について例外的に「Ohno」を用いることが認められるようになっている。かつ昭和29年に出された内閣告示第一号には「大文字の場合は母音字を並べてもよい」とあり、これに依ると「オオノ」について「Oono」表記が可能になる）。

これに関して、ミューズテークを運用している富士通の技術者に尋ねたところ、他の運用例を見てみてもローマ字表記に関して必ずしも統一的なルールがあるわけではないという回答があり、また図書館で用いられている書誌情報においても定められた表記規則があるわけではないということが確認された。

一方、本デジタル・ミュージアムに収録される諸データベースは主に日本語のコンテンツを持つものであり、EOS などを考慮したとしても、基本的に使用者はある程度の日本語能力を持つであろうことが指摘された。

これらを勘案して、結論としては読みがなをそのままアルファベットで音写する形式が採用されることとなったが（例：「難波」は「Nanba」、「オオノ」は「Oono」となる）、凡例においてこの方針を説明することが必要であることが指摘された。また、結局ローマ字表記の揺れを自動的に補正することは困難であるため、複数の検索語において検索される蓋然性が高い項目については、データを複数保持することで対応する方向性が確認された（例：「縄文土器」について「joumon doki」「johmon doki」など。また、また EOS のように使用者が英語でアクセスして英語で検索するという蓋然性が高いところは、ヘボン式の表記を併記する）。

2-2. ミューズテーク導入にあたっての技術面での諸要望の調整

第二に、実際の運用を念頭に置いて、より具体的な問題について検討した。もともとミューズテークは博物館・美術館などの収蔵品管理を主眼として開発されたソフトウェアであり、本プロジェクト、あるいは諸データベースにおいて構想している機能の幾つかについては、新規に開発・実装する必要があることになる。そのため本ワーキンググループにおいて管理・公開についての意見を取りまとめ、富士通側の技術者と調整を行った。

2-2-1. 作り込みによって実装が予定されている案件

以下、本ワーキンググループに集約された要望と摺り合わせる形で、新規に開発・実装が予定されている機能の一部を紹介する。これは例えば、上述した「時代」検索機能なども含まれる。

まず、公開後に管理者側においてデータ項目の追加・修正・削除が可能になる機能を要望し、これについて「簡易設定変更機能」の開発・実装が予定されている。これによって使用者の要望に即した変更も可能なより柔軟性の高い運用が可能になるものと思われる。

また、現行 EOS で行われているように、検索結果の表示画面において検索に用いた文字列がハイライトされた状態で表示されることを希望し、これについても開発・実装が予定されている。これによって検索結果表示画面のわかりやすさが向上するものと思われる。

加えて、諸データベースの持つ性格の違いから、例えば写真を大きく見せたい、複数の写真を見せたい、あるいは文字情報を中心的に見せたいといった公開画面についての異なる希望が出された。これに関して、幾つかの公開画面のレイアウトを前もって設定し、資料毎に表示レイアウトを選択できる機能を開発・実装予定である。具体的なレイアウト案については更に議論を深める必要があるが、これもまた諸データベースの使いやすさを向上させるものと思われる。

2-2-2. 提示されたオプション案とそれに対する検討

また、本ワーキンググループでは、ミューズテークのシステム面での作り込みとは別に、詳細は省略するが富士通側からミューズテークと連係可能な幾つかのオプションについてプレゼンテーションを受け、それらの採否について検討した。

平成20年度においては画像に「電子透か

し」を組み込むソフトウェアの導入が決定され、これによって諸データベースで用いられている画像に統一的な規格の電子透かしを組み込むことが可能になる。また平成20年度の採用は見送られたが、Google Maps と連係する地図情報システム（GIS）について、来年度以降引き続き検討していくという方針が確認された。

2-2-3. 現在検討中の案件

現在開発・実装の検討を依頼している最も大きな案件として、小規模なデータベースを管理者側で新規に追加する機能がある。これは、例えば科学研究費補助金等の外部資金等によって作成されたデータベースを、本デジタル・ミュージアム上で公開することができるようにするためである。この機能の実装によって、本デジタル・ミュージアムがより魅力あるデータベース群となっていくように思われる。

3. 今後の課題

平成20年度の後半は、本デジタル・ミュージアムの実稼働に向けてより具体的な内容について検討していく必要がある。そのため本ワーキンググループは、デジタル・ミュージアムプロジェクト企画委員会本体と、そして実際にデータベースを作成している諸プロジェクトと緊密に連係を取りながら、本デジタル・ミュージアムをより内容の充実した、かつ使いやすいものとすべく協議を進めていきたい。

注

(1) ヘボン式の表記規則では、(a) B・M・P の前に N ではなく M をおく［(例) 難波（なんば）NAMBA　本間（ほんま）HOMMA　三瓶（さんぺい）SAMPEI］、(b) 子音を重ねて示すが［(例) HATTORI　服部（はっとり）　KIKKAWA　吉川（きっかわ）］、ただしチ（CHI）、チャ（CHA）、チュ（CHU）、チョ（CHO）音に限り、その前に T を加える［(例) HOTCHI　発地（ほっち）HATCHO　八町（はっちょう）］といったことなどが定められている。

(2) なお、本来ヘボン式には長音記号が存在しないが、現行 EOS では長音を長音記号によって表示している（例：修験道を Shugendo ではなく Shugendō として表記）。入力の煩雑さを勘案して、新規に読みがなデータとして入力するものに長音記号は採用しないことになったが、検索の際には長音記号のないデータでもヒットするため、現行の EOS の長音記号についてはそのままで変更する必要がないことが確認されている（例：データとしては Shugendō として入力されていても、Shugendo という検索語でヒットする）。

「近世国学の霊魂観をめぐる思想と行動の研究」

松本久史

はじめに――経緯

昭和30年の日本文化研究所設立以来、「設立の趣旨」に則った研究課題のひとつとして、国学に関する研究は継続的に行われ、多くの成果を残してきた（松本久史「日本文化研究所における国学研究の歩み」『荷田春満の国学と神道史』弘文堂　平成17年　参照）。この歴史的経緯に鑑み、平成19年4月に研究開発推進機構のもとに再編された日本文化研究所においても、規程により恒常的な研究部門として「神道・国学研究部門」が設置され、新たに本プロジェクトが立てられることとなった。

目的と方法

本居宣長の展開した黄泉国論や「安心なきが神道の安心」と説いた他界・霊魂観は国学者の霊魂観の代表的な主張のひとつと理解され、研究の蓄積もなされている。一方では、平田篤胤が『霊能真柱』で展開した幽冥界の主張も、国学者の霊魂観・他界観の代表的なものとして捉えられてきた。村岡典嗣が『本居宣長』（初版は明治43年）において、宣長まで文献学的な性格の強かった国学を篤胤が他界観を導入することによって宗教化したと論じて以降、その構図が定説化し、国学者の霊魂観といえば、篤胤以降が中心的な対象となっている。複数の国学者の著述に見られる霊魂観の言説を抽出して比較し、相互の影響関係を考察するというものが、従来の国学研究における霊魂観を検討するオーソドックスな手法であったといえよう。しかしそれらの考察は、思想「そのもの」が生起する要因と社会実践の関係を充分に説明できていないのではないかという問題意識が本プロジェクトを発足する上での共通認識としてあった（平田篤胤と気吹舎の思想と実践の関係については、遠藤潤『平田国学と近世社会』　ぺりかん社　平成20年　参照）。たとえば、六人部是香、矢野玄道ら気吹舎の門人や大国隆正などの霊魂観が、明治維新以降の神道国教化政策、大教宣布運動、祭神論争など、明治初期の政府の神道・神社政策にどれほどの影響を与えているのかといった検証すら充分ではないのが現状ではなかろうか。

具体的に国学者の霊魂観に基づいた「実践」という場合、第一に神葬祭運動が想起されるであろう。例えば、石見国の鈴門系国学者の岡熊臣などは、国学者の思想（霊魂観・他界観に関する著述）と行動（神葬祭運動）の関係を示す好例である（加藤隆久『神道津和野教学の研究』・『岡熊臣集　神道津和野教学の研究』上・下巻　国書刊行会　昭和60年　参照）。ところが、近世寺檀制度の中で、神葬祭は基本的には神職固有の問題であり、国学者全体に共有・実践されていたわけではない。そのため、全国の国学者たちが「死者の霊魂を祀る」行為として執行した、「霊祭」や「年祭」にまで対象を広げて考察し、さらに、幕末に偏っている時代も遡って検討することとした。考察の基点としては18世紀前半における荷田派の霊祭や神葬祭運動を想定した。同派の神職門人による神葬祭の執行、続いて19世紀の遠江国における高林方朗を

中心とした宣長・真淵の霊祭執行と県居霊社建立運動の展開、それと呼応する形での幕末期の三河国における草鹿砥宣隆・羽田野敬雄らの平田派の実践活動に着目した。このように、平田派に限定せず、かつ近世の中期から幕末期に及ぶ調査対象期間を設定した。また、思想そのものの実証的な検証もこれらと並行して行うことし、具体的には霊魂観の表明されている諸テキストを対象として、成立の過程、写本の伝本、版本の刊行形態をも含めた検証を進めた。

このように、対象と時代を共に幅広く取ることによって、近世における国学者の霊魂観と実践との関係についての実証的研究を進展させることが本プロジェクトの目的である。

平成19年度の活動内容

1、『霊能真柱』の再検討

さて、国学的霊魂観を考えていく上で検討対象となるテキストとしては、平田篤胤の『霊能真柱』がまず挙げられるであろう。篤胤の霊魂観が、本居宣長および『三大考』の服部中庸説、あるいは他の先行する諸思想に対して異質な要素を孕んだものであることは周知の事実であり、西洋天文学の知識をも包摂しながら、その後の国学者による他界論の水準をも規定していったという意味で、画期的な業績である。そこで『霊能真柱』の所在状況調査を最初の作業課題とした。近年、歴史学の分野での「読書」研究の進展は、思想が社会の中で実在した一形態として、「モノ」としてのテキストへの着目を必然化しており、こうした基礎的な事実の確認から出発したのである。

その作業を行った結果として、

①刊記及び巻末に添付された書目から判断するに、菅能屋本を含め最低四版が存在する。
②それらには、送り仮名などに細かな改訂がある。
③西尾市岩瀬文庫に所蔵されている一本は、篤胤が夏目甕麿に送った出版前のヴァージョンである。
④国立歴史民俗博物館所蔵の平田家資料中には、出版の前段階のヴァージョンこそ確認されないものの、寄せられた序文が存在し、また「霊能真柱」を講本化しようとした形跡が窺われる。
⑤現行の校註本では、底本の伝来が必ずしも明らかにされていない。

といった事柄が明らかになった。

①、②は『霊能真柱』の内容が一貫して不変であったわけではないことを示唆している。そこからは、『霊能真柱』の諸版中の異同が思想的変化と呼べるレベルのものなのかどうか、という問いが提起される。しかし、⑤のような事実から見れば、現在は『霊能真柱』の流布当初の形を把握することが実証的な議論の前提として不可欠な段階である。確実な底本に拠ったテキストの校訂こそが、基礎的な作業として重要であることが確認された。③からは、校正刷から判る篤胤の議論の初発的形態と、流布時の形との間に、差異があったかどうかの検討が、課題として導き出される。④もまた、こうした霊魂観の流布にあたっての社会史的・思想史的分析の材料になるものであり、歴博への採訪調査が課題となった。

こうした分析を踏まえ、平成20年2月に実施した資料調査の目的地の一つとして西尾市岩瀬文庫を選択するとともに、確実な底本に基く『霊能真柱』の新たな校註作製、およびそのデジタル公開が課題として浮上した。

『霊能真柱』の新規校註は、確実な論拠を提示していくものである一方、一言一句をないがしろにせず読んでいくことで、篤胤の霊魂観を理解するという、最も根源的な研究作業でもある。この課題と向き合うにあたっては、議論の豊饒化・活発化を期して広く研究所に関係する若手研究者を募って研究会を立ち上げることとし、本プロジェクトではその

ための底本の選定及び具体的な運営手順の検討を実施した。こうした作業を継承するため、平成20年度の後継プロジェクトにおいて「霊能真柱を読む会」を立ち上げている。

2、関連書目の集成

『霊能真柱』に限らず、国学的霊魂観を研究するにあたっては、霊魂のあり方について論じた著作や、霊魂観がうかがえる史料の参照が不可欠である。そこで本プロジェクトでは、関連する著作・史料をリスト化する作業に着手した。作業にあたっては、多くの国学者の霊魂論を収載した『神道大系　諸家神道（上）』（小笠原春夫校注　神道大系編纂会　昭和63年）や、『三大考』及びそれをめぐる論争について扱った金沢英之『宣長と『三大考』近世日本の神話的世界像』（笠間書院　平成17年）など、先学の成果を参照しながら、霊魂観を考えるための材料を全体的に把握することに努めた。これはまた後継プロジェクトに継承され、内容の充実が図られている。

3、東三河神葬祭・国学的霊魂観関係資料調査報告

平成20年2月14日から16日にかけて、三河地方への史料調査を実施した（出張者　遠藤潤・三ツ松誠）。「思想」と「行動」の両面からの研究を題目に掲げる本プロジェクトにおける重点的な研究対象地域のひとつが三河地方であり、この地域の平田門人――ひいては全国――の神葬祭運動の展開に重要な役割を果たした羽田野敬雄の創設した羽田文庫の旧蔵本を収める豊橋市中央図書館および西尾市岩瀬文庫を調査先として選定した。具体的な調査史料としては、まず神葬祭関係を第一に考え、次いでその他の霊魂論に関する著述の中から希少性が高いと考えられるものを閲覧することにした。その際、かつて日本文化研究所が昭和50年代に行った事業の中で調査が行われたもの（『日本文化研究所報』111・121・122号　参照）をも含めて、原史料を実見して調査を実施した。

3月14・15日は羽田文庫旧蔵本の大半を収蔵する豊橋市中央図書館を訪れ、館側のご厚意により、現物閲覧およびデジタルカメラによる撮影を行った。次いで、16日には、岩瀬文庫にて調査を行なった。同文庫は私設の図書館として出発し、現在は市立の博物館となっており、近世を中心とした版本・写本の特色あるコレクションを有していることで知られている。施設は平成15年にリニューアルされて、現在も所蔵資料の調査が進められている（岩瀬文庫ホームページ　http://www.city.nishio.aichi.jp/kaforuda/40iwase/）。　ここでは、神葬祭・霊魂観に関する所蔵資料を閲覧し、あわせて開催中の新出資料の展示の見学、および担当者による解説会を聴講した。寺津八幡祠官である国学者、渡辺政香の関係資料をはじめとした解説や富士谷御杖による書き入れ本なども閲覧した。今回の調査では重要資料の閲覧を行って書誌データを採るに留まったが、それらを精査して再調査・撮影を後継プロジェクトで実施していくこととした。

以下、調査したもののなかから、注目される史料を紹介する。

・『幽顕論　上下合巻』写本1冊。前野包廣著、慶応元年大江（竹尾）正胤写。羽田文庫旧蔵本、「幾上」の朱筆あり。

「平田老翁」（篤胤）の顕幽二元的世界像を受容した著述であり、記紀や祝詞等に拠って世界の成り立ちを説く。しかし、人と神とを峻別する点に特徴があり、青人草と天孫降臨に先駆けて幽界に入った神々とを明確に区別して、「現人神」の絶対性・他の人々との断絶性を強調する。この書に見られる神と人とが根本的に異なるものであるとした上で天皇を神の側に置く考え方は、人が死後神になるとする篤胤の見解とはやや力点が異なるように見え、書写者の竹尾正胤の見解にも通じ

るものがある（岸野俊彦『幕藩制国家における国学』　校倉書房　平成10年　など参照）。『国書総目録』によればこれ一本のみ。他に前野には、『国造本紀考説』などの著作がある。

・『たまのみはしら　上下』版本1冊。平田篤胤。

出版以前のヴァージョンが遠江国の宣長門、夏目甕麿に進呈されたもの。後に甕麿から息子の加納諸平へ譲られたと伝えられる。留板ありの上下合本で、墨筆また朱筆による書き入れが散在する。甕麿は文化年間の三大考・霊能真柱論争で本居大平と篤胤を仲介した人物でもあり、『霊能真柱』の現存する最初期のヴァージョンとして注目され、内容の検討が必要である。

4、高玉安兄宛平田銕胤書簡の翻刻

さらに、従来から日本文化研究所の関連プロジェクトにおいて継続している、奥州相馬の篤胤門人の高玉安兄宛の平田銕胤書簡については、本プロジェクトが継承することとなり、一年を通じて定期的に研究会を開催し、解読を進めた。そのうち35通分の書簡については、翻刻を平成20年3月発行の『紀要』第100号に掲載した。

おわりに――成果と課題

近世国学者の霊魂観についてのテキストと、それにかかわる実践を総合していくという本プロジェクトが掲げた目的のうち、テキストについてはある程度の基盤的な調査・研究の進捗を見たが、実践面の考察については不十分であったことは否めない。しかし、本プロジェクトは組織再編に伴う経過措置として期間を1年と定めたものであって、問題意識や研究成果は20年度から3年計画で始まった「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」に直接継承されている。研究会の継続や立ち上げについては20年度に着手されており、実践面の調査も具体的な現地調査計画が立案されている。

「日本神話の神話学的研究」（平成19年度終了）

平藤喜久子

1. はじめに

本プロジェクトは、日本文化研究所の個人プロジェクトとして平成17年度に発足したもので、研究開発推進機構に再編成されたことにともない平成19年3月をもって終了した。ここでは、2年間の研究の概要と成果を紹介することとしたい。

本プロジェクトの主たる目的は、日本神話の神話学的研究の歴史的展開と現状について、宗教学、神道学、人類学など、隣接諸科学との関係や欧米の神話研究との関係から調査・研究し、そのことにより現代における神話学の課題を探ることであった。

共同研究員としてパリ第七大学助教授のアルノー・ブロトンス氏とフランス国立東洋言語文化研究所助教授のジャン-ミシェル・ビュテル氏にご協力いただき、主にヨーロッパにおける日本神話研究の歴史や現状について、ご助言をいただき、現地調査にご協力いただいた。

2. 研究の目的

古事記、日本書紀に描かれたいわゆる日本神話に関して、神話学的な立場からの研究が行われるようになったのは、明治期になってからのことである。この時期、ヨーロッパではマックス・ミュラーやエドワード・タイラー、アンドリュー・ラングらを中心に神話学、宗教学、人類学が盛んとなっていた。この流れの中でチェンバレンやアストンといった外国人研究者たちが記紀神話に注目し、その翻訳、研究をはじめる。そして海外の神話学、宗教学の刺激を受けた高山樗牛、姉崎正治、高木敏雄といった日本人の研究者たちによる神話研究も行われるようになった。

この時期の神話学は、近代的な神話学、宗教学の祖とされるマックス・ミュラーが、研究方法として「比較」を重視して神話や宗教を研究していたため、「比較神話学」と同義であった。その後、神話学はこの比較研究を中心としつつ、方法を多様化させながら現在にいたっている。日本の神話学は、このような海外の神話学の動向と密接に関連しながら、宗教学、人類学、民族学など隣接分野の研究動向とも関わりつつ展開してきた。

本プロジェクトの主たる目的は、そうした明治期以降の日本神話の神話学的研究の歴史的展開と現状について調査し、研究することである。この研究により、人々が日本神話をもとに何を語りたかったのか、現代の神話学が取り組むべき課題はどこにあるのかといった点について知見を得たいと考えた。

研究の遂行にあたって具体的には、以下の四つのテーマを設定し、調査、研究に取り組んだ。（1）明治期における日本神話研究、（2）昭和前期における日本神話研究、（3）日本の神話学と欧米の神話学との関係、（4）現代日本における神話の利用。次にそれぞれの研究テーマごとに、研究内容と成果を紹介していく。

3. 研究の概要と成果

(1) 明治期における日本神話研究

幕末期の開国を機に、日本文化は欧米に広く紹介されることとなった。日本神話も例外

ではなく、欧米の神話研究者からの注目を集めるようになる。古事記、日本書紀の翻訳は、この流れをいっそう推し進めたといえよう。古事記のもっとも早い外国語訳は、1883年に登場する。それはイギリス人のB・H・チェンバレンによる英語訳とフランス人のレオン・ド・ロニによる仏語訳（古事記の上巻のみ翻訳）であった。その後W・G・アストンやK・A・フローレンツによる日本書紀の翻訳が刊行された。彼ら明治期の外国人研究者たちの神話研究を、神話学史の中に位置づける試みは、未だ十分ではない。そこで「外国人による日本神話研究の歴史とその影響に関する研究」という研究課題で平成18年度より科学研究費補助金（若手研究B）を得て、本プロジェクトと連動して研究を進めた。

日本人による神話研究については、明治32年に高山樗牛が「古事記神代巻の神話及歴史」という論文を発表したことを機にはじまったとされる。この時期樗牛は、日本主義に傾倒していたため、彼の神話研究と日本主義の関係について研究を行った。その成果については、Ecole Pratique des Hautes Etudes en Sciences Sociales が開催した、シンポジウム《Religion, Religious Studies and Nationalism in Contemporary Japan》で発表した。また、この発表をもとに論文を“Study of Japanese Mythology and Nationalism”（國學院大學21世COEプログラム『日本文化と神道』第3号）としてまとめた。

(2) 昭和前期における日本神話研究

明治期以降の日本の神話学には、日本神話の系統を明らかにすることを目的とした研究と、日本人の民族性を論じることを目的とした研究という二つの潮流があるといってよい。この二つの流れが、日本が植民地を持っていた時代とどう関わっていたのかという課題に取り組んだ。研究対象者として松村武雄、松本信広、三品彰英、岡正雄を取り上げ、彼らがこの時期に神話の比較研究を通じて、日本の植民地支配拡大を正当化する結論を導き出し、また神話から民族性を論じて天皇崇拝を宣揚するような論文を書いていたことを明らかにした。そしてその研究が戦後の神話学にどう接続したかを分析した。その成果は、オーストリア国立科学アカデミーで行われたシンポジウム «Shinto Studies and Nationalism» や本学の近代問題研究会などで発表した。なお本研究は、筆者が研究分担者となっている科学研究費補助金によるプロジェクト「ファシズム期の宗教と宗教研究にかんする国際的比較研究」（研究代表者、竹沢尚一郎）とも連携しており、プロジェクトの研究会でも報告した。三品彰英の朝鮮神話と日本神話の比較研究については、「植民地・朝鮮と日本の比較神話学―三品彰英の朝鮮研究―」（『東アジアの古代文化』135号、2008年5月）にまとめた。

(3) 日本の神話学と欧米の神話学との関係

日本の神話学は、先にも述べたように欧米の神話学や宗教学、人類学、民族学の研究成果を取り入れつつ展開してきた。本研究では、日本の神話学が欧米の神話学とどう関わってきたのか、研究成果をどのように日本神話の理解に援用してきたのかについて、宗教学者ミルチア・エリアーデの学説を例に調査、研究した。研究成果は、平成18年に韓国宗教文化研究所で行われたKorea-Japan Joint Seminar on Religious Studies 2006 “Reconsidering Eliade from the East Asian Perspectives”や中央大学人文科学研究所における講演などで発表した。韓国での報告は、“Japanese Mythology and Eliade”（The Critical Review of Religion and Culture, 2007, 本文は韓国語）にまとめられている。

(4) 現代日本における神話の利用

現在、古典的な神話世界を取り入れたマンガやアニメ、ファンタジー小説、コンピューターゲームの作品が多く作られており、その中には外国語に翻訳され、海外で人気を得ているものもある。そのため、国内外を問わず多く人々が、こうした作品を通して神話に関心を持つようになった。神々に対するイメージも、アニメやゲームの中の神々の姿の影響を受け、変化しつつあるように感じられる。本プロジェクトでは、日本社会における神話の利用法についての研究を、現代の神話学の重要な課題の一つと位置づけ、研究を行った。この研究成果は平成18年に北京大学とハーバード大学が共催したInternational Conference on Comparative Mythologyや同年の日本宗教学会学術大会で発表した。また以下の論文にもまとめている。「現代日本における神話」(『日本文化と神道』第3号)、「ロールプレイングゲームの中の神話学」(『宗教と現代がわかる本』平凡社)、「グローバル化社会とハイパー神話―コンピュータRPGによる神話の解体と再生―」(松村一男、山中弘編『神話と現代』リトン)。

4. おわりに

本研究では、日本神話の神話学的研究の歴史的展開を明治期から現代にいたるまで調査、研究することを目的としていたが、当然のことながら2年間でまとめられるようなものではない。残された課題も多く、また新たな課題も見つかった。とくに(4)現代日本における神話の利用についての研究の中で、グローバル化時代においては宗教的表象の扱い方が問題になるケースが多く、宗教文化教育の文脈の中で神話の扱いについても考察する必要があると感じられた。

なお今後は日本文化研究所の「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトや科学研究費補助金による研究プロジェクトの中で、研究を継続させていく予定である。平成20年11月には日本文化を知る講座として「現代人にとっての神々の物語―教材としての神話―」を企画しており、本プロジェクトの研究成果の公開の場としたいと考えている。

オーストリア科学アカデミーアジア文化・思想史研究所主催国際シンポジウム Shinto Studies and Nationalism に参加して

遠藤　潤

2007年9月12日から14日の3日間、オーストリア科学アカデミーアジア文化・思想史研究所(Institute for the Cultural and Intellectual History of Asia, Austrian Academy of Scieces)主催の国際シンポジウム Shinto Studies and Nationalism がウィーンの同研究所で開催され、本研究所からは平藤喜久子、遠藤潤の二人が参加して研究報告を行った。

今回のシンポジウムは、アジア文化・思想史研究所教授のベルンハルト・シャイド(Bernhard Scheid)氏の立案によるものである。シャイド氏は、吉田神道についての研究を進めるとともに、ドイツ語圏をはじめとして、近代ヨーロッパにおける神道研究についても強い関心をもっている。シャイド氏とは、個人的には2001年2月にテュービンゲン大学日本文化研究所のシンポジウムで初めてお会いした。その後、國學院大學21世紀COEプログラム「神道・日本文化の国学的研究発信の拠点形成」の神道・日本文化国際シンポジウムでは2度にわたって研究報告をしていただくなど、われわれの研究所とも関係が深い研究者である。

趣旨説明によれば、今回のシンポジウムは、欧米の戦前の神道研究においてドイツ語圏の研究者による研究は、重要な位置を占めていたのに対して、戦後は研究が停滞したこと、またドイツに限らず，戦後は日本の国家主義の影響によって神道の否定的イメージが強まり、研究領域としてもタブー視されるなどしたという状況認識に立ったうえで、これからのあるべき神道研究のあり方を模索するものである。欧米および日本からの発題者が発表し、それぞれに対してディスカッサントがコメントおよび論点を提示するという形式で進められた。参加者および発表タイトルは下記のとおりである。使用言語は英語・日本語。

■9月12日(水)

Welcome: Helmut Krasser(オーストリア科学アカデミー　アジア文化・思想史研究所所長)

Opening address: Bernhard Scheid

林淳(愛知学院大学)

Japanese Orientalism in Shinto Studies, Religious Studies, and Oriental Studies(神道研究・宗教研究・オリエント研究における日本のオリエンタリズム)

Discussant: Sepp Linhart(オーストリア、ウィーン大学)

■9月13日(木)

遠藤潤(國學院大學)

Shinto Studies and Shrine Policy in the First Half of the 20th Century: The Case of Miyaji Naokazu(20世紀前半の神道研究と神社行政―宮地直一を焦点として)

Discussant: Mark Teeuwen(ノルウェー、オスロ大学)

Will Hansen(アメリカ、サンディエゴ州立大学)

From Nationalism to Spiritualism: Rehabilitating the Study of Hirata Atsutane（ナショナリズムからスピリチュアリズムへ—平田篤胤研究の復権）
Discussant: Mark Teeuwen

平藤喜久子（國學院大學）
The Study of Japanese Mythology in the Early Showa Period（昭和前期の日本神話研究）
Discussant: Bernhard Seidl（オーストリア、ウィーン大学）

磯前順一（国際日本文化研究センター）
The "Religious/Secular" Dichotomy in Modern Japan: On Arguments of State Shinto（近代日本における「宗教／世俗」—国家神道論をめぐって）
Discussant: Mark Teeuwen

Jean-Pierre Berthon（フランス、国立社会科学高等研究院）
The Missionary, the Jurist and the Ethnographer: French Japanology on Shintô at the Beginning of the 20th Century（宣教師、法律家、人類学者—20世紀初頭におけるフランスの日本学における神道研究）
Discussant: Wolfram Manzenreiter（ウィーン大学）

■9月14日（金）
Klaus Antoni（ドイツ、テュービンゲン大学）
Kojiki Studies and Shintô Nationalism（古事記研究と神道ナショナリズム）
Discussant: Isabelle Prochaska（ウィーン大学）

Kate Wildman Nakai（上智大学）
Coming to Terms with "Reverence at Shrines": Sophia University, the Catholic Church, and the 1932 Yasukuni Shrine Incident（「神社参拝」の受諾—上智大学、カトリック教会、1932年靖国神社事件）
Discussant: Susanne Koppensteiner（ウィーン大学）

Michael Wachutka（テュービンゲン大学）
"A Living Past as the Nation's Personality": Hermann Bohner's Comparison of Kitabatake Chikafusa's Jinnô-shôtôki with Arthur Moeller van den Bruck's Das Dritte Reich（「国家の人格」としての生命のある過去—ヘルマン・ボーナーによる北畠親房『神皇正統記』とアルトゥール・メラー＝ファン＝デン＝ブルック『第三帝国』の比較）
Discussant: Isabelle Prochaska

Bernhard Scheid（オーストリア科学アカデミー）
In Search of Lost Essence: Ideological Topoi in German Shinto Studies around World War II（第二次世界大戦前後のドイツの神道研究におけるイデオロギー的トポス）
Discussant: Bernhard Seidl

Concluding Discussion

一瞥していただければおわかりのように、各研究者のテーマは多岐にわたっており、Concluding Discussion ではまとまった結論へ向かうというかたちではなく、各発表に含まれている、より広い共通の問題への展開の可能性について相互に理解を深めることが行われた。近代の神道研究について、日本での状況と欧米での状況の双方にわたる研究発表が行われたわけだが、それは結果的にはあわせ鏡のように同時代における互いの思想や社会の状況を照らしだすものとなった。今後、この時期の神道研究についての考察を深めて

いくためには、議論が行われた場所をある程度類型化したり、あるいは論説の対象を明確にするなど、さまざまな整理の作業が必要になると考えられるが、今回のシンポジウムはその多様性において、あるいは内容の具体性において、そのための重要な基点になりうる。参加者にはチェコからの研究者もおり、聞けば東欧における学術研究の拠点としてウィーンは中心的な位置にあるという。歴史的にも文化的にも、この地は地理的に興味ぶかい位置にあるのであり、神道・日本文化をめぐる国際交流の今後にも期待ができるシンポジウムであった。このシンポジウムの成果はいずれ書籍として刊行される予定である。

フォーラム「画像資料の公開と知的財産権」

黒﨑浩行

はじめに

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトは、平成20年3月8日（土）、画像資料研究フォーラムXI「人文科学と画像資料研究―画像資料の公開と知的財産権―」を開催した。

本フォーラムは、國學院大學学術フロンティア事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」（平成11～18年度）の企画として、平成15年度より継続してきたものである。これまでの成果は研究報告『人文科学と画像資料研究』（第1～5集）に収録されている。

11回めのフォーラムでは、学術資料における知的財産権をめぐる状況を具体的に把握し、今後の展開に向けて議論を深めることを目標とした。

報告1：安西晴美氏「文化財画像の知的財産保護試案」

安西氏は、國學院大學の事務局財務部管財課主任であるとともに、東京理科大学専門職大学院総合科学技術経営研究科に籍を置いて知的財産戦略を専攻し、「日本ブランドの強化」という観点から日本の伝統文化を知的財産として保護する施策について研究してきた。この報告では、対象を文化財画像にしぼり、「文化財画像に著作権はあるのか」、「文化財画像を誰でも自由かつ無償で利用していいのか」、「文化財画像をどのように保護すべきか」について検討した。

文化財自体に著作権がない場合、それを撮影した写真画像に著作権はあるのだろうか。平面的な絵画・書などを撮影した写真は、創作性がないものとして著作権がないものとみなされる。また、有体物としての原作品の所有権は、無体物である著作物に及ばない。

一方、文化財画像のデジタルアーカイブが国内外の機関で公開されているが、これらの画像は誰でも自由に、無償で利用できるのだろうか。著作権の切れた絵画の高画質スライド写真の製作に要した努力は、オリジナルに忠実なものを製作するための労力であり、そこに創作性はないとして、著作権が認められなかった判例がある。

それでは、デジタルアーカイブの製作者や、原本の保管・修復に多大な費用をかけている文化財保有者と、画像の活用によって利益を得る利用者との間で、公平な費用負担を図るには、どうすればよいか。安西氏は、コピープロテクトによる技術的な保護のほかに、商標登録されたマークを画像に付加することにより無断使用を防ぐ方法と、著作隣接権の考え方を応用して新たな制度を導入するという方法を提示した。

報告2：田良島哲氏「文化財のデジタルアーカイブにおける実務的課題」

田良島氏は、東京国立博物館情報管理室長としての実務経験をもとに、博物館における写真画像の作成・管理・提供の経緯と、デジタル化による変化、画像提供業務のビジネス化について説明した。

東京国立博物館では、館内の写真室で所蔵

品の撮影を行ってきた。また、特別観覧（写真撮影）として、展示室で所蔵品を直に見るかわりに写真撮影を行いたいという要望に応えてきた。さらに写真を撮影するかわりに、保存されている写真原板を貸すという仕方でも応じてきた。今日これらの写真原板はデジタル化されており、画像情報管理システムを構築して、所蔵品管理システムと連携している。

特別観覧（原版使用）の手続きは行政的な許可行為だが、デジタル画像の利用許諾を民事的な契約行為とすることで、事務の合理化を図った。画像の作成・供給は東京国立博物館、画像利用の受付・提供はＤＮＰアーカイブ・コムという役割分担を行っている。

これによるメリットとしては、画像利用許諾の対応が速くなったこと、利用範囲が拡大したこと、博物館側の事務が軽減されたこと、博物館の自己収入が増加したことが挙げられる。課題としては、画像の品揃えのさらなる充実、料金設定の判断が難しいことなどが挙げられる。

報告３：小川直之氏「学術資料アーカイブスの今後」

小川氏は、これまでの学術フロンティア事業の成果を今後どのように展開させていくか、そのさいの知的財産権の位置づけを説明した。

写真は、文字記録ではとらえられなかったものをとらえ、表現する技術として人文科学においてその有効性が見いだされてきたものであり、今後は写真以外の音声資料などもアーカイビングし、これらを体系化していくことで研究成果としての付加価値をつけることを目指していく。

次に、学術資料アーカイブスを大学が維持・運営するさい、経営的問題の解決法として、知的財産権の保護施策が視野に入る。それと同時に、歴史文化資料を知的財産として認識し、図書館や博物館などの機関や、地方自治体等の文化財保護・文化事業においてその適切な保護・活用を図ることのできる人材を育てる知財教育を、大学としてカリキュラム体系化することが望まれる。

コメント１：平藤喜久子氏

平藤氏は、*Encyclopedia of Shinto*（改訂英訳版『神道事典』）のオンライン公開に携わってきた経験をもとに、コメントと質問を行った。

まず、大学としての知的財産ポリシーを定める必要性を示した。これは、著作権法上の「職務著作」として國學院大學が著作者となる場合があることによる。そして、大学が発信する情報の権利者名を明示すること、大学が発行する雑誌に掲載された論文の二次利用についてのルールを一元化することが必要であるとした。

文化財画像については、学術的利用、教育的利用を妨げない形での提供が望ましいが、博物館などの提供機関でそのための配慮はなされているか、また知的財産権に関する制度運用上でそのような配慮があるかを質問した。

コメント２：齊藤智朗氏

齊藤氏は、校史・学術資産研究センターでの経験にもとづき、公開する資料をめぐる「相手の権利」を視野に入れるべきことを示した。たとえば神社文書の写真では、撮影時点において個人対個人の信頼関係で可能となったものの成果物が、そのまま組織対組織の関係に移行できるかという問題がある。また、祭礼・神社関係写真では肖像権の問題がある。これらの過去の研究活動で遺された資料の権利関係を厳密に処理したうえでないと公開できないとすれば、何もできなくなるかもしれない。そして、知的財産権の問題を取り扱う法律の専門家を含めた部局を設置すべきであるとし

て、文部科学省の大学知的財産本部整備事業に触れた。

討論

知的財産の専門部局について、安西氏は、理系の大学ではその必要性がすでに大きな問題となっていることを指摘した。また、大学の研究・教育活動で生み出された著作物は、著作権法第15条の「職務著作」の規定から、教員個人ではなく大学が著作権を有するという解釈が可能だが、あいまいになっているのが実情であるとした。

教育的利用への配慮について、田良島氏は、著作権法第35条にもとづいて応じており、非営利目的全般についても、インターネットで無償提供することが、コストを考えても互いに楽であると応答した。また、文化財画像の教育的利用へ向けた大学としての取り組みについて、小川氏は、学内者のＩＤでログインすれば、ウェブで一般公開されているよりも詳しい情報を入手できる環境（ユニバーシティ・ドメイン）を、文化財画像についても構築すべきとした。

公開する資料をめぐる「相手の権利」についての齊藤氏の懸念をめぐって、フロアから中村耕作氏（研究開発推進機構リサーチ・アシスタント）は、学術資料データベースの公開以来、特にその種の問題は起こらなかったことを指摘した。

まとめ

知的財産権という観点から画像資料の公開をとらえることで、研究・教育機関としての大学の社会的使命があらためて浮き彫りになった討議であった。今後は、知的財産権保護の施策導入や、文化財画像を活用した知財教育の充実を図ることが、画像資料の公開を有効に進めるにあたって求められよう。

研究論文

霊能番組への関心と宗教情報リテラシー
―第9回学生宗教意識調査の結果を中心に―

井上順孝

はじめに

テレビで流される霊能番組に、若者たちはどの程度関心を抱き、またどのような影響をこうむっているのだろうか。あるいはインターネットが流布したことで、広い意味の宗教情報との接点は、どのように増えてきているであろうか。情報化の進行とともに大きな課題となると考えられる宗教情報リテラシーという問題は、宗教研究においても、重要な位置を占めつつあると考えられる。

宗教学のなかでも、宗教社会学や宗教心理学と区分される分野は、このテーマととりわけ深く関わると思われるが、具体的に一定のデータなり観察事実なりに基づいての本格的な研究はこれからという段階である。ここでは、2007年の4月から6月にかけて学生に対して実施した第9回学生宗教意識調査(1)の結果を中心に、過去の一連の調査結果も参照しながら、この問題への手がかりを考えてみたい。

「宗教と社会」学会の宗教意識調査プロジェクトと國學院大學日本文化研究所の宗教教育プロジェクトとの合同により、1995年に学生への宗教意識調査(以下「意識調査」と表記する)が開始された。2005年からは、宗教意識調査プロジェクトと日本文化研究所の総合プロジェクトとの合同になり、2007年度の調査で9回を数える。さらに1999年からは、やや小規模ながらほぼ同じ内容の調査を韓国でも実施、比較を行なっている。2007年度までに4回の日韓比較調査(以下、「日韓比較調査」と表記する)を実施した。毎回基本的質問は同じであるが、それぞれの回の調査に独自の質問も設けられている(2)。

2007年の調査では宗教文化教育に関わる質問をいくつか設けたが、それとともに、いわゆるテレビの霊能番組等についても質問した。すなわちテレビ朝日系の番組「オーラの泉」に関して3つの質問項目を設けた。また細木数子の占い番組に対する意識や、宗教やサブカルチャー関連のインターネット・サイトの利用度などについても調べた。

霊能番組に関わるような質問は今回が初めてというわけではない。これまでの「意識調査」でも、いわゆる霊能者を登場させるテレビ番組(以下、霊能番組と表現していく)についての質問、またインターネットの利用状況や、その内容についての質問をときおり含めてきた。そこで、まずテレビの霊能番組に関する調査結果から見られる傾向をいくつか指摘し、ついでインターネットの利用の広まりと、どのような宗教・サブカルチャー関連のサイトに関心をもっているかについて触れる。その上で、情報時代の宗教情報リテラシーとの関わりについて言及する。

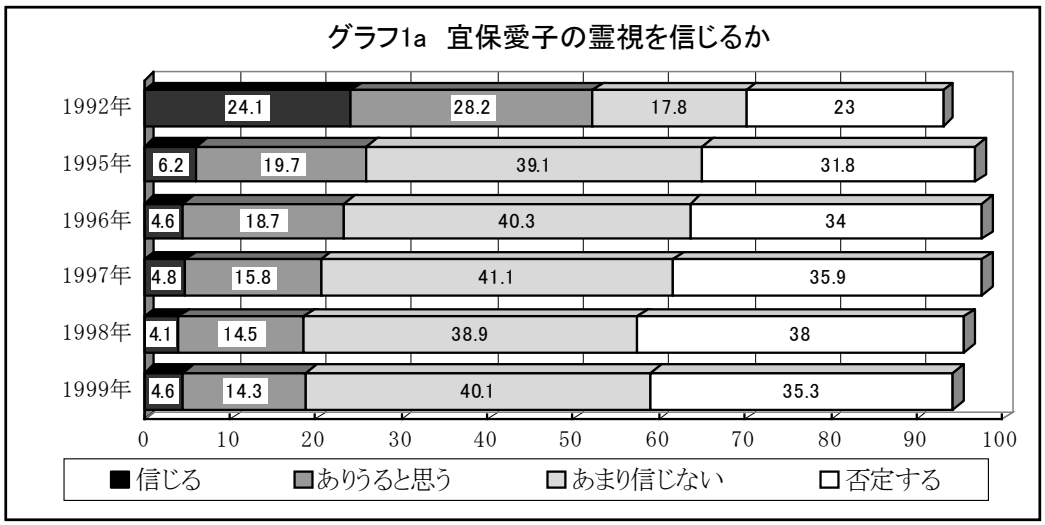
1. テレビの霊能番組

テレビの霊能番組に関しては、1990年代に霊能者としてしばしばテレビに登場した宜

保愛子について何度か質問している。1995年の第1回の「意識調査」に先立って、1992年に國學院大學日本文化研究所の宗教教育プロジェクトが[3]、宗教教育に関するアンケート調査を実施した。全国の32の大学から4,005名の有効回答が得られた。ここでは宗教系の学校の学生とそうでない学校の学生との間で、宗教に関わる事柄にどのような意識の違いがみられるかを中心的に調べたのであるが、その中に「宜保愛子の霊視」を信じるかどうかの項目が設けてあった。この結果は興味深いもので、過半数の学生が「基本的に信じている」もしくは「信じているわけではないが、ありうることだとは思っている」という肯定的な回答であった。そこで、1995年からの一連の「意識調査」でも同様の質問をし、99年までの5回の調査において、宜保愛子の霊視に関する質問項目を設けた。

第1回の意識調査を開始する直前の1995年3月にオウム真理教による地下鉄サリン事件が起こった。以後しばらくの間テレビ界は明らかに霊能番組を自粛したのであり、この種の番組がかなり少なくなった。番組を自粛するのみならず、霊能者を批判するようなスタイルも増えた。宜保愛子の霊視も否定的な扱いをされる場合が出てきた。霊能番組の様相が旧に復するのは事件後数年たってからである。

それゆえ、宜保愛子の霊視に関する調査は、テレビ局の霊能番組の扱いの変化が、彼女の霊視の信頼度にどう影響をしたかを考える一つのデータを提供する結果となった。これについては、拙著『若者と現代宗教』(ちくま新書、1999)において紹介しておいたが、92年には肯定派が5割を超えたものが、95年以降はしだいに減り、98、99年には2割弱となった。グラフを参考のため掲げておく[4]。(グラフ1a参照)

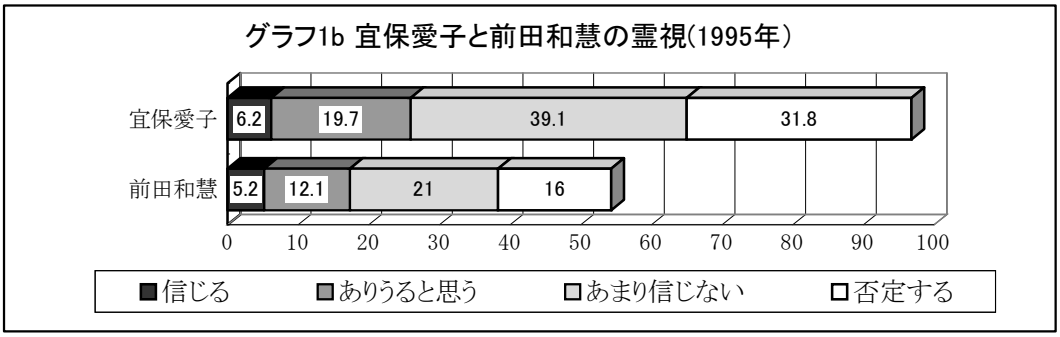


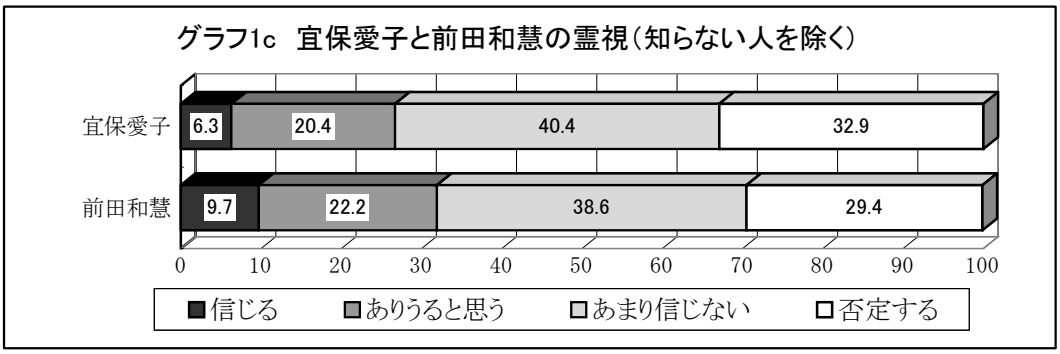
「意識調査」の結果、性別で比較すると、女性の方が霊能を信じる割合が高いことが分かった。宜保愛子の霊視についての質問では、回答の選択肢は「信じる」「ありうると思う」「あまり信じない」「否定する」、それに「その事柄を知らない」の5つあった。このうち「信じる」と「ありうると思う」を合わせたグループを肯定派、「あまり信じない」と「否定する」を合わせたグループを否定派と呼ぶことにする。そこで女性について肯定的な回答の割合がどう変化したかを調べると、92年の調査では肯定派が58.7%に達していたのが、95年

以降の「意識調査」ではしだいに数字が減少する傾向がうかがえ、99年には20.0％とちょうど2割にまで減っている。1992年と比較すると、3分の1ほどまでに減ったということである。肯定的から否定的への変化の度合いが男性よりも若干大きいということがわかる。

霊能者に関しては1995年に宜保愛子と並べて前田和慧の霊視についてどう思うかを質問している。当時前田和慧は、黄色い衣を身にまとって登場し、祟りの原因を霊視したりし、宜保愛子ほどではないが、何回かテレビ番組に登場していた。結果は、グラフ1bのようになった。宜保愛子の方が肯定派の絶対数が多いが、これは前田和慧は宜保愛子ほどテレビの登場回数が多くなく、知名度が低かったからと考えられる。そこで知らないと答えた人や無回答の人を除いて比較してみるとグラフ1cのようになる。これをみると大差なく、むしろ前田和慧の方が若干肯定派が多い。

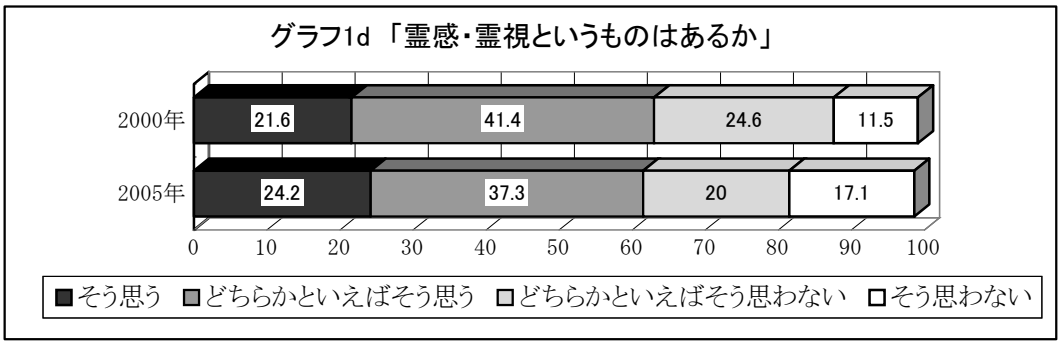
性別では前田和慧に関しても、女性の方が信じる割合がいくらか高い。このように、個人名を特定したうえで、霊視の信頼度を聞くと、95年時点においては、2～3割程度が肯定派であったと推定できるのである。





2000年には霊視を行なう人物を特定せず、一般的に「霊感・霊視」を信じるかどうかを聞いたところ、肯定的な評価をする数値はだいぶ増えた。「信じる」と答えたのが21.6％、「ありうると思う」が41.4％、「あまり信じない」が24.6％、「否定する」が11.5％であった。肯定派は6割に達した。霊能者個々人への評価という要素を取り除いてみると、こうした事柄への肯定的評価は過半数を占めることが分かった。

2005年には少し表現を変え、「霊感・霊視というものはある」かどうか質問した。「そう思う」が24.2％、「どちらかといえばそう思う」が37.3％、「どちらかといえばそう思わない」が20.0％、「そう思わない」が17.1％であった。前二者を肯定派とすると、霊感・



霊視があるという考えへの肯定派はやはり6割を超えた（グラフ1d参照）。

1995年にはまた、インドの霊能者とされるサイババについても質問した。物質化ができる超能力者といったような紹介もなされ、指をこすり合わせるようなしぐさとともに、突然ビブティ（聖なる灰）を生じさせる場面がテレビでも何度か放映された[(5)]。

「サイババについて知っていますか」という質問では、74.5％が「はい」と答えている。男女差もほとんどなく、2％程度男性の方が多かった。当時サイババを扱ったテレビ番組はいくつか放映されており、約4分の3が知っていたことが分かる。知っていると答えた学生を対象に次のような意見を示し、それぞれに同意できるかどうかを聞いた。

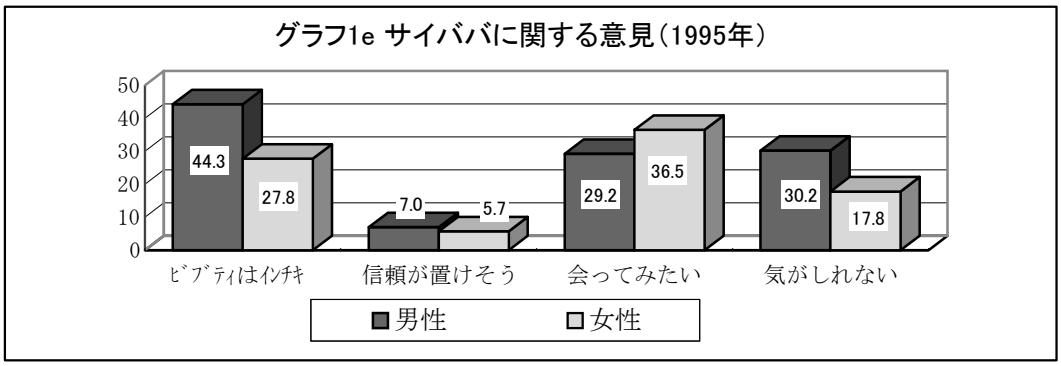
「ビブティ（聖なる灰）を出すのはインチキだ」

「信頼の置けそうな宗教家である」

「もし日本に来るなら、ぜひ会ってみたい」

「このような人物を信仰する人の気が知れない」

結果はグラフ1eに示すとおりであるが、これをみると、サイババの評価にも性別による差がみてとれる。「ビブティ（聖なる灰）を出すのはインチキだ」という否定的な意見に対しては男性の方が女性の約1.6倍の多さである。「このような人物を信仰する人の気が知れない」も否定的な意見だが、これも男性が約1.7倍の多さである。「もし日本に来るなら、ぜひ会ってみたい」という肯定的な意見は女性の方が男性の1.25倍である。ただ、「信頼の置けそうな宗教家である」はいずれも低い値だが、男性が少しだけ多い。サイババについては単純に女性の方が肯定的とは言い難い面もあるのだが、全体としては男性が否定的傾向にあると言えよう。



2.「オーラの泉」への評価

霊能者に関する関心や信頼度は一定程度あることが分かったので、2007年の調査では、江原啓之と美輪明宏が登場するテレビ朝日系の番組「オーラの泉」への関心を調べるため、３つの質問を設けた。まずこの番組の知名度を確かめるために「テレビで『オーラの泉』という番組がありますが、これについてあなたは次のどれですか。」と質問した。回答の選択肢は次のとおりである。

「いつも見ている」

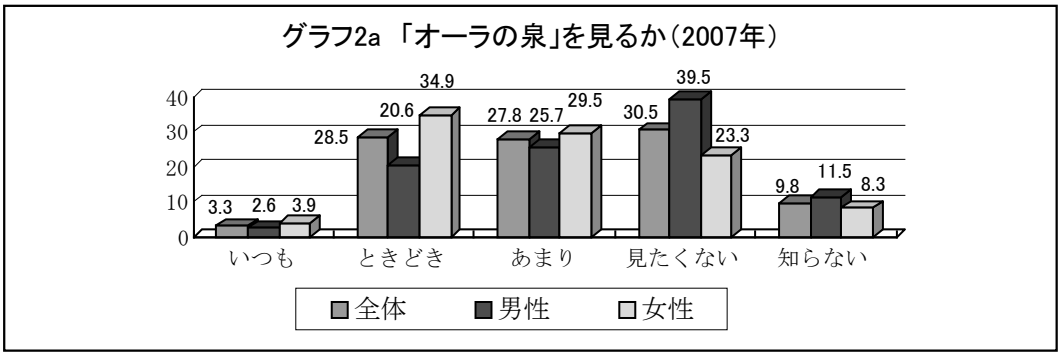
「ときどきは見る」

「あまり見ない」

「見たいと思わない」

「この番組のことは知らない」

有名な番組であるので、この番組のことを知らない人は1割しかいなかった。見ている頻度であるが、さすがに「いつも見ている」は3％少々に過ぎないが、「いつも見ている」「ときどきは見る」を合わせると、3割強になる。男女差があり、女性の方が見ている割合が高く、男性の1.6倍ほどになっている。逆に「見たいと思わない」という否定的な態度は、男性が女性の1.7倍ほどになっている（グラフ2a参照）。



次に、「この番組では霊について語ることが多いですが、そこでの霊の話を信じますか。」という形で、その番組でよく行なわれる霊視等への信頼度を探ろうとした。これについての回答では、男女差はさらに顕著になっている。「信じる」というはっきりした肯定が、女性は男性のほぼ2倍である。「どちらかといえば信じる」という割合も1.5倍近い。逆に「信じない」というはっきりとした否定的意見は男性が女性の2.2倍強となっている。肯定派と否定派の割合については、明らかな男女差がある。（グラフ2b参照）

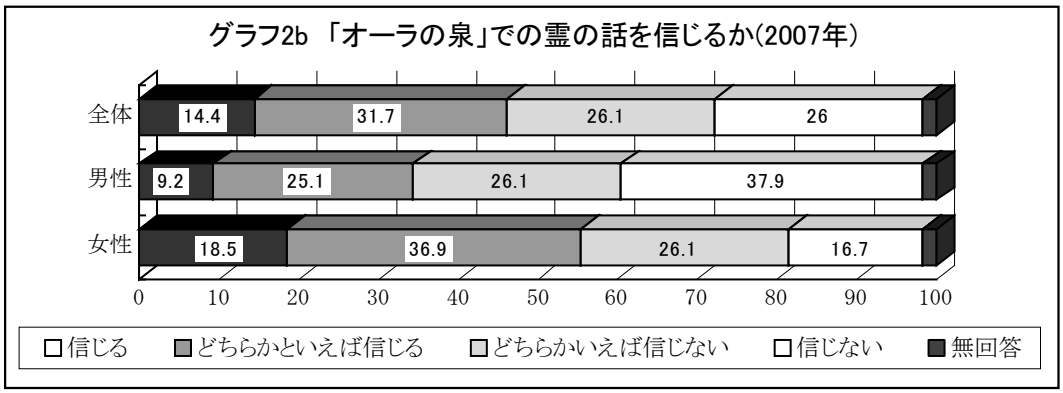
3つ目の質問は「この番組はテレビ局のやらせだと思いますか。」というもので、こうした番組についてどういう判断をしているか、直接的に質問した。これは、情報リテラシーに関わることであり、この類のテレビ番組に対しどの程度の信憑性を感じているかを知るためのものである。回答の選択肢は次のとおりである。

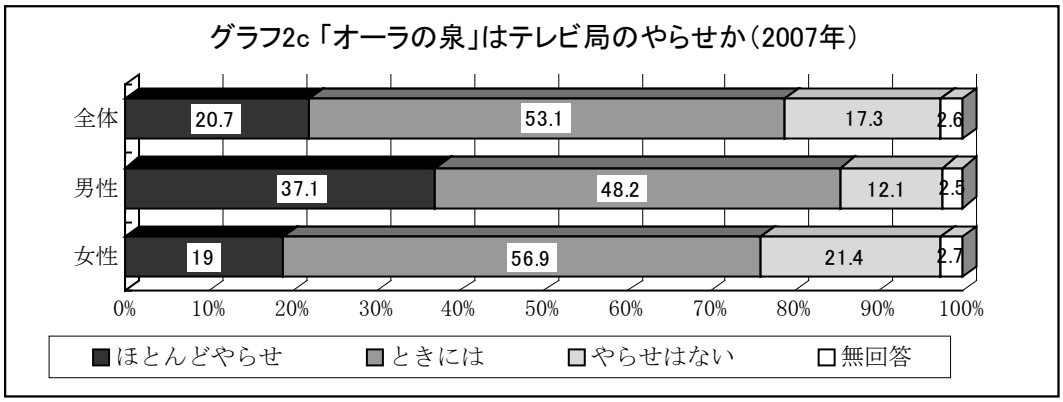
「ほとんどやらせである」

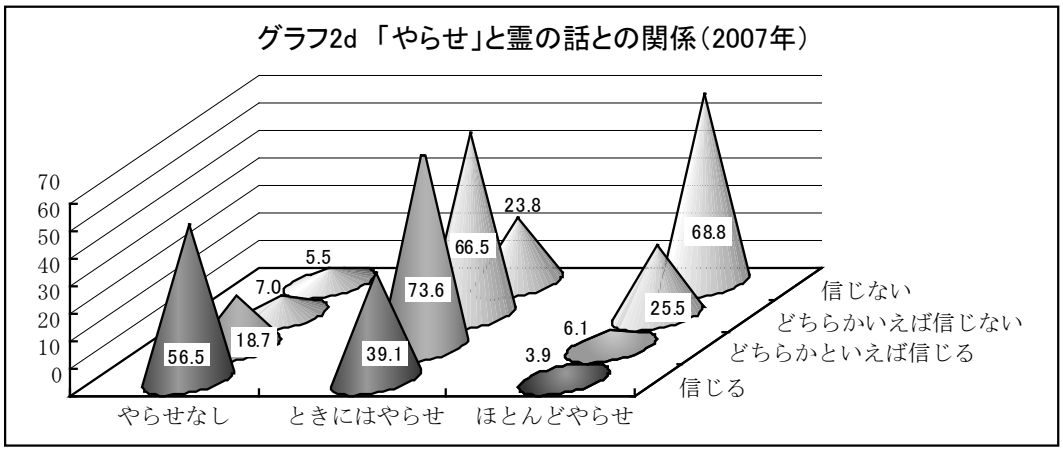
「ときにはやらせがある」

「やらせはない」

「ほとんどやらせである」と考えるのは、男性で37.1％、女性で19.0％と、男性が女性の2倍近い数値である。これに対し「やらせはない」は、女性が男性の1.7倍強になっている。男女とも半数程度が「ときにはやらせがある」とやや懐疑的に見ているが、明確な肯定もしくは否定の表明では男女差が著しい。(グラフ2c参照)





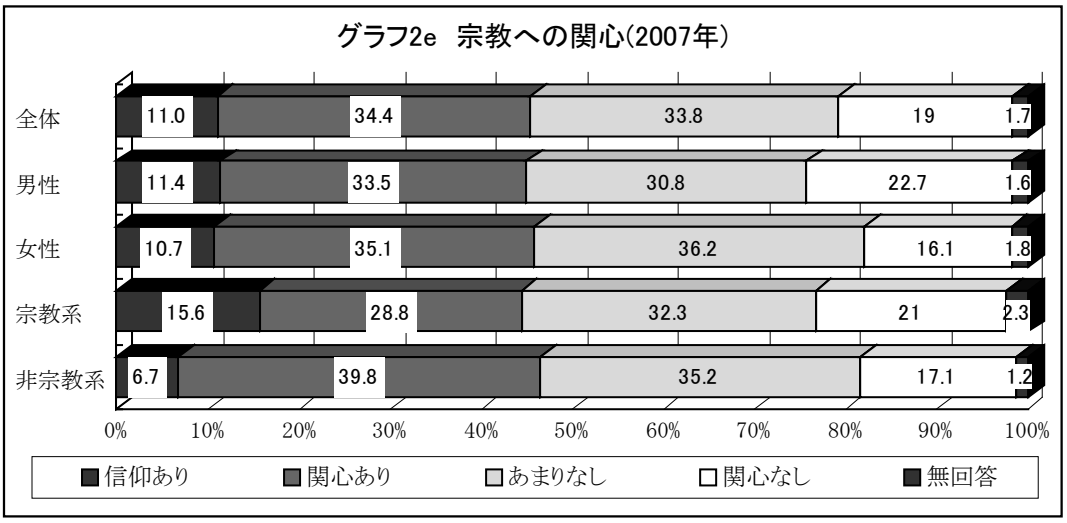


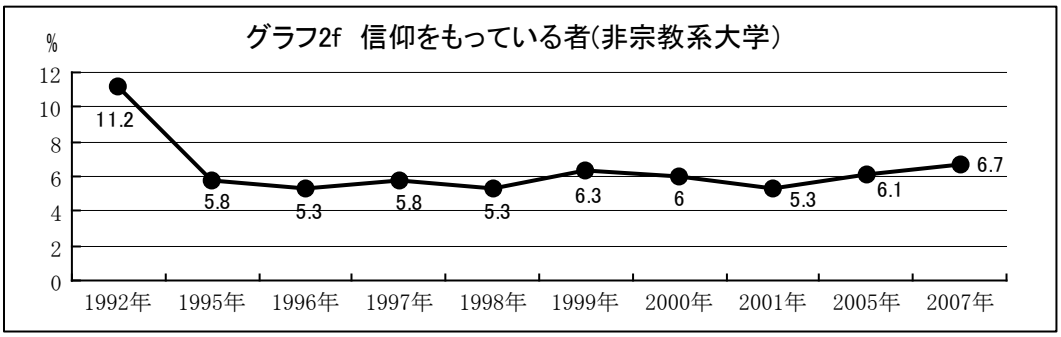
こうした番組がやらせであると考えるかどうかと、霊の話を信じるかどうかには相関性があると考えられる。そこで2つの質問結果をクロス集計してみよう。グラフ2dに明ら

かなように、やらせがあると考えるグループは霊視を信じない傾向が強く、やらせがないと考えたグループは信じる傾向が強い。霊の話を「信じる」グループでは、「やらせはない」と答える割合が高く、56.5％に達する。そして「ほとんどやらせ」と答えるのは3.9％に過ぎない。

これに対し、霊の話を「信じない」グループでは、「やらせはない」はわずか5.5％であって、「ほとんどやらせ」と答えたのが68.8％である。「どちらかといえば信じる」「どちらかといえば信じない」というややゆるやかな肯定もしくは否定をするグループは、「ときにはやらせがある」という中間的な回答を選ぶ割合がもっとも高く、それぞれ73.6％、66.5％である。２つの質問に対する答えの相関性は明らかである。

霊の話を信じる人は信仰心もあるのだろうか。2007年の調査では信仰をもつ人の割合は、全体で11.0％、非宗教系の大学に限ると6.7％であった（グラフ2e参照）。宗教系の学校を含めた全体での数値は、創価大学や天理大学の回答者数によってやや変動の幅が大きくなるので[(6)]、非宗教系大学だけをとりだした方が、全体の推移を推定しやすくなる。非宗教系の大学の回答者だけ信仰をもっているグループの割合をこれまでの調査結果と比較したのがグラフ2fであるが、これまでとそう大きな変化はみられないものの、2007年では微増の傾向もみてとれる。





宗教の関心の度合いについて、「意識調査」では、次の４つのグループのどれにはいるかを答えてもらっている。

「現在、信仰をもっている」

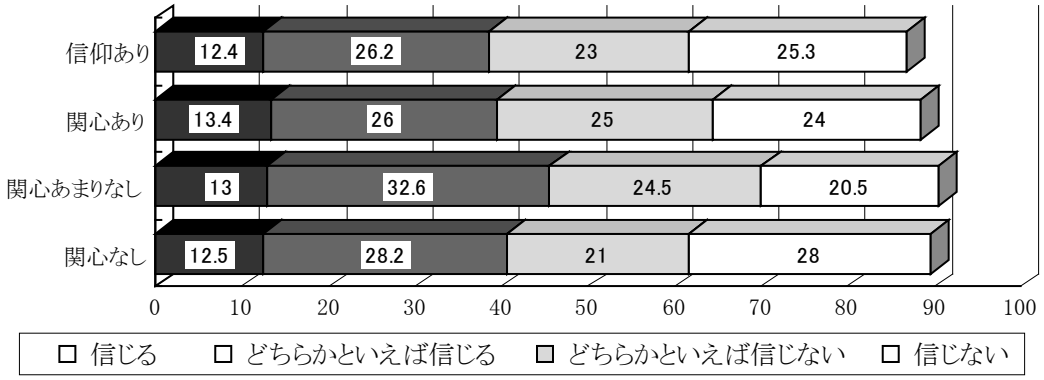
「信仰はもっていないが、宗教に関心がある」

「信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない」

「信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない」

この４つのグループそれぞれと、霊の話を信じるかどうかをクロス集計したのがグラフ2g である。これをみると、とくに強い相関関係は見てとることができない。強いて言えば、「信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない」というグループが、霊の話を「どちらかといえば信じる」という割合が若干高めである。つまり、霊を信じるかどうかは、信仰心とはあまり関係ない、さらには信仰がない方が関心が強かったりする傾向があるということである。

グラフ2g　信仰の有無と霊の話を信じるかのクロス集計



では「オーラの泉」の番組に対する意見と、スピリチュアルへの関心とはどういう関係になるであろうか。回答者のスピリチュアルに対する意見を調べるため、2007年の調査では「『スピリチュアルな』という表現であなたが感じるのは次のどれですか。」という質問をした。回答の選択肢として、次の５つを設けた（複数回答可）。

「精神的深みを感じる」

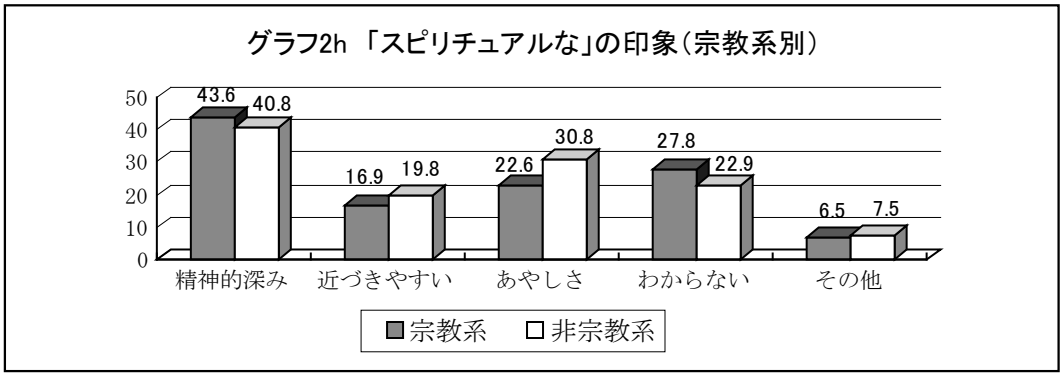
「近づきやすく感じる」

「あやしさを感じる」

「よくわからない」

「その他（具体的に　　）」

「その他」を選んで具体的に記述した回答者が267名いたが、そのうち江原啓之に言及したのが４分の１近くの66名であった。スピリチュアルという言葉の広まりに江原啓之の存在が大きな比重を占めていることがこれによっても明らかである[(7)]。それぞれの回答の割合を宗教系大学と非宗教系大学とを比較しながら示したのがグラフ2h である。それほど大きな差ではないし、とくに宗教系が肯定的な意見というわけでもない。ただ、宗教系の大学といっても、学生が宗教を信じていたり、関心をもっている割合が高いとは限らな

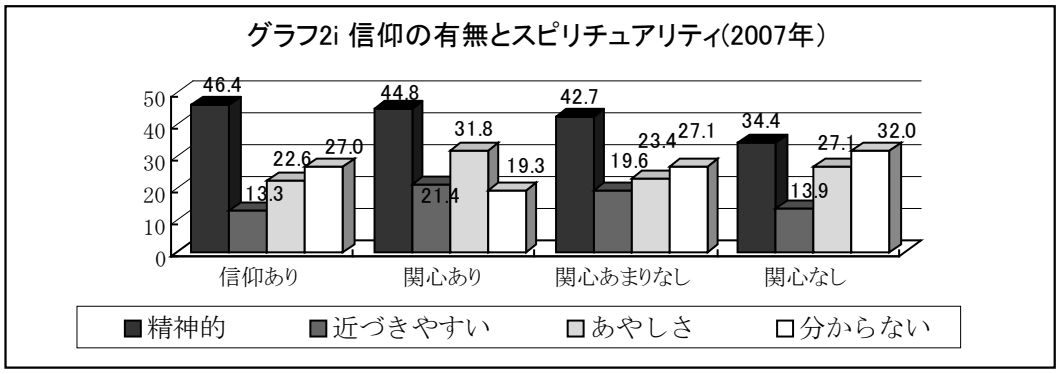


い。天理大学や創価大学などは別として、多くのキリスト教系、あるいは仏教系の大学では、宗教関連の学部を除けば、他の学生の意識は非宗教系の大学の学生とさほど変わらない。

そこで、回答者のうち、信仰をもっているグループが、スピリチュアルに関することがらに、他のグループと異なる傾向を示すかどうかを確認しておきたい。グラフ2i でわかるように、「現在、信仰をもっている」というグループは、精神的深みを感じる傾向にあるが、それほど顕著というわけではない。「現在、信仰をもっている」グループと、「信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない」というグループとの差は46.4％と42.7％とあまり大きくない。

スピリチュアルに近づきやすさを感じているのは、むしろ「信仰はもっていないが、宗教に関心がある」というグループであり、21.4％ともっとも高い数値である。信仰をもっているグループは13.3％で、宗教に関心があまりないグループより低い。興味深いことにあやしさを感じる割合も「信仰はもっていないが、宗教に関心がある」というグループが31.8％ともっとも高い。また「現在､信仰をもっている」というグループでもスピリチュアルがなんであるか「分からない」と答える人が27.0％いて、他のグループと比べて中間くらいである。

信仰とスピリチュアリティの関係は、「信仰はもっていないが、宗教に関心がある」というグループにおいて面白い特徴を見出せそうである。つまり、そういう人たちがスピリチュアルに精神性や親しみをもち、その反面であやしいと思う割合ももっとも高い。そして知らない割合はもっとも低い。

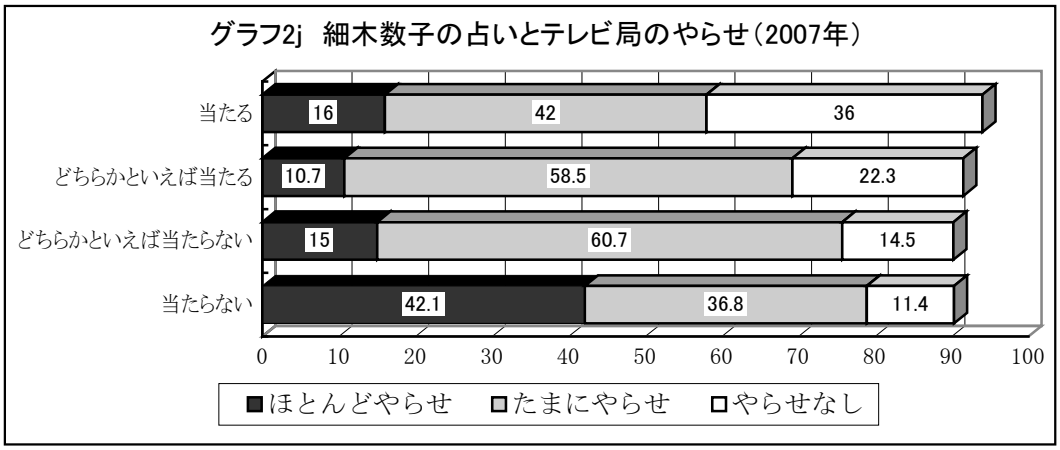


性別で比較すると、明らかに女性の方がスピリチュアルに肯定的評価をする割合が高い。逆に男性はあやしさを感じる割合が高く、女性の21.1％に対し33.8％と約1.6倍である。

次にメディアの影響を考える上で、「オーラの泉」にやらせがあると思うかどうかの回答結果を細木数子の占いへの信頼度とクロス集計してみよう。細木数子という人物自体は97.1％が知っていると回答しており、知名度は非常に高い。占い番組は霊能番組と少し性格が異なり、遊び的要素も強くなると考えられる。ただテレビ番組に受ける影響ということを考える上では両者のクロス集計もやっておいた方がいいだろう。

グラフ2jで分かるように、細木数子の占いに肯定的になれば、「やらせはない」と考える割合は高くなる傾向があることが分かる。ちなみに細木数子の占いが「当たる」と答えたグループと「当たらない」と答えたグループを比較してみよう。「ほとんどやらせ」と答えた割合は、「当たらない」グループが約2.6倍の多さとなる。逆に「やらせはない」と答えた割合は、「当たる」グループが3.1倍の多さとなる。

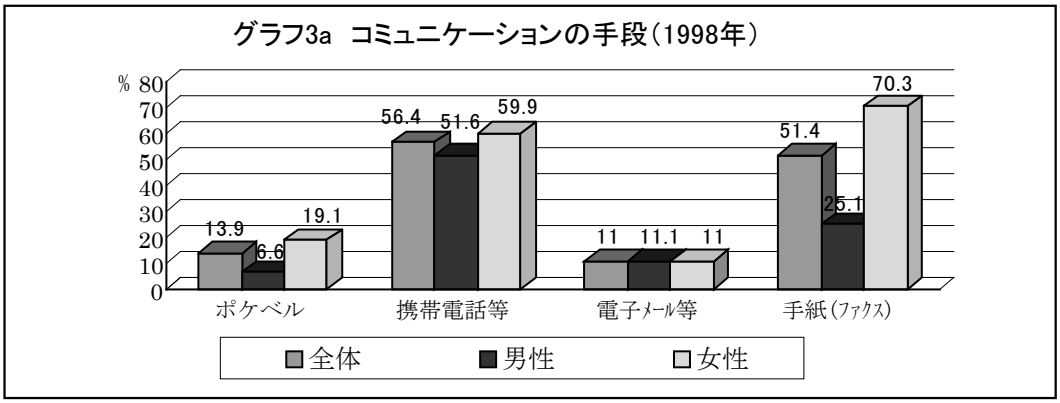
ここには占いへの信頼度と霊視への信頼度がどう関連しているかという問題と、この類のテレビ番組一般に対する信頼度という２つの問題が混在している。このクロス集計だけで、どちらの要因が強いかの判断はできないが、占いが当たると思っている人は、テレビ局を信頼がちで、霊視にも肯定的になる傾向があるとみなしていいだろう。



3. インターネットの影響

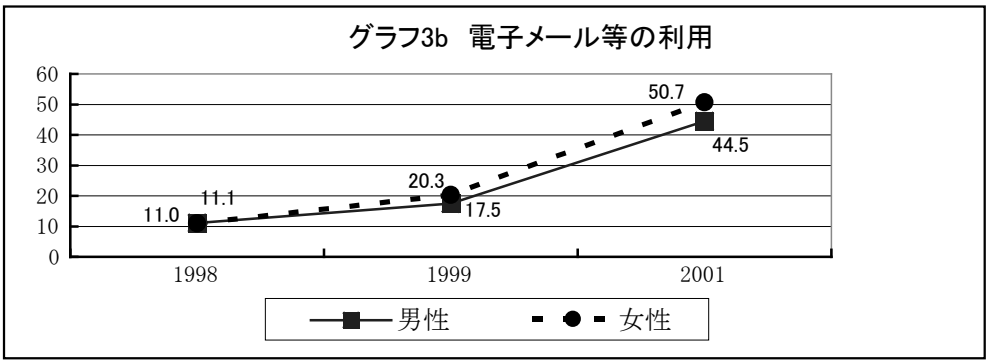
1995年からの「意識調査」において、インターネットに関わる質問項目を設けたのは、1998年の第4回調査が初めてである。このときは、「日常的なコミュニケーションの手段として、あなたが用いているもの」を問う形で、コミュニケーション手段の実情を探ろうとした。対象としたのは、ポケベル、携帯電話・ＰＨＳ、電子メール・パソコン通信、手紙・ファックスであった。ちょうどポケベルが消え去りつつあり、携帯電話が急速に普及する時期であった。また電子メールは新たなコミュニケーション手段として広まりつつあった。

調査結果により、今から10年前の1998年の4、5月頃の時点では、電子メールは学生の間でもまだ１割程度の普及であったことが分かる。男女差もほとんどないが、他のコミュニケーション手段をみると、いずれも女性が男性を上回っており、女性が他者とのコミュ

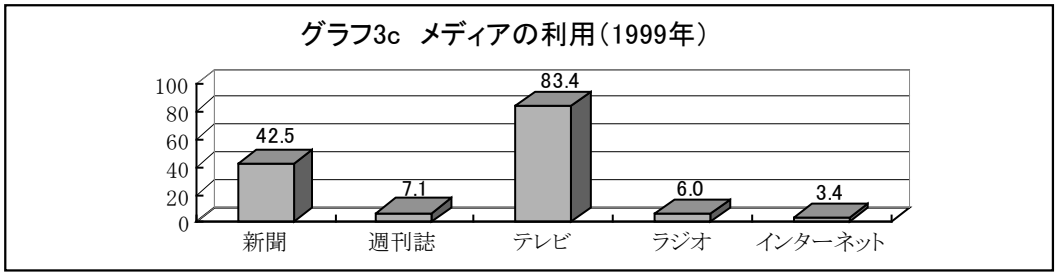


ニケーションに積極的であることが分かる（グラフ3a参照）。新しいコミュニケーション・ツールが出現したとき、それを使おうとする割合は、それ以前の他者とのコミュニケーションへの積極度に比例するのではないかという推測がここから生じる。

翌99年にも選択肢をやや細分化して同様の質問をしたが、その1年間で、ポケベル、携帯電話、電子メールに数字の大きな変化があった。ポケベルの使用は13.9％から1.2％へと10分の1以下に減った。携帯電話・ＰＨＳは、56.4％から76.9％へと1.4倍近い増加である。電子メール・パソコン通信は11.0％から19.1％へと1.7倍ほどの増加である。わずか1年でこれだけの変化があるということは、1998、99年前後の時期というのは、学生のコミュニケーション・ツールにも、急激な変化が生じた時期であることを物語っている。1999年の電子メール・パソコン通信の利用度を性別で比較してみると、男性17.5％、女性20.3％と女性の方が上回っている。電子メールの利用については2001年にも調査したが、女性の利用がやはり多い。（グラフ3b参照）



99年にはまた「日常的にニュースを知る手段として、あなたがもっとも多く用いているもの」は、何かという形でメディアへの関心度合いを質問した。回答の選択肢に用意したのは、新聞、週刊誌、テレビ、ラジオ、インターネットである。複数回答であったが、もっとも多いのはテレビで83.4％、次いで新聞の42.5％、週刊誌7.1％、ラジオ6.0％、インターネット3.4％であった。この時点では、インターネットはニュースを知る手段としては、まだラジオにも及んでいなかったことが分かる。（グラフ3c参照）



2000年の調査では、インターネット関連の質問項目は設けなかったが、2001年の第7回調査では、宗教とインターネットに関する質問項目を3つ設けた。インターネットがどんどん広まりつつある時期であったので、まずその利用内容について質問した。回答の選択肢は次の6つである（複数回答可）。

「自分のホームページを持っている。」

「掲示板への書き込みやチャットをしたりすることがある。」

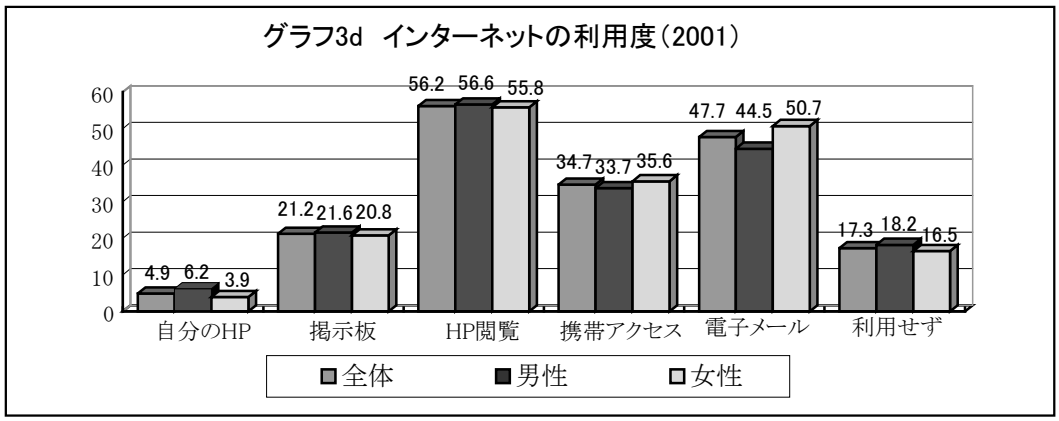
「いろいろなホームページを閲覧する。」

「携帯電話・ＰＨＳからホームページにアクセスしている。」

「電子メールに使っている。」

「インターネットは利用していない。」

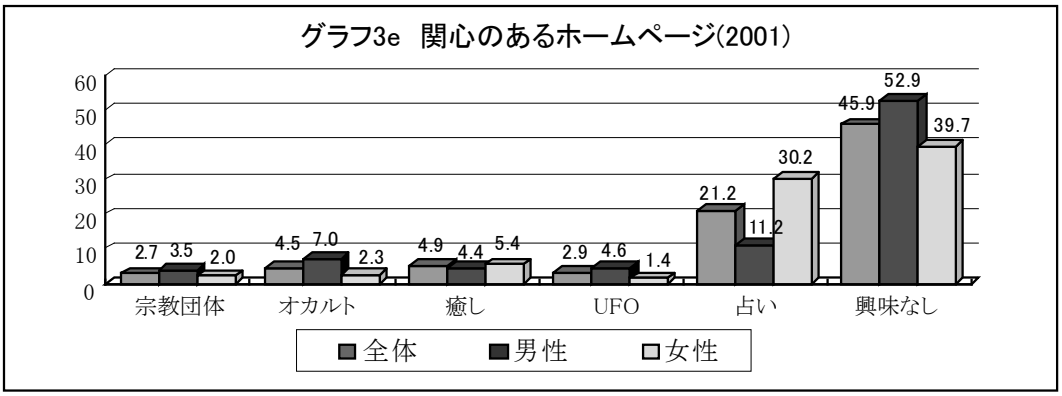
結果はグラフ3dのとおりである。自分のホームページを作成している人は5％程度であるが、ホームページ閲覧は56％と過半数に達している。また電子メールの使用は47.7％で、2年前の調査の2.5倍ほどになっている。携帯電話等からのアクセスも3分の1を超えている。自分のホームページ作成は男性が多いが、電子メールの利用は先ほど述べたように、依然女性の方が多い。ホームページ作成が男性の方が多いのは利用度というより、女性の方が自分の情報を公開することに当初はためらいがあったのかもしれない。ちなみにインターネットを利用しないという人は男性の方が女性より2割近く多い。



インターネットに関する2001年調査の2番目の質問は、インターネットを利用している人に対し、どのような内容のサイトを見るかについて問うたものである。回答の選択は次の6つである（複数回答可）。

「宗教団体のホームページ」
「オカルト・超常現象に関するホームページ」
「癒しに関するホームページ」
「ＵＦＯに関するホームページ」
「占いに関するホームページ」
「上の１～５のようなホームページには関心はない」

その結果はグラフ3e のようになった。宗教団体のホームページへの関心はかなり低く、3％未満である。これに対し、比較的高いのは占いのホームページへの関心で2割を越す。とくに女性の場合は3割を越える。宗教やサブカルチャー関連のサイトに関心のない人は45.9％と半数近い。

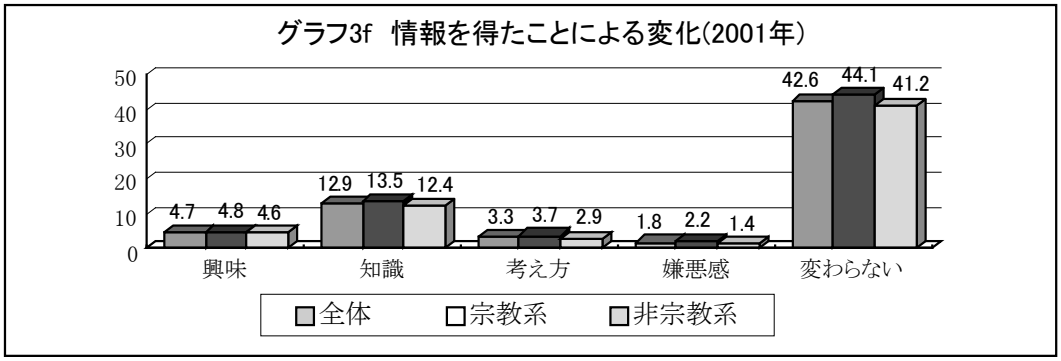


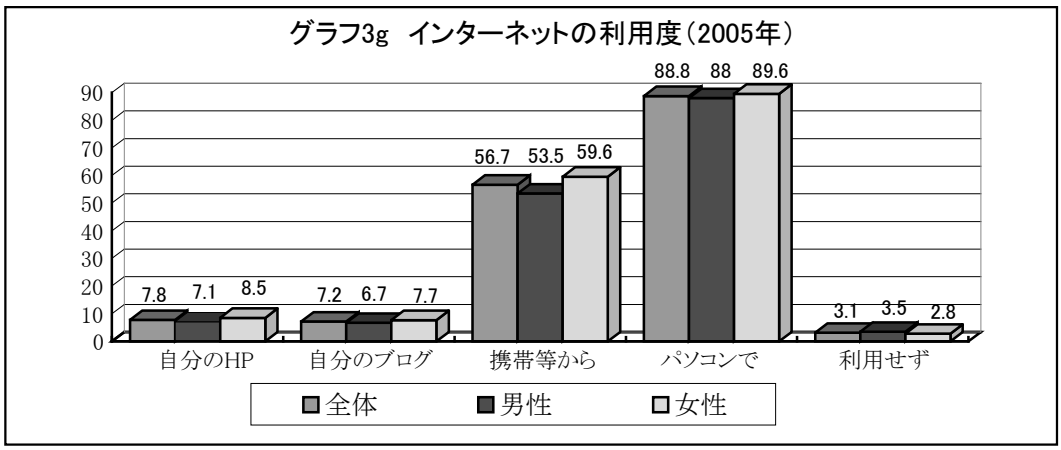
3番目の質問は「インターネットで宗教や宗教に関する情報を得たことで、あなたは次のどれになりますか。」ということで、意識の変化があったかどうかを聞いた。回答の選択肢は次の5つである（複数回答可）。

「宗教や宗教に関することに興味がわいた」
「宗教や宗教に関することの知識が増えた」
「宗教や宗教に関することについての考え方が変わった」
「宗教や宗教に関することに嫌悪感を抱くようになった」
「とくに何も変わらない」

結果はグラフ3f のようになった。知識が増えたが12.9％ともっとも多いが、興味がわいたとか嫌悪感が増えたという肯定的面もしくは否定的面での変化はあまりなく、42.6％が変わらないと答えている。宗教に関わるホームページにもともと関心がないし、またそのようなサイトを閲覧したとしても、宗教に関する意識の変化はあまりなかったと自覚している人が多いということが分かる。

インターネット関連の質問は4年後の2005年の第8回調査でも設けた。「あなたのインターネットの利用度は次のどれですか。」という質問は同じであるが、回答の選択肢を少し変えた。ブログが広まり始めたからである。回答の選択肢は次の５つである（複数回答可）。





「自分のホームページをもっている」

「自分のブログをもっている」

「携帯電話・ＰＨＳからインターネットを利用する」

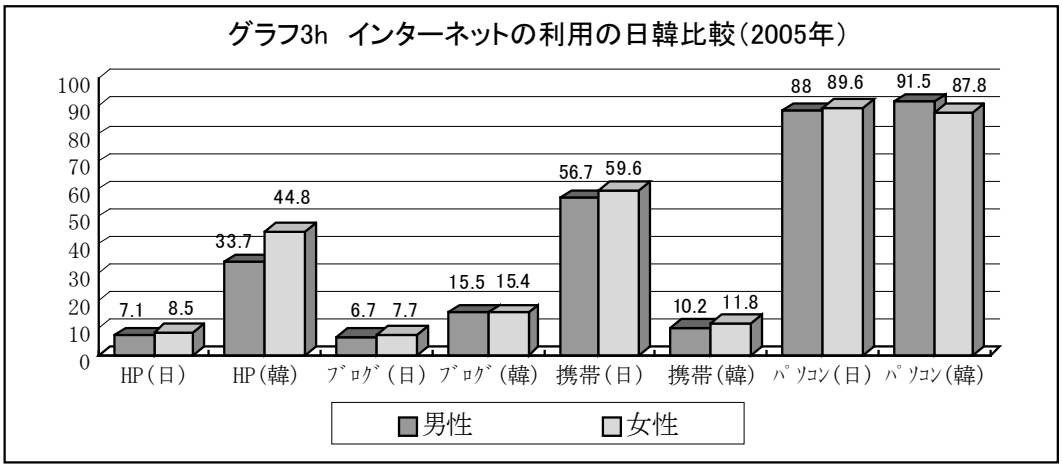
「パソコンでインターネットを利用する」

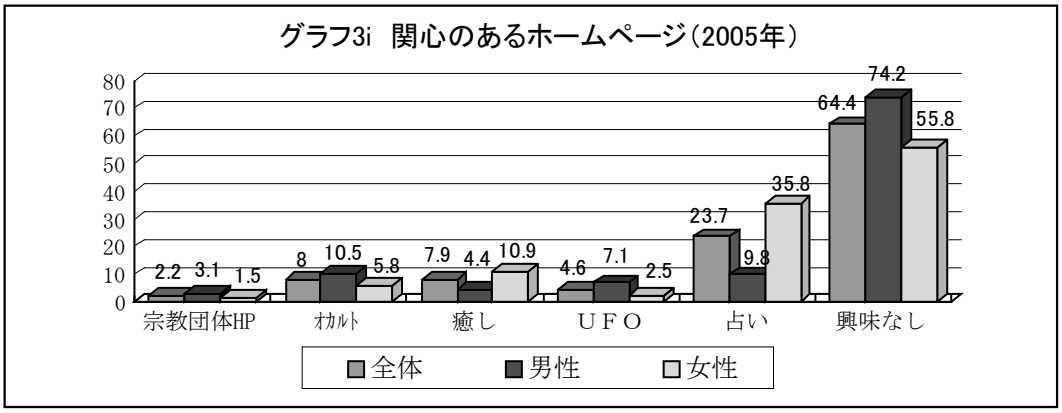
「インターネットは利用していない」

結果は、グラフ3g のようになった。2001年に比べるとホームページをもつ割合は4.9％から7.8％へと増えてはいるが、4年間を経ているにもかかわらずそれほどの増加率ではない。むしろブログがホームページと同じくらいになったことが注目される。こちらの方が若い世代のニーズに合っていたと考えられる。またパソコンでインターネットを利用するのが88.8％であるのに対し、携帯電話・ＰＨＳから利用するのが56.7％にのぼっていることも注目される。インターネットを利用していない人は17.3％から3.1％へと減っている。

このいずれにおいても、女性の方が男性をしのいでおり、2005年になると、自分のホームページをもつ割合も女性の方が多くなっている。

この結果は韓国と比較しても面白い[8]。パソコンの利用については大差ないが、携帯電話からインターネットに接続するという割合は、日本の方が5倍ほど多い。しかし、ホームページをもっている割合や自分のブログを作成している割合は韓国の方がずっと多い。そして韓国ではブログをもっている割合は男女差がほとんどなかったが、自分のホームページをもっている割合は、女性が1.3倍ほど多い（グラフ3h 参照）。





関心をもっているホームページについても質問し、回答の選択肢は2001年に準じたが、「癒しに関するホームページ」を「癒し・スピリチュアリティに関するホームページ」と変えた。結果はグラフ3iに示した。2001年度調査と比べると、「宗教団体のホームページ」は2％台で低いままであり、「オカルト・超常現象」は4.5％から8％へとやや増えている。「癒し」は「癒し・スピリチュアリティ」としたことが関係しているかもしれないが、4.9％から7.9％へ増えている。ＵＦＯも増えているが低い数値である。占いは微増で23.7％である。注目すべきは「興味なし」が45.9％から64.4％へとだいぶ増えていることである。

2回の調査とも、宗教やサブカルチャーに関する事柄は、内容によって性別の差が、比較的明確にあらわれている。宗教団体、オカルト・超常現象、ＵＦＯについては、男性の関心が高く、癒し、占いについては女性の関心が高い。2005年の場合で見ると、オカルトは男性が2倍近く、またＵＦＯでは3倍近く多い。他方、癒し・スピリチュアルは女性が2倍以上、占いは3倍以上多い。占いに関心をもつ女性は35.8％と、これらでは抜きんでているので、これが「こうしたホームページには関心がない」と答えた割合が女性が少ないことに影響していると考えられる。

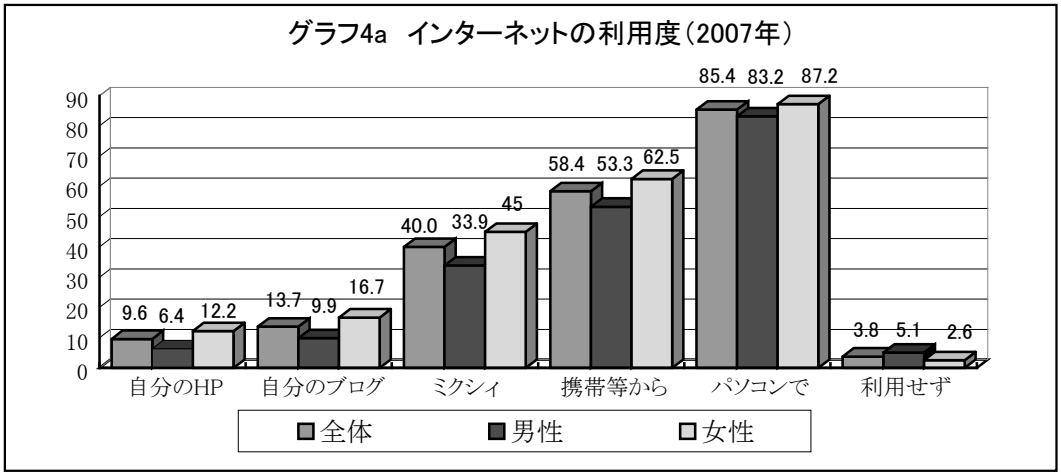
この質問に「こうしたホームページに関心がない」と答えたグループを除いて、インターネットで情報を得たことで、宗教に関するイメージが変わったかどうかを2005年に質問したが、「宗教に関していいイメージをもつようになった」人が1.8％、「宗教に関して悪

いイメージをもつようになった」人が5.0％で、後者が少し多いが、82.0％という圧倒的多数は「宗教に関してのイメージはとくに変わらない」と答えている。インターネットでの情報検索は宗教のイメージにあまり影響は与えていないが、どちらかといえば悪く作用することの方が多いということである。

この理由はどのようなサイトをみているかまで調べないと考察できないが、ネット上における宗教関連の情報はきわめて多様であるので、そもそも理由を特定することがかなり困難と考えられる。宗教団体の公式ホームページでは、宗教についてのプラスのイメージを提供しようとしていると考えられる。しかし、こうした教団作成のホームページに関心を抱く学生は少ないことが調査で分かった。他方で批判的キャンペーンやたとえば「２ちゃんねる」に代表されるように、宗教批判があふれた掲示板もある。ネガティブキャンペーン的な情報の影響もありうる。何がもっとも影響を与えているかを調査するにしても、工夫を要すると考えられる。

4. 2007年のインターネット関連の調査

インターネット上の宗教情報に関連した質問は2007年にもおこなった。インターネットの利用形態についてはすでに述べた2001年度、2005年度の調査内容に準じたが、ミクシィの急速な広まりを考慮してこれを回答の選択肢に加えた。2005年と比べて、ホームページをもつ割合は、7.8％から9.6％に増えたが、ブログは7.2％から13.7％となり、ホームページより多くなった。さらにミクシィは40.0％と、短期間で急速に普及したことが注目される。パソコン、携帯電話等からのインターネット利用はさほど変わっていない。また利用していないという人も3％台を保っている。(グラフ4a 参照)

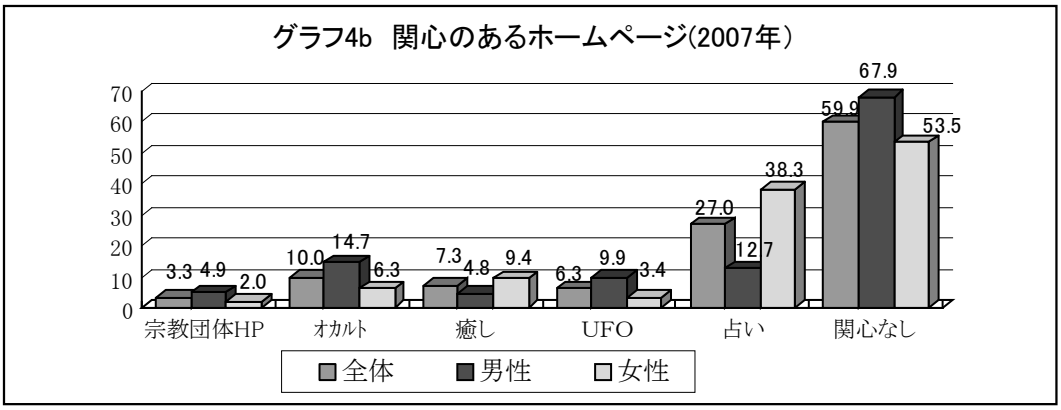


若い世代におけるインターネットの利用形態については、一般的な傾向がこれである程度つかめる。ホームページから、ブログへ、そしてミクシィに代表されるＳＮＳ（ソーシャルネットワーキングシステム）へと、若い世代のインターネットを用いたコミュニケーション手段は短期間のうちに、どんどん変貌している。これは宗教社会学的な現代宗教研究にとっては見逃すことのできない局面である。ミクシィはホームページやブログに比べると

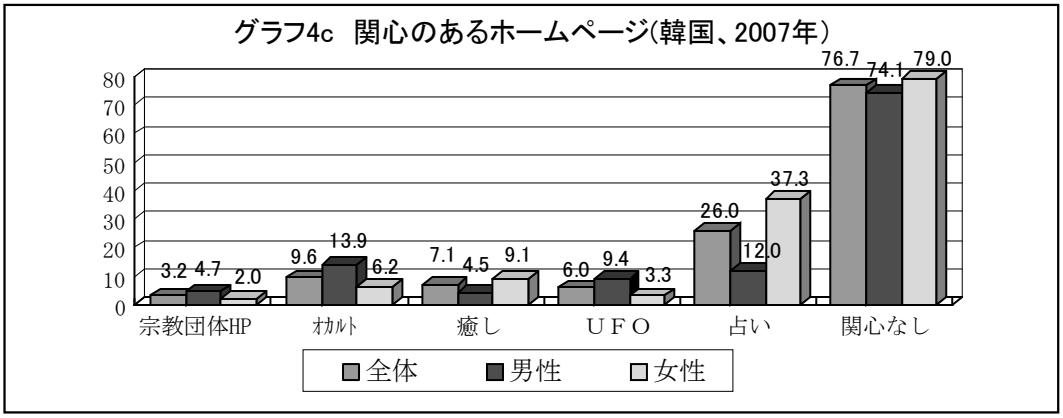
閉ざされたネット空間になっている。どのような内容の情報が交わされるか分かりにくい。こうしたネットを利用したコミュニケーションが、同じ関心をもつグループごとに閉ざされていく傾向もうかがえる。ミクシィを場に、どのような宗教的な話題が展開されることになるかを広く知る有効な手段は容易には見つかるまいが、ミクシィの影響力自体は無視すべきではないだろう。

インターネットの利用度合いについては、2007年度の調査では男女差がいっそう大きくなったことが分かる。自分のホームページを作成している割合は、女性が男性の2倍近くになっているし、ブログもミクシィも明らかに女性が多い。逆に利用していない割合は男性が女性のほぼ2倍である。

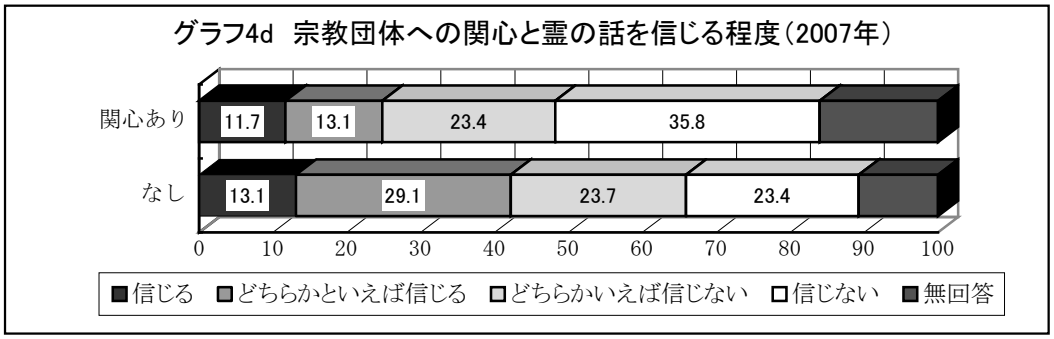
2001年、2005年の調査をふまえて、2007年にも関心のあるホームページについて調べた。選択肢(複数回答可)は2005年に準じたが、「癒し・スピリチュアリティに関するホームページ」を「癒し・スピリチュアルに関するホームページ」に変えた。結果をみると、「宗教団体のホームページ」をみる人は微増だが、3％台と基本的に低い数値で変動している。「オカルト・超常現象に関するホームページ」はやや増え10％となった。「癒し・スピリチュアルに関するホームページ」はほぼ同じで、「ＵＦＯに関するホームページ」と「占いに関するホームページ」は微増である。これらのホームページに関心なしと答えた人は若干減った。宗教団体、オカルト・超常現象、ＵＦＯには男性が関心を示し、癒し・スピリチュアル、占いには女性が関心を示すという傾向は前２回の調査とまったく同じである(グラフ4b参照)。

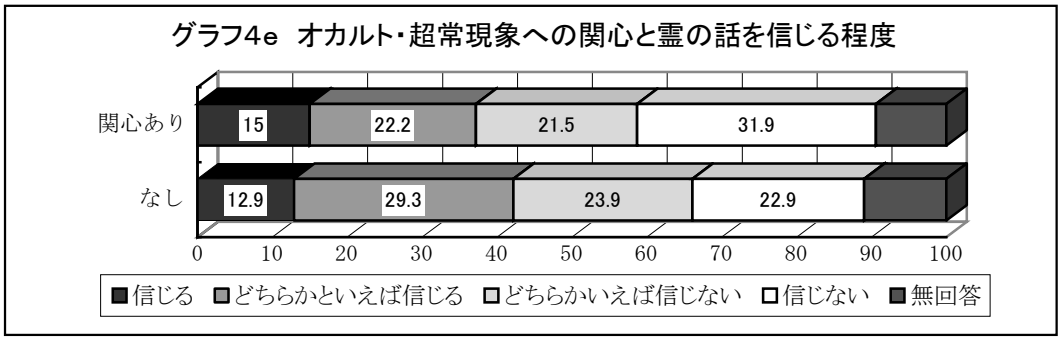


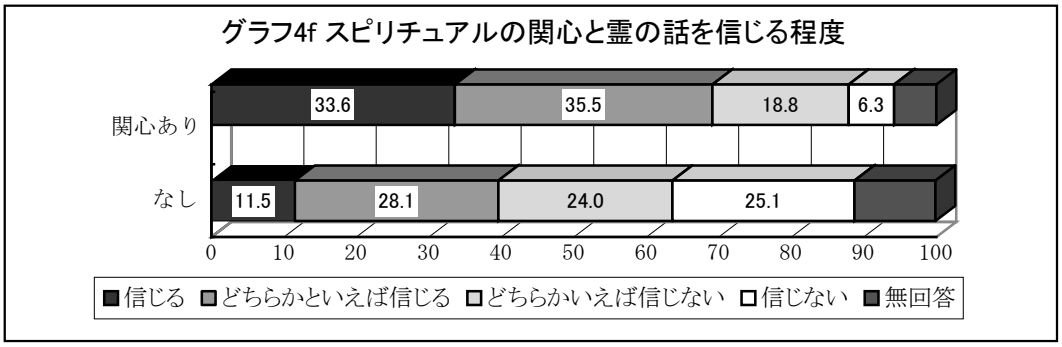
関心のあるホームページに関しては、2007年の韓国における第４回調査でも質問しているので、日韓比較をしてみる。興味深いのは、性別による差がほぼ共通していることである。宗教団体のホームページ、オカルト・超常現象、ＵＦＯ関連のホームページへの関心は、日韓ともに男性が顕著に高い。ただし、宗教団体のホームページは絶対数自体が両国とももっとも低い。逆に癒し・スピリチュアル、及び占いのホームページは、日韓とも女性の関心が顕著に高い。占いのサイトに関しては、日韓とも女性が男性の約３倍という差がある。これらのホームページには関心がないというグループの割合は、韓国の方が高いが、これはいわゆるサブカルチャー的なサイトへの関心が日本の方が少し高いからと考えられる(グラフ4c参照)。

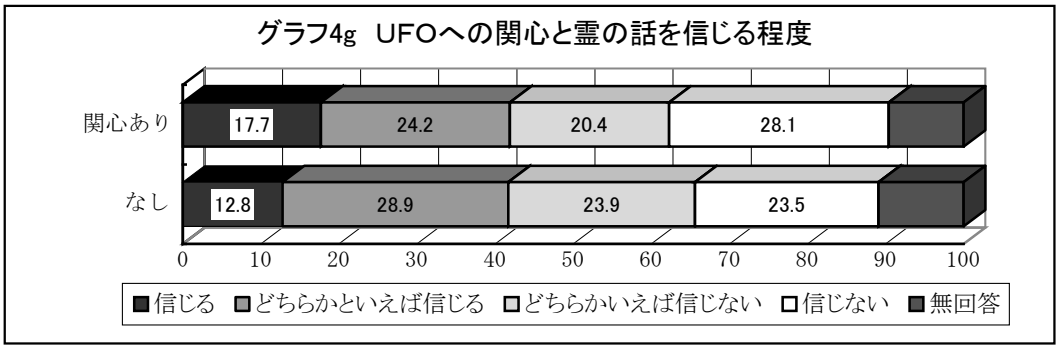


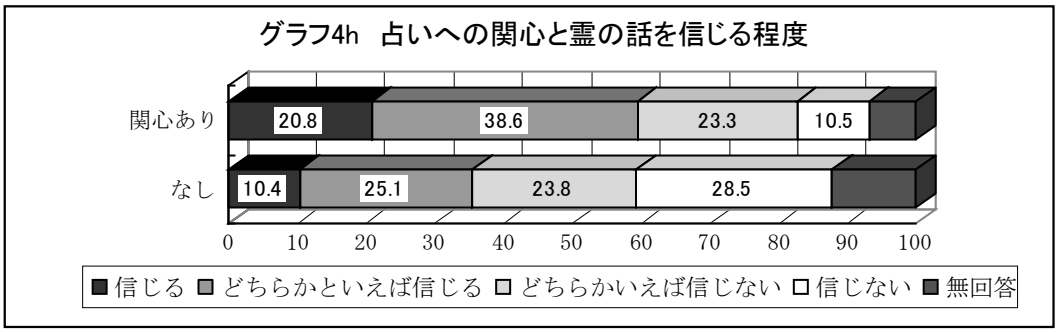
さきほど、「オーラの泉」の番組で語られる霊の話を信じる割合はかなり高かったことを示したが、では、テレビの霊能番組への関心とインターネット上の宗教・サブカルチャー関連のサイトへの関心とはどのような関係があるだろうか。関心をもつホームページとして、回答の選択肢に掲げた上記の6つの項目のチェックした人が、「オーラの泉」の番組で語られる霊の話をどの程度信じているか、それぞれの項目ごとにクロス集計してみる。結果はグラフ4d ～ 4j に示したが、これで明らかなように、霊の話を信じる割合ともっとも関連があるのは、「癒し・スピリチュアルに関するホームページ」に関心をもっていると答えた人たちである。このホームページに「関心ある」と答えた人が霊の話を信じる割合は、「関心ない」と答えた人の約3倍である。逆に「関心ない」グループが霊の話を信じない割合は、「関心ある」グループの4倍近い。つまり、この2つの項目の相関関係はかなり高いということである。

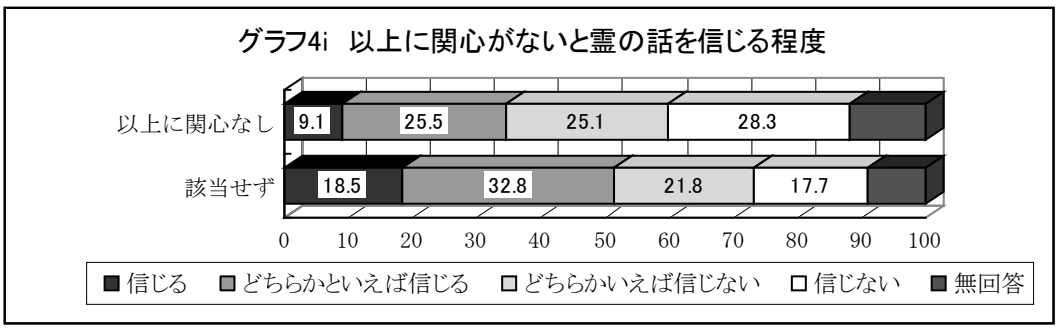


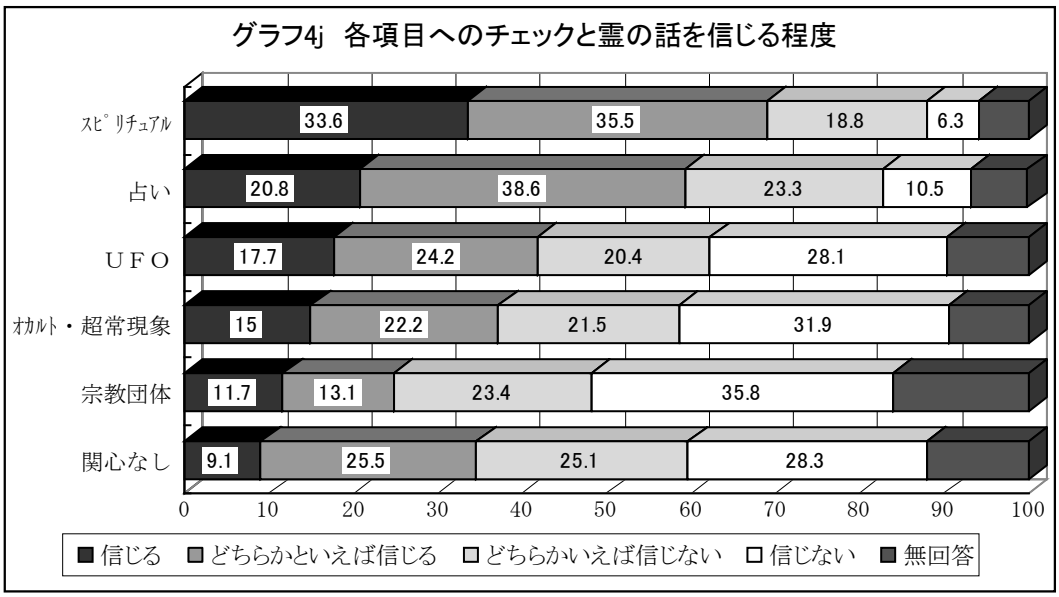



グラフ4f スピリチュアルの関心と霊の話を信じる程度
関心あり
なし
33.6
35.5
18.8
6.3
11.5
28.1
24.0
25.1
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100
信じる
どちらかといえば信じる
どちらかいえば信じない
信じない
無回答


グラフ4g UFOへの関心と霊の話を信じる程度
関心あり
なし
17.7
24.2
20.4
28.1
12.8
28.9
23.9
23.5
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100
信じる
どちらかといえば信じる
どちらかいえば信じない
信じない
無回答


グラフ4h 占いへの関心と霊の話を信じる程度
関心あり
なし
20.8
38.6
23.3
10.5
10.4
25.1
23.8
28.5
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100
信じる
どちらかといえば信じる
どちらかいえば信じない
信じない
無回答

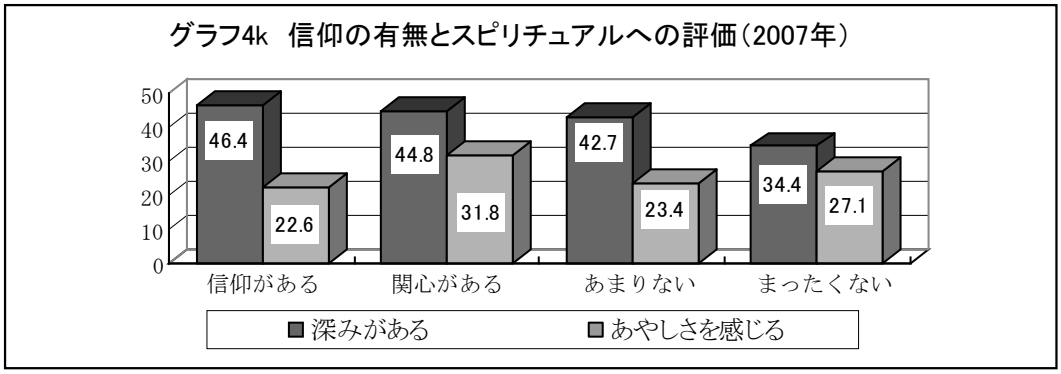

グラフ4i 以上に関心がないと霊の話を信じる程度
以上に関心なし
該当せず
9.1
25.5
25.1
28.3
18.5
32.8
21.8
17.7
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100
信じる
どちらかといえば信じる
どちらかいえば信じない
信じない
無回答



霊の話を信じることと占いへの関心とではいくらか関連性が見て取れるが、オカルト・超常現象への関心とではそれほど関連性がない。ＵＦＯへの関心とはほとんど関連性がない。また興味深いことに、宗教団体のホームページへの関心と霊の話への関心は、逆の相関がある。またこれら５つのホームページに関心がないと答えた者と霊の話とも逆の相関関係になるが、以上の結果からすると、これは当然のこととなる。

この結果は、性別による違いと関わりがあることに気づく。つまり女性が関心が高いのが癒し・スピリチュアルと占いである。また霊の話を信じる割合も女性が高い。男性はＵＦＯやオカルト・超常現象に関心があり、霊の話は女性ほど信じない。そうした傾向がここにおける相関の結果に影響していると考えられる。

信仰の有無とスピリチュアルはそもそもどのような関係があるのだろうか。宗教への関心のあり方については、毎回同じ質問をしていることを述べたが、2007年度は宗教系で15.6％、非宗教系で6.7％が現在信仰をもっていると答えた。信仰をもっていない人はさらに宗教に関心があるかどうかで3つのグループに分けられているが、これらとスピリチュアルへの態度とはどう関係しているだろうか。宗教への関心で分けた４つのグループを、スピリチュアルについて「深みがある」と肯定的に答えた割合と「あやしさを感じる」と否定的に答えた割合がどうなるかを調べてみる。結果はグラフ4k のようになった。信仰がある人は若干スピリチュアルを肯定的にとらえる傾向があるが、きわだっているわけではない。また信仰がある人は否定的にとらえる割合がやや少ないが、これもそう顕著ではない。信仰はもっていないが、宗教には関心があるという人では、関心がない人より「怪しさを感じる」という人が多く、若い世代が宗教とスピリチュアルをそれぞれどう見ているかは、単純ではなさそうである。



5. 宗教情報リテラシーについて

若い世代は広い意味での宗教情報を、家庭や学校よりも、テレビ番組やインターネットから多く得ている場合が少なくないと考えられる。ではますます広く摂取されるようになっているウェブ上の情報については、どのような信頼性を抱いているのであろうか。それを探る一つの試みとして、2007年の調査で、この時期急速に利用が増えてきたウィキペディア（Wikipedia、ウェブ上の無料百科事典）について質問した。ウィキペディアの日本語版は2001年に作られ始めたが、2～3年でその存在が広く知られるようになった。ウィキペディアについて、次のような設問をし、あてはまるものを選んでもらった（複数回答可）。

「ウィキペディアの記事は正確なものが多いと思う」

「レポートの作成などに、ウィキペディアの記事をそのままダウンロードして使ったことがある」

「ウィキペディアに自分も書きこんだことがある」

「誰が書いたか分からないので、あまり信用しない」

「ウィキペディアが何であるか知らない」

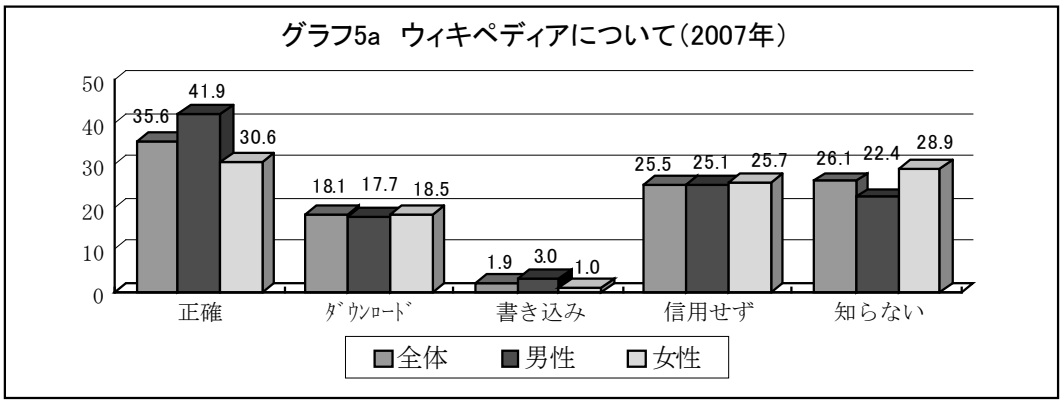
結果はグラフ5aに示した。これをみると、学生たちの3分の1以上がウィキペディアは正確だと考えていることが分かる。「知らない」と答えた人を除くと、知っている人の5割近くが正確であると考えていることになる。

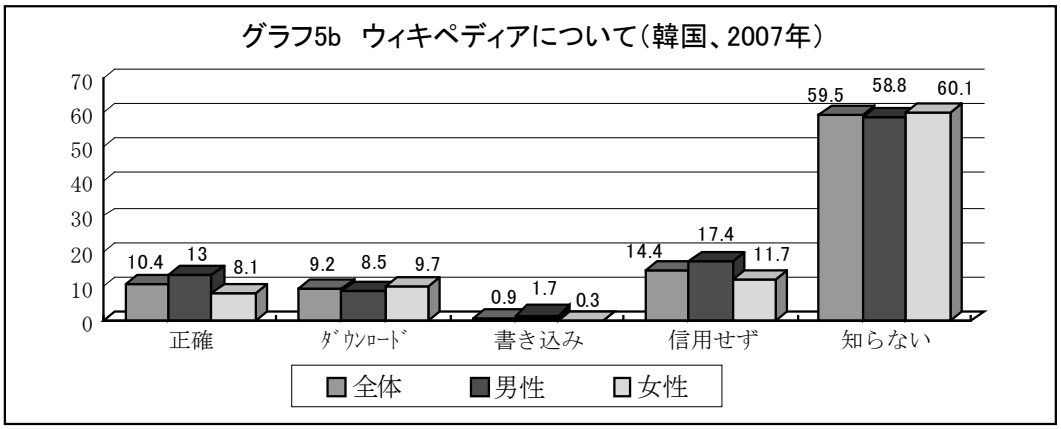
性別による差について少し触れると、正確だと思っている割合は、男性が41.9％、女性が30.6％と1.3倍以上の開きがあり、男性の方が信頼している。また書き込みの経験は2％弱と少ないが、性別では男性が女性の3倍になる。ダウンロードしてレポートなどに使った割合や、ウィキペディアを信用しないという割合はあまり差がない。ウィキペディアのことを知らないという割合は若干女性が多い。

これも韓国と比較してみると、ウィキペディアに関しては日本の学生の方が利用していることがわかる。ウィキペディア自体を知らないという学生が韓国では約6割いて、日本の2倍以上である。また知っている人の間では、信用しないという回答の割合が韓国の方が高い（グラフ5b参照）。インターネットの利用度は韓国の方が広がっているので、この違いは韓国のウィキペディアの内容にも関わる可能性が高い。つまり、ウィキペディアに関しては、日本の方が質量的に充実しているという背景があり、それが関係していると考

えられるのである。

日本の学生の間では、ウィキペディアの利用は2005年以降、急速に増えているが、これはレポート作成、その他に利用できそうだと感じた学生が増えたことも一因と考えられる。ただ、ウィキペディアは玉石混淆と言われるように、非常に有用な情報があると同時に、きわめて偏向していたり、不正確な情報も少なくない。たえず書き換えられるので、信憑性には留保を付けておくべきものである。





ウィキペディアの情報が正確であるという基準がどの程度厳密なものかは、人それぞれであることは言うまでもないが、ウィキペディアをダウンロードしてそのまま使う割合が増えている現状を考えると、学生の日常生活における情報リテラシーを考える必要性は増しているといえる。宗教情報については、宗教に関する知識は一般的に乏しいと言えるので、その必要性はいっそう高いということになる。

ところで、インターネット上の情報とは別に、若い世代の多くが実際に体験する路上での勧誘に対しては、どういう反応をしているのだろうか。2007年の調査では、路上での宗教や占いの勧誘の経験について、次のように質問した。

路上で、見知らぬ人から「手相をみせてください」、「あなたには特別なオーラがあります」などと宗教や占いに関係するような内容で声をかけられたことがありますか。

この質問に対し、そうした経験があると答えた人には、さらに次のようなサブクエスチョ

ンを設けた。

声をかけられ、「あなたに悪い霊がついているのが見えます」などと言われたら気にしますか。

このサブクェスチョンに対する回答の選択肢は次のとおりである。

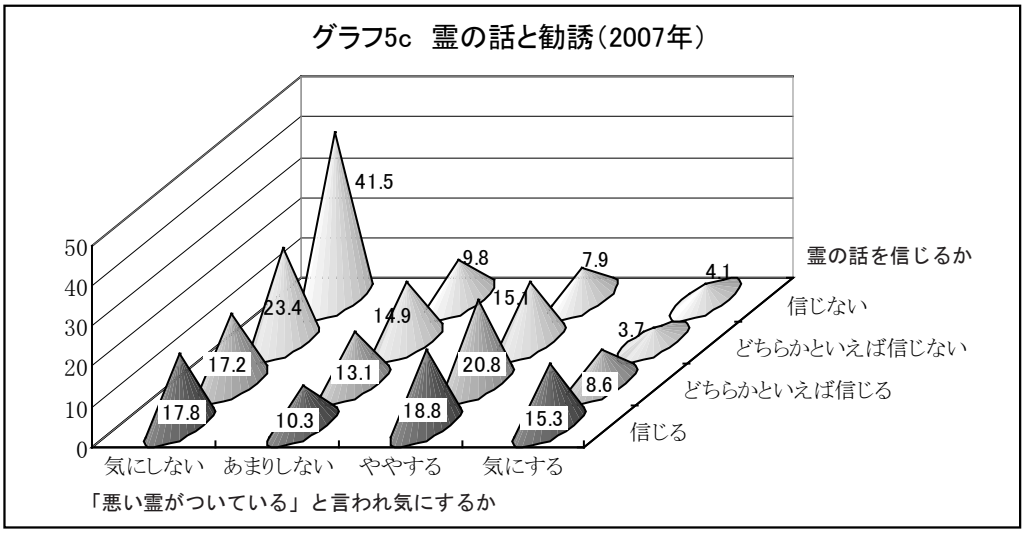
「気にする」

「どちらかといえば気にする」

「どちらかといえば気にしない」

「気にしない」

「悪い霊がついているのが見えます」などと言われ、それを気にするかどうかは、霊能番組への反応と相関関係があるものであろうか。先に示した「オーラの泉」の番組で語られる霊の話を信じる割合と、この結果とをクロス集計したのがグラフ5c である。無回答については図示していない。これを見ると、両者には多少の相関がみてとれそうである。とくに霊の話を信じないグループは「悪い霊がついているのが見えます」などと言われても気にしない傾向がはっきりしている。霊の話を信じないと答えた人のうち、41.5％は、街頭で「悪い霊がついている」などといわれても、気にしないと答え、気にすると答えた4.1％の10倍になる。他方、霊能番組の霊の話を信じるグループは他のグループに比較して、見知らぬ人から言われたこうした言葉でも気にする割合が若干高い。



このような結果は、それぞれの学生がもともと霊の存在をどう思っているかによると説明することもできる。それゆえテレビの番組がこの傾向になにがしかの影響を与えているとただちに結論づけるわけにもいかない。

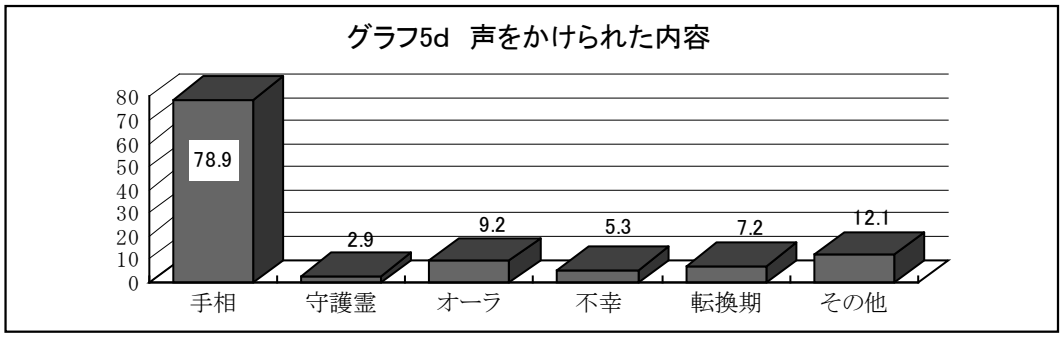
この設問では、実際に声をかけられた経験をもつ人には、どのような内容の話であったかについても聞いている。声をかける内容として、次のような内容が多いことが学生の間では知られているので、選択肢を示した上で、それ以外については自由記述してもらう形にした。

「手相の勉強をしています」

「あなたの守護霊が見えます」

「あなたには特別のオーラを感じます」
「このままだと何か不幸なことにあいます」
「今、人生の転換期です」
「その他（具体的に　　）」

結果をみると、グラフ5dに示したように、飛びぬけて多いのは「手相の勉強をしています」で78.9％にのぼった。ついで、「あなたには特別のオーラを感じます」9.2％、「今、人生の転換期です」7.2％、「このままだと何か不幸なことにあいます」5.3％、「あなたの守護霊が見えます」2.9％の順であった[9]。このうち、オーラ、守護霊というのは、霊能番組でもしばしば用いられる用語である。宗教というより、むしろサブカルチャーにおいて多用される概念である。テレビの霊能番組の語りと、サブカルチャー的な語りは非常につながりが深く、テレビ番組がこれらを肯定的に扱えば、若者への影響はいくらかでも及ぶことは十分可能性がある。



テレビの霊能番組が情報時代においてどのような影響を与えているのかを実証的に調べるのはなかなか困難であるが、それがどうあれ、他方で宗教情報リテラシーを高めるための宗教文化教育を広く行なっていくことの意義については議論を重ねる必要がある。学生たち自身も、宗教文化教育に対してはそれなりの必要性を考えていることが2007年の調査では明らかになった。

2007年の調査では、次のような意見について、それぞれ「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」から選んでもらった。

「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい」
「高校までの教育で、愛国心を深めるための工夫をした方がいい。」
「道徳の授業をもっと充実させた方がいい」
「いのちの大切さを教える授業を充実させた方がいい」
「学校では受験や就職に必要な知識や技能を教えるだけでいい」

回答の選択肢を肯定的な回答が多い順に並べて示したのがグラフ5eである。いのちの大切さを教える教育に肯定的回答がもっとも多かったが、次いで世界の宗教文化についての基礎的知識を学んだ方がいいを選んだ人が多かった。宗教文化を学ぶことには「そう思う」が4割を越え、「どちらかといえばそう思う」を加えた肯定派は8割ほどである。いのちの教育については、宗教系の学校の回答者にやや肯定派が多かったが、宗教文化の教育については、非宗教系の学校の回答者の方に肯定派がやや多い。ただいずれもそう大きな違

いではない。

なお道徳の授業の肯定派も６割を越した。愛国心を深める教育は３分の１強が肯定派である。学校教育は知識・技能のみでいいという意見の肯定派は１割ほどである。

宗教についての知識を深めるための教育を、学生たちが必要と考えるかどうかに関しては、1996年以降、類似の質問を何回かしている。その問いかけの内容は次のとおりである。

「高校までにもっと宗教についての基礎知識を教えるべきだ。」(1996 ～ 1999年)

「高校までにもっと世界の宗教についての基礎知識を教えるべきだ。」(2005年)

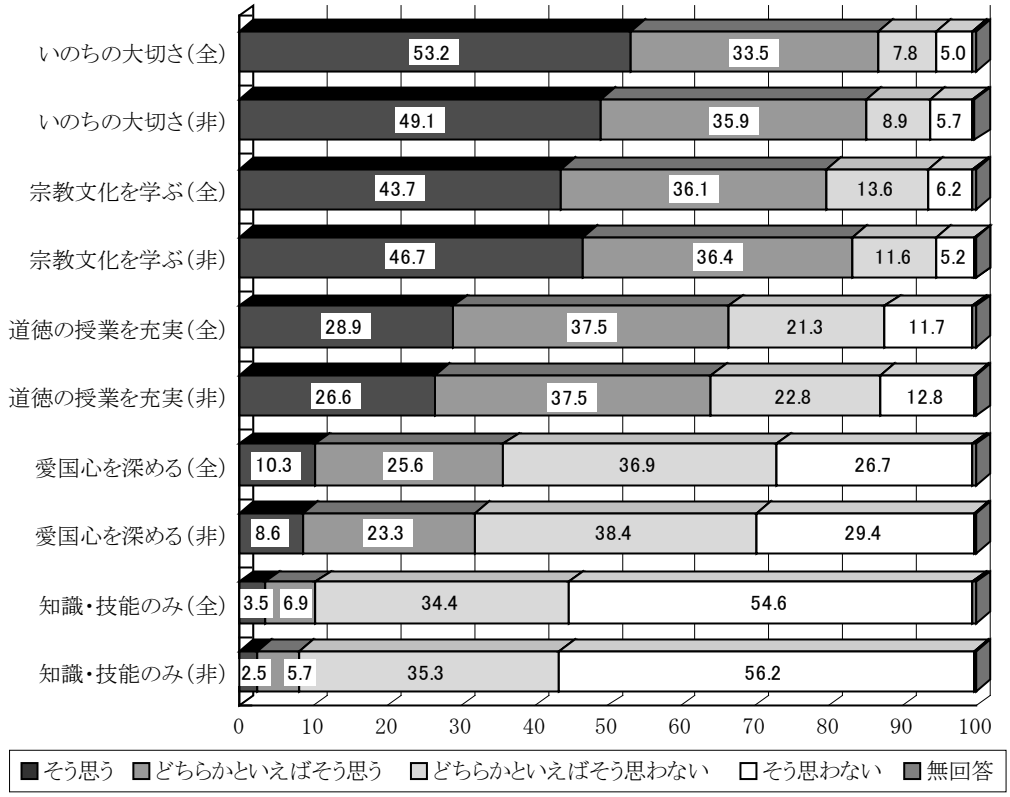
「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい」(2007年)

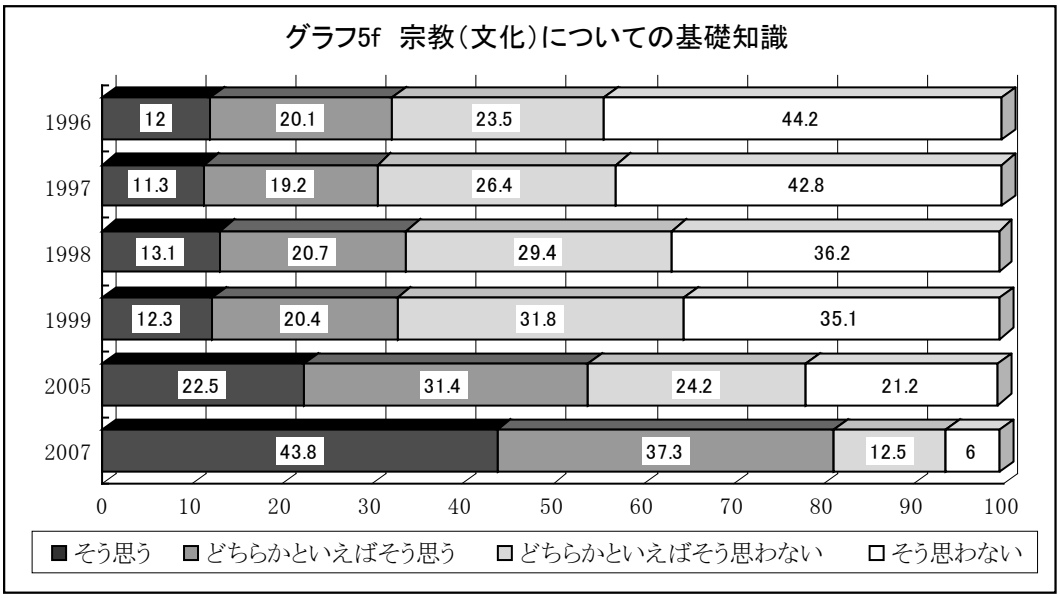
質問の内容が少しずつ変化したのであるが、それに応じて、肯定派の割合がしだいに増加している。すなわち1999年と2005年の調査を比較すると、肯定派が1.6倍ほど増えており、また2005年と2007年の調査を比較すると、肯定派が1.5倍近く増えている。1996年から1999年まで同じ選択肢であったときの数値の変化から推定して、学生の意識が1999年以降大きく変わったとは考えにくく、この変化には選択肢の変化が関わっていると解釈する方が適切であろう。

「宗教」というよりは「世界の宗教」、そしてさらに「世界の宗教文化」という教育により適切さを感じているという可能性が高いということである。

もっとも「教えるべきだ」から「学んだ方がいい」とゆるやかな表現にしたことも関係していると考えねばならない。

グラフ5e　宗教と教育に関する考え（2007年）





むすび

以上、2007年度に実施した宗教意識調査を中心に、それ以前の一連の調査結果を参考にしながら、霊能番組の影響、インターネットの宗教情報の影響について分析した。その上でそれらが宗教情報リテラシーを考える上で、どのような問題を投げかけているかについても言及した。

霊能番組、占い番組は娯楽的要素も強く、ただちにそれが若い世代の宗教理解に大きな影響を与えるかどうかは分からない。ただテレビに頻繁に登場する霊能者の知名度は、ローマ教皇とかダライ・ラマといった世界の宗教的指導者の知名度に比べてもずっと高い。まして日本の宗教家などはもっと知名度は低い。メディアに登場する頻度が比べ物にならないからである。そういう状況のもとでは、霊能者の発言の影響力を度外視することはできまい。他方、インターネット上の情報は必ずしも宗教についてのイメージを好転させるものではないことも分かった。

宗教についての情報がテレビ番組やインターネット情報などから得られる割合は、今後いっそう増えていくことが予測される。宗教情報リテラシーという発想を研究・教育上に導入する必要性がここにある。テレビやインターネットの宗教情報の大半は、体系的な思考や一定の宗教史の知識の上に基づく情報ではないことを考慮すると、体系的な知識を基盤とした宗教文化教育の重要性は、情報化が進行すればするほど、増していくと考えられる。

宗教について「アブナイ」という評価をする学生が過半数を占めることは、「意識調査」でも明らかになったことであるが[(10)]、他方で、適切な宗教文化教育に対しては、肯定的な評価が大半を占めることも分かった。現代社会において広い意味での宗教情報が、若い世代にどのように発信され、受信されていくようになるのか。その実態と変容についての実証的な研究を積み重ねていくことが、今後の宗教情報リテラシーについての教育を考え

る上で、欠かせない作業となる。

注

(1) 2007年度の調査は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）「宗教教育における情報リテラシーの日韓比較」（研究代表者・井上順孝）の研究メンバー（磯岡哲也、岩井洋、黒崎浩行、佐々木裕子、田島忠篤、平藤喜久子）が中心となり、「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクトのメンバー、その他の方々の協力を得て、2007年4月～6月に実施された。全国35の大学から4,306名の有効回答が得られた。協力をいただいたのは、市川誠、市田雅崇、稲場圭信、薄井篤子、遠藤潤、樫尾直樹、葛西賢太、川橋範子、木戸口靖之、黒木雅子、古賀和則、小島伸之、櫻井義秀、佐藤直実、白井聡子、関口茂久、武田道生、永井美紀子、中野毅、西村明、深澤英隆、カール・ベッカー、三土修平、宮本要太郎、村上興匡、本林靖久、八木橋伸浩、矢野秀武、山中弘、吉田永宏の各氏である。

また同年9月～11月には、韓国における調査を実施し、12の大学から1,385名の有効回答が得られた。韓国での調査に際しては、ソウル大学の金鐘瑞氏、西江大学のキム・ジェヨン氏、朴奎泰氏、成均館大学の林泰弘氏、東国大学の呉錫崙氏、泉千春氏、大邱カトリック大学の朴承吉氏、東西大学の南椿模氏、その他の方々の協力を得た。データの入力と集計に関しては、國學院大學大学院生の金子香奈里さん、玉置麻衣さんにお手伝いいただいた。韓国語の調査票作成及び韓国語による回答分の日本語訳は、同じく國學院大學大学院生の李和珍さんに依頼した。これまで実施した調査の報告書、その他の情報については、下記のホームページに掲載されている。

http://www.kt.rim.or.jp/~n-inoue/index.files/jasrs.htm

(2) 第1回～9回のアンケート調査の実施校数と有効回答数は下記のとおりである。

年 度	実施校数	有効回答数
1995	32	3,773
1996	42	4,344
1997	41	5,718
1998	43	6,248
1999	73	10,941
2000	42	6,483
2001	38	5,769
2005	32	4,252
2007	35	4,306

(3) 日本文化研究所における宗教教育プロジェクトは1990年に開始され、12年にわたって実施された。大きく二期に分かれ、1990年から1995年までの最初の6年は「宗教と教育に関する調査研究」というプロジェクト名で、主として国内の宗教系の学校調査、アンケート調査、資料収集を行なった。第一期の研究成果は、國學院大學日本文化研究所編・井上順孝監修『宗教教育資料集』（すずき出版、1993年）と、國學院大學日本文化研究所編・井上順孝責任編集『宗教と教育』（弘文堂、1997年）等に示されている。

1996年から2001年までの6年は、「宗教教育の国際比較」というプロジェクト名で、日韓比較を中心にしながら、国外の宗教教育を視野に入れた調査・研究を実施した。その成果は国際宗教研究所篇・井上順孝責任編集『教育のなかの宗教』（新書館、1998年）などに示されている。

(4) 1992年の宜保愛子の霊視に関する調査では回答の選択肢の文言が少し異なる。これが多少は影響している可能性があるので、対比させて示しておく。ただ、前二項は肯定的な表現

であり、後二項は否定的であるので、肯定派、否定派の変化には1992年の結果を参照できると考える。

1995年以降の選択肢	1992年の選択肢
「信じている」	「基本的に信じている」
「ありうると思う」	「信じているわけではないが、ありうることだとは思っている」
「あまり信じない」	「どちらかといえば、疑わしいと思っている」
「否定する」	「信じていない」

(5) 東京大学で理学博士を取得したという肩書きを有する青山圭秀が、1993年に『理性のゆらぎ』、また翌年『アガスティアの葉』、『真実のサイババ』と立て続けにサイババ紹介の本を出版したことが日本でサイババブームが起こった一因とされている。しかし、オウム真理教による地下鉄サリン事件以降、サイババを霊能者として扱う番組もなくなっていった。それだけでなく、なにもないところから突然物を出現させる、「物質化」と呼ばれる現象もトリックであるという批判的視点からの番組も放映されるようになった。

(6) 宗教系の大学でもとくに創価大学、天理大学の回答者は信仰をもつ割合が高い。キリスト教系大学や仏教系大学の多くでは、非宗教系大学とさほど変わらない。宗教系の大学の間でのこうした違いを具体的に数値によって示した例として、磯岡哲也「大学生の宗教意識―宗教教育に関するアンケート調査の分析から（二）」(『國學院大學日本文化研究所紀要73』、1994年) がある。

(7) スピリチュアルで連想することで、江原啓之の名をあげたもののうち、何割かは「江原さん」という表記をしている。親しみのこもった表現といえる。他方で否定的なイメージもいくつかあった。たとえば、「うさんくさい」「商業的イメージ」「インチキな感じがする」「金もうけ」「サギまがい」「馬鹿馬鹿しい」「アホっぽい」「妄想家」等々である。

(8) 2005年における韓国での調査は10の大学から1,243名の有効回答が得られている。

(9) その他の具体例と記載されたものを一部紹介する。
「以前事故にあったことはありませんか？」
「水晶玉に興味はありませんか？」
「貴方は今の人生に満足していますか？」
「神のありがたいお言葉を聞きませんか？」
「あなたキレイな目をしてますね」
「あなたのご先祖のことでお話があります。」
「人の運には波があります。幸運の波をもっと上げたいと思いませんか？」
「血を浄化します」
「あなたのためにお祈りさせてください。」

(10)「意識調査」の結果については、それぞれの回の報告書があるが、2005年までの調査結果を比較してまとめたものとして、井上順孝『若者における変わる宗教意識と変わらぬ宗教意識』(國學院大學、2006年) がある。同書にも示したが、1998年、1999年、2000年の3回の調査とも、「宗教をアブナイ」と思う学生は、だいたい3分の2ほどを占める。

付記　本研究は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）「宗教教育における情報リテラシーの日韓比較」(研究代表者・井上順孝) による研究成果の一部である。

井上順孝（いのうえのぶたか）所長・兼担教授　担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

宗教学、宗教社会学が専攻。東京大学文学部で宗教学宗教史学を専攻し、同大学の大学院では修士課程で平田篤胤の思想を研究し、博士課程では宗教心理学的方法を主としていた。博士課程を中退し文学部助手となったが、この頃からフィールドワークを手がけることになり、新宗教研究に関心を深めた。その後國學院大學日本文化研究所の講師となり、教派神道研究を深めることとなった。助教授、教授を経て、2002年に國學院大學に新設された神道文化学部に移った。日本文化研究所は兼担教授となったが、研究所の総合プロジェクトには継続的に関わっている。2002年に國學院大學が21世紀ＣＯＥプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」が採択されたので、その第三グループのグループリーダーとなった。2006年に日本文化研究所所長を兼任、2007年にはさらに研究開発推進機構副機構長を兼任となった。

研究テーマは、平田篤胤、教派神道、移民の宗教、新宗教・現代宗教、宗教教育などといくつかの分野にまたがっているが、現在は現代宗教と宗教文化教育を中心に調査・研究を進めている。これまで奄美地方、浜松市、ハワイ、カリフォルニアなどで地域調査を行なったが、『新宗教事典』（弘文堂、1990年）の編集に当たっては、首都圏その他で数多くの教団調査を実施した。また、1992年以降は学生の宗教意識調査を継続的に実施しており、2007年までに10回を数える。いずれも回答者は数千人規模で30人以上の協力者を得てなされた。1999年からは韓国との比較も４回行った。これまでの著書はこうした研究テーマを反映している。最初の著書の『海を渡った日本宗教』（弘文堂、1985）は、ハワイとカリフォルニアで3度実施した共同調査の結果を踏まえている。『教派神道の形成』（弘文堂、1991）は、博士論文として提出したもので、國學院大學に来てから進めてきた教派神道研究の成果である。『新宗教の解読』（筑摩書房、1992）は、上記『新宗教事典』の編集を中心的に行ったことによって得られた知見がもとになっている。1995年にオウム真理教による地下鉄サリン事件が起こったので、これについての記述を加えた増補版を1996年に同名の文庫として刊行した。

新宗教論から現代宗教論に視点を広げる必要性を感じて書いたのが『若者と現代』（筑摩書房、1999）である。情報時代の到来ということを重視した記述となっている。これらの本をもとにしながら、外国人に日本の宗教状況を紹介するため執筆したのが *Contemporary Japanese Religion*（Foreign Press Center/Japan、2000）である。学生に対する宗教社会学のテキストとして刊行したのが『宗教社会学のすすめ』（丸善、2002）で、同様に神道についての入門書として刊行したのが『神道入門』（平凡社、2006）である。昨今では学生を対象にしたものでも、新書よりさらに噛み砕いたものが求められるようになっている。そこで執筆したのが『図解雑学　宗教』（ナツメ社、2001）、『図解雑学　神道』（ナツメ社、2006）である。『ポケット図解　宗教社会学がよ～くわかる本』（秀和システム、2007）も同様の趣旨である。

単行本の刊行とともに、事典の編集に多く関わる機会をもった。『新宗教事典』の他、『神道事典』（共編、弘文堂、1994）、『新宗教教団・人物事典』（共編、弘文堂、1996）、『現代宗教事典』（編著、弘文堂、2005）の編集に関わってきた。『神道事典』は日本文化研究所の総合プロジェクトとして実施したもので、21世紀ＣＯＥプログラムでは、この本文をすべて英訳してウェブ上で公開した。『現代宗教事典』は、現代宗教という研究分野を想定し、そこで対象となるであろう項目を選定した。ちなみに、現在『世界現代宗教事典（仮題）』を４人で翻訳中で、本年中の刊行を目指しているが、この内容は『現代宗教事典』の国際版的なものであると感じている。また、『続神道論文総目録』（國學院大學日本文化研究所編、弘文堂、1989）、『神道人物研究文献目録』（國學院大學日本文化研究所編、弘文堂、2000）という文献目録の作成にも責任者として関わってきた。事典ではないが、ミニ事典的な機能をもたせるために編集したのが、『世界の宗教１０１物語』（新書館、1997）と『近代日本の宗教家101』（新書館、2007）である。とくに前者は日本と世界の主な宗教を網羅してあるので、宗教学を少し専門的に学ぼうとする学生にとっては入門書になるのではないか考えている。

1998年から財団法人国際宗教研究所の宗教情報リサーチセンターのセンター長として、宗教情報の収集と公開という作業にも関わっている。ささやかな社会貢献のつもりでいるのだが、なかなか課題は多い。

【研究紹介】

近世・近代の国学・神道史を専攻している。大学院修士時代には国学者の思想的側面に興味を持ち、賀茂真淵の世界観理解に関する研究で修士論文をまとめた。博士課程に入ってからは、時代を遡及して荷田春満の研究に着手した。当初の目論見では２、３年でまとめられるだろうと考えていたが、甘い見通しであった。その時、思想が展開する社会的な文脈を理解しなければならないということに気が付き、近世の神社や社家に関する研究も並行して進めるようになった。結局、この営みが現在まで続いているのである。書かれた思想とその具体的な場所・実践との架橋が課題であり、本プロジェクトもその課題を解明する試みである。以下、現在の具体的研究テーマを挙げる。

(1) 荷田春満の思想と実践
(2) 鈴門を中心とした霊魂観の言説と実践
(3) 近世神道史の通史的理解
(4) 国学研究史
(5) 近代神道学史

【2007年度の研究業績】

［史料翻刻］

・「相馬地方における平田篤胤書簡Ⅴ」『國學院大學日本文化研究所紀要』　100輯　平成20年３月

【2007年度以前の主な研究業績】

［単著］

・『荷田春満の国学と神道史』　弘文堂　平成17年

［共編］

・『新編　荷田春満全集』第３巻　おうふう　平成17年
・『新編　荷田春満全集』第２巻　おうふう　平成16年

［論文］

・「近世偽文書と神職の意識と行動―元和・天和の「神社条目」について―」『日本文化と神道』第２号　平成18年２月

【研究紹介】

専門は神話学。とくに近現代の日本において、神話がどう読まれてきたか、どう扱われているのか、人々は神話を使って何を表現してきたのかという問題に関心をもち、研究を行っている。最近は神話と宗教文化教育の問題についても興味をもっている。具体的には、次のようなテーマに取り組んでいる。

(1) 明治期の神話学について。
　①B・H・チェンバレンやW・G・アストンら明治期の外国人による日本神話の読み方とその影響。
　②日本で神話学が受容され、研究が開始されていく背景。

(2) 日本神話の比較研究の歴史。現在はとくに昭和前期の植民地主義との関わりを研究している。

(3) 現代社会における神話の利用方法とその特徴。とくにポップカルチャーにおける神話の利用に関心がある。

(4) 宗教文化教育における神話教育の可能性と課題。

本プロジェクトでは、Encyclopedia of Shintoの編集作業と国際研究フォーラムの運営を分担している。

【2007年度の研究業績】

［論文］

・「グローバル化社会とハイパー神話―コンピュータRPGによる神話の解体と再生―」（松村一男・山中弘編『神話と現代』リトン、2007年12月）

［分担執筆］

・井上順孝編『近代日本の宗教家１０１』（新書館、2007年4月）・・・「今岡信一良」、「酒井勝軍」、「松村介石」を担当

・島薗進・石井研士・下田正弘・深澤英隆編『宗教学文献事典』（弘文堂、2007年12月）・・・「デュメジル・コレクション」、「三品彰英論文集」を担当

［講演・シンポジウム・研究会］

・「植民地帝国日本の神話学―昭和前期の日本神話研究を中心に―」科学研究費補助金プロジェクト「ファシズム期の宗教と宗教研究にかんする国際的比較研究」研究会、京都市国際交流会館、2007年7月20日

・「昭和前期の日本神話研究」シンポジウム «Shinto Studies and Nationalism»、オーストリア国立科学アカデミー、2007年9月13日

・「植民地帝国日本の神話学」近代問題研究会、國學院大學、2007年12月1日

・「神道を外国人にどう伝えるか」日本文化を知る講座、國學院大學、2007年10月20日

・「宗教教育を宗教界はどうサポートできるのか」（コメント）財団法人 国際宗教研究所 主催 公開シンポジウム「宗教教育を宗教界はどうサポートできるのか」2007年12月8日

・「人文科学と画像資料研究―画像資料の公開と知的財産権―」（コメント）國學院大學、画像資料研究フォーラムXI、2008年3月8日

【2007年度以前の主な研究業績】

［単著］

・『神話学と日本の神々』弘文堂、2004年

［論文］

・「現代日本における神話―現代宗教論との関わりから―」『日本文化と神道』第3号（國學院大學21世紀COEプログラム研究センター、2006年

・“Study of Japanese Mythology and Nationalism”『日本文化と神道』第3号（國學院大學21世紀COEプログラム研究センター、2006年

・「レオン・ド・ロニと日本神話」『学習院大学国語国文学会誌』第49号（学習院大学国語国文学会、2006年

・「古事記・日本書紀の神話学的研究の現在―最近の傾向と課題」『國文學』第51巻1号、學燈社、2006年

【研究紹介】

専門は日本宗教史。近世・近代を研究対象としている。これまでの中心的な対象は神道・国学で、特に平田国学について集中的な研究を行ってきた。思想史と社会史の両方に関心を持ち、両者を架橋するアプローチで宗教思想についての考察を行っている。また、近代の人文学について神道研究を主対象として、大学における学問的営為と神社行政における学問の役割との関係について分析している。

(1) 平田篤胤および気吹舎の思想・活動に関する思想史・社会史両面からの研究

(2) 國學院大學図書館蔵宮地直一コレクションを中心とした、近代神道研究の社会史的・文化史的研究

本プロジェクトでは、全体の計画、および平田篤胤の思想分析、気吹舎の地域門人の宗教社会史的研究を担当している。

【2007年度の研究業績】

[単著]

・『平田国学と近世社会』(ぺりかん社、2008年2月)

[資料翻刻]

・「相馬地方における平田銕胤書簡(V)」『國學院大學日本文化研究所紀要』第100輯

[講演・シンポジウム・研究会]

・"Shinto Studies and Shrine Policy in the First Half of the 20th Century: The Case of Miyaji Naokazu", in Symposium: Shinto Studies and Nationalism, Austrian Academy of Sciences Institute for the Cultural and Intellectual History of Asia, 2007年9月

・第1回「國學院の学術資産に見るモノと心」研究フォーラム(コメント)、國學院大學伝統文化リサーチセンター 、2007年12月

[評論・書評など]

・「馬琴と篤胤」『近世の好古家たち』雄山閣、2008年2月

・(共著) "Religion", in *An Introductory Bibliography for Japanese Studies vol. XV (2003-2004) Part 2,* The Japan Foundation, 2007年

【2007年度以前の主な研究業績】

[共著]

・島薗進・磯前順一編『東京帝国大学神道研究室旧蔵書　目録と解説』東京堂出版、1996年6月

・井上順孝編『ワードマップ　神道』新曜社、1998年12月

・國學院大學日本文化研究所編『神道人物研究文献目録』弘文堂、2000年3月

・樋口雄彦(研究代表)『平成15年度～平成18年度科学研究費補助金〔基盤研究(B)〕研究成果報告書「平田国学の再検討―篤胤・銕胤・延胤・盛胤文書の再検討―」(1)(2)』2007年3月

[論文]

・「「神道」から見た近世と近代」『岩波講座宗教3　宗教史の可能性』岩波書店、2004年2月

星野靖二助教　担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

専門は宗教学で、最近は主に近代の日本において「宗教」というものがどのようなものとして捉えられ、また語られてきたのかということについて、実際に何らかの宗教伝統に関わっていた人々に即して考察している。

既に近代日本における宗教言説の展開については一定の研究蓄積があるが、問題関心は特定の宗教伝統を奉じる者達がその宗教伝統をどのように捉え、提示してきたのかという点にあり、そうした観点から一部の仏教徒達やキリスト教徒達に焦点をあて、それらの人々が同時代的な宗教言説を何らか参照しながら自らの宗教理解を組み立て直していく営みについて研究を行ってきた。

更に、これをそれらの人々が単に同時代における宗教言説を受容して読み替えていく営為としてのみ捉えるのではなく、そこでそれらの人々が様々に自らの宗教伝統について語ることが、また再帰的に近代日本の宗教言説の形成に関わっていくという往還的な過程として論じることを試みている。

また、これに関連して近代日本の宗教の歴史を叙述する際の方法論についても関心を持っている。

本プロジェクトでは、Encyclopedia of Shinto の編集補助と、デジタル・ミュージアムに移行が予定されている諸データベースの実務担当者との連絡調整等を担当している。

【2007年度の研究業績】

［分担執筆］

・島薗進、石井研士、下田正弘、深澤英隆編『宗教学文献事典』（弘文堂、2007 年 12 月）･･･『思想史再考』、『宗教進化論』、『宗教の改造』、『真理一斑』、『田中正造の生涯』、『明治思想家の宗教観』、『明治文化史』、『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』を担当。

［その他］

・島薗進監修、島薗進・高橋原・星野靖二編集『宗教学の諸分野の形成』（日本の宗教学」第五期、全九冊、クレス出版、2007 年 11 月）・・・編集、解説を担当（共著「解説」第九巻、pp.1-34）

・「書評――山崎渾子『岩倉使節団における宗教問題』」（『日本歴史』717, 2008 年 2 月）

［口頭発表］

・「キリスト教史と宗教史の "あいだ" －近代日本〈宗教〉史の試み」（宗教史学研究所第 45 回例会、2007 年 6 月 23 日）

・「近代日本の「知識人宗教」－宗教の知による再構成をめぐって－」（「「知識人宗教」の問題圏」パネルにおける発表）（日本宗教学会第 66 会学術大会、2007 年 9 月 16 日）

・「近代日本における〈信仰〉の位相」（共同研究会「東アジアにおける知的システムの近代的再編成」（国際日本文化研究センター）における研究報告、2007 年 11 月 17 日）

【2007年度以前の主な研究業績】

［論文］

・「「宗教」の位置づけをめぐって―明治前期におけるキリスト教徒達にみる」（島薗進・鶴岡賀雄編『〈宗教〉再考』ぺりかん社 , 2004 年 1 月）pp.228-253

・「明治十年代におけるある仏基論争の位相――高橋五郎と蘆津実全を中心に」（『宗教学論集』26 輯 , 駒沢宗教学研究会 , 2007 年 3 月）pp.37-65

［その他］

・島薗進監修、島薗進・高橋原・星野靖二編集『宗教学の形成過程』（日本の宗教学」第四期、全 9 冊、クレス出版、2006 年 10 月）・・・編集、解説を担当（共著「解説」第 9 巻、pp.1-46）

石井研士 兼担教授　担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

専攻は宗教学、宗教社会学。現代社会と宗教を研究対象とし、戦後の宗教の変容を社会構造の変動との関わりから理解することを目的としている。

(1) 都市化と宗教に関する研究
(2) 情報化と宗教に関する研究
(3) 日本人の宗教意識・宗教行動の変化・持続に関する研究
(4) 宗教団体の公共性に関する研究

【2007年度の研究紹介】

[単行本]

・『増補改訂版　データブック現代日本人の宗教』新曜社、2007年4月
・『山口県・後継者問題実態調査報告書』2007年7月
・島薗進・石井研士・下田正弘・深澤英隆編『宗教学文献事典』弘文堂、2007年12月

[論文]

・「氏神信仰の10年　「神社に関する意識調査」から」(『第3回『神社に関する意識調査』報告書』神社本庁教学研究所、2007年10月)
・「テレビの放送にかかる法的規制に関する考察」(『宗教法』第26号、2007年11月)
・「現代日本人の魂のゆくえ」(『明治聖徳記念学会紀要』復刊第44号、2007年11月)
・「霊のいるトコロ」(一柳廣孝・吉田司雄編『霊はどこにいるのか』青弓社2007年12月)
・「宗教に関するメディア・ステレオタイピング試論」(『國學院大學日本文化研究所紀要』第100輯、2008年3月)
・「宗教団体の公益活動・公益性に関する一考察」(『國學院大學大学院紀要』第39輯、2008年3月)
・「現代社会における神道教学の諸問題」(『神社本庁教学研究所紀要』第13号、2008年3月)

【2007年度以前の主な研究業績】

[単行本]

・『銀座の神々－都市に溶け込む宗教』新曜社、1994年
・『都市の年中行事－変容する日本人の心性』春秋社、1994年
・『データブック現代日本人の宗教　戦後50年の宗教意識と宗教行動』新曜社、1997年
・『社会変動と神社神道』大明堂、1998年
・『日本人の一年と一生』春秋社、2005年
・『結婚式－幸せを創る儀式』日本放送出版協会、2005年

[訳書]

・カール・ドベラーレ『宗教のダイナミックス－世俗化の宗教社会学』ヤン・スィンゲドー共訳、ヨルダン社　1992年
・ニニアン・スマート『世界の諸宗教Ⅱ』教文館2000年

黒﨑浩行 兼担准教授　担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

インターネットをはじめとする情報化と宗教とのかかわりについて研究している。これまでは神社神道のインターネット利用を中心として調査を行ってきたが、今後は雑多な情報が混淆するコミュニケーション空間における宗教的な志向性を探究していきたいと考えており、その手がかりを探っている。そのほか、宗教の社会貢献活動に関する共同研究の一環として、神社神道と地域社会との新たな連携について調査研究を進めている。

総合プロジェクト「デジタル・ミュージアムの構築と展開」では、日本文化研究所で携わらせていただいたインターネットによる学術情報発信の経験をふまえて、デジタル・ミュージアムの構築と教育面での活用について協力していく。

【2007年度の研究業績】

［論文］

・「インターネットにおける祈りの理解に向けて：祈りをめぐる二つの志向性」川端亮（研究代表者）『社会意識研究法としての言説データベースの構築とその利用：宗教言説を事例として』（研究課題番号17330115）平成17年度～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書、2008年3月、69-82。

［報告書］

・『写真資料デジタル化の手引き　保存と研究活用のために』國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、2008年3月。（共著）

・「画像資料研究フォーラムX「人文科学と画像資料研究」―デジタル情報を生かした教材作成に向けて―」『國學院大學研究開発推進機構　プロジェクト研究報告　人文科学と画像資料研究』5、2008年3月、45-47。

・「学術資産のデジタルデータ化―記録保存と活用の狭間で―」『國學院大學研究開発推進機構　プロジェクト研究報告　人文科学と画像資料研究』5、2008年3月、107-109。

［学会発表］

・「インターネット上の宗教情報に対する研究視角」日本宗教学会第66回学術大会、2007年9月。

［研究会発表］

・「地域づくりにおける参加機会創出と神社・祭礼―熊本県人吉市の事例から―」「宗教と社会」学会「宗教の社会貢献活動研究」プロジェクト第7回研究会、2008年3月。

［項目記事］

・「「セカンドライフ」の中の仮想宗教の動き」渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本2008』平凡社、2008年、200-203。

［研究会司会］

・「画像資料研究フォーラムXI「人文科学と画像資料研究」―画像資料の公開と知的財産権」國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、2008年3月。

【2007年度以前の主な研究業績】

［論文］

・「インターネット文化のハイブリッド性と神社神道」『日本文化と神道』3、2006年12月、59-79。

［項目記事］

・「インターネットの中の宗教：Web 2.0と宗教のゆくえ」渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本2007』平凡社、2007年、164-167。

ヘイヴンズ, ノルマン 准教授　担当プロジェクト:「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

専門：　宗教学、特に日本近世の民間信仰（「お陰参り」などの伊勢信仰が中心）。数年前から日本の自然観、環境問題と宗教などにも関心をもち、2006 年度から國學院大學の「現代ＧＰ」プログラム、「環境教育研究プロジェクト」にも参加している。「デジタルミュージアム」の前身である 21 世紀ＣＯＥプログラムでは『神道事典』（ＥＯＳ：Encyclopedia of Shinto）の英訳・編集・オンライン化運営を分担している。

【2007 年度以前の主な研究業績】

・*Encyclopedia of Shinto: vol 1: Kami*（翻訳・編集）. Kokugakuin University, Institute for Japanese Culture and Classics, 2001.

・*Encyclopedia of Shinto: vol 2: Jinja*（翻訳・編集）. Kokugakuin University, Institute for Japanese Culture and Classics, 2004.

・*Encyclopedia of Shinto: vol 3: Groups, Organizations, and Personalities*（翻訳・編集）. Kokugakuin University, Institute for Japanese Culture and Classics, 2006.

・“Shinto” in Paul L. Swanson and Clark Chilson, eds., *Nanzan Guide to Japanese Religions* (Honolulu: University of Hawai’ I Press, 2006).

・Shinto in the Western Mind（「西洋人の心による神道」）、『日本文化と神道』第 1 号（國學院大學 21 世紀 COE プログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」成果論文集）、國學院大學 21 世紀 COE プログラム研究センター 2006 年 2 月

［講演・シンポジウム・研究会］

・「環境問題と宗教の関わりについて」國學院大學環境教育研究プロジェクト、中国南開大学での合同講演会・セミナー、2008 年 3 月 18 日

【研究紹介】

専門は神道神学。とりわけ近世国学者の神理解を、神道神学の視点から分析している。これまで具体的には次のようなテーマに取り組んだ。

(1) プロテスタントの組織神学者R・オットーのヌミノーゼ概念と本居宣長の「神の定義」との比較研究。

(2) 戦後神道神学及び神道理論を専攻した研究者の方法論の比較研究。

(3) 本居宣長の著述稿本に基づく神学の成長過程に関する研究。

(4) 橘守部の神学と「顕生魂」概念の確立過程に関する研究。等。

現在は、近世から近代に至る国学者の『日本書紀』とりわけ「宝鏡開始章」をめぐる注釈の比較研究に取り組んでいる。

【2007年度の研究業績】

［論文］

・「多神信仰の論理―国学者の視点―」國學院大學研究開発推進センター『研究紀要』第1号、2007年3月

【2007年度以前の主な研究業績】

［論文］

・「荒魂考」・『國學院雑誌』第104巻第11号、2003年11月。

・「鈴木重胤と神祇祭祀―神学確立過程に関する一考察―」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第40号、2004年12月。

・「豊受大神敬祭説をめぐって」・『神道宗教』第199・200合併号、2005年10月。等。

市川 収 客員研究員　担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

専門は惑星物質科学。ある種の隕石は太陽系形成初期の情報を有していると考えられ、それを研究する事により太陽系形成初期の環境や、その隕石の母天体の環境および形成過程が明らかになる事が期待される。

その他として、マルチメディア機器を用いた効果的な授業の展開に関する研究に携わった。

本プロジェクトでは Encyclopedia of Shinto の Web ページの制作を分担している。

【2007年度の研究業績】

［論文］

・「学習院大学におけるマルチメディア機器利用の実態」（市川収・大谷健一・松岡東香『大学教育と情報』2008 年 1 月）

【2007年度以前の主な研究業績】

・マルチメディア機器が文房具として使いこなされる日を目指して（『大学教育と情報』Vol.10 No.2, 29-32, 2001）

・Antarctic Micrometeorites collected at the Dome FUJI station.（*Antarctic Meteorite Research* No.12, 1999）

・DEGREE OF AQUEOUS ALTERATION OF CHONDRULES IN Y-790112 CR CHONDRITE.（*Meteoritucs & Planetary Science* Vol. 31, 1996）

・PETROLOGY OF THE YAMATO-8449 CR CHONDRITE（*Proceedings of the NIPR Symposium on Antarctic Meteorites* No. 8 , 1995）

市田雅崇 PD研究員　担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

専門は民俗宗教研究。神社祭祀を中心に民俗宗教の視点から考察。近代化における変容、現代における観光や地域復興による変容などを視野に入れ、儀礼とそれをとりまく言説を通して、地域社会の共同性・歴史意識が構築される過程と意味を研究している。おもな調査地は気多大社（石川県）、大物忌神社（山形県）など。

本プロジェクトでは Encyclopedia of Shinto のデジタルコンテンツ編集作業を担当。

【2007年度の研究業績】

［論文］

・「民俗宗教空間の歴史性」（『哲学』第 119 集［鈴木正崇編、特集文化人類学の現代的課題Ⅱ］、2008 年 3 月）

［講演・シンポジウム・研究会］

・「明治期の由来書上にみる民俗宗教的世界」日本宗教学会第 66 回学術大会、立正大学、2007 年 9 月

【2007年度以前の主な研究業績】

・「〈歴史の共有〉と宗教儀礼―気多神社平国祭の事例から―」（『日本民俗学』第 228 号、2001 年 11 月）

・「民俗社会における歴史の生成―儀礼に関する『ありふれた』語りから歴史を問う」（『生活学論叢』第10号、2005 年 10 月）

・「儀礼のなかの大きな物語と小さな物語―鵜祭と鵜を迎える人たち―」（『國學院大學日本文化研究所紀要』第 99 号、2007 年 3 月）

大澤広嗣 PD研究員　担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

専門は宗教学・宗教史。近現代における日本とアジア諸宗教との関係史について研究を行っている。平成 20 年度からは、科学研究費補助金・若手研究（B）「昭和前期における日本仏教と東南アジアの関係史についての基礎的研究」の研究代表者として、上記の課題について実態の解明を進めている。本プロジェクトでは、Encyclopedia of Shinto の動画ならびに音声コンテンツの作成、教派神道史料のデジタル化に従事している。

【2007 年度の研究業績】

［論文］

・「巴利文化学院の対外活動―戦時期における宗教宣撫工作の一事例として―」（『近代仏教』第 14 号、日本近代仏教史研究会、2007 年 11 月）

・「日本軍政下のマラヤにおける宗教調査―渡辺楳雄について―」（『アジア文化研究所研究年報』第 42 号、東洋大学アジア文化研究所、2008 年 2 月）

・「戦後初期の渡辺楳雄―宗務行政と宗教界との関わりから―」（『國學院大學日本文化研究所紀要』第 100 輯、國學院大學日本文化研究所、2008 年 3 月）

・「昭和前期における真言宗喇嘛教研究所の学術活動について」（『大正大学大学院研究論集』第 32 号、大正大学、2008 年 3 月）

・「戦時期ビルマにおける宣撫活動と日本人仏教者―上田天瑞を中心に―」（『宗教学論集』第 27 輯、駒沢宗教学研究会、2008 年 3 月）

【2007 年度以前の主な研究業績】

・『昭和前期におけるアジア諸宗教の調査研究活動に関する分析的研究』（博士論文、大正大学甲第 40 号、2007 年 3 月）

星野光樹 PD研究員　担当プロジェクト：「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」

【研究紹介】

専門は神道の祭祀、とりわけ祭式についてである。近世から近代にかけて、神社でおこなう種々の儀礼が、いかなる思想・信仰・社会のもとで成立し、展開していったのかについて、具体的には、次のような課題を検討している。

（1）幕末維新期における国学者の神道観と神社における祭祀・儀礼との関わりについて

（2）明治８年制定の「神社祭式」の成立過程について

（3）近代以降の私祈祷の成立と展開について

本プロジェクトでは、主に国学者六人部是香の霊魂観について、葬祭儀礼に関する史料からの分析をすすめている。

【2007 年度の研究業績】

［論文］

・「明治期における敬神思想と祝詞作文に関する小考」（『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第 2 号、平成 20 年 3 月）

【2007 年度以前の主な研究業績】

［論文］

・「近代における祈願祭祀の成立に関する一考察－六人部是香著『私祭要集』を中心に－」（『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第 1 号、平成 19 年 3 月）

・「明治八年式部寮達「神社祭式」の制定過程に関する一考察」（『日本文化と神道』　第３号、平成 18 年 12 月）

・「幕末維新期における祭政一致観－会沢正志斎と国学者をめぐって－」阪本是丸編『国家神道再考―祭政一致国家の形成と展開―』（弘文堂、平成 18 年 10 月）

李和珍 研究補助員　担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

専門は宗教社会学。日韓の新宗教の比較研究をしている。とくに日本の新宗教の「妙智會教団」と韓国の新宗教である「圓仏教」の現在の活動を、情報化、グローバル化の影響を見ながら比較研究している。21 世紀ＣＯＥプログラムの事業で行われた Encyclopedia of Shinto の 9 つの Chapter introductions を韓国語に翻訳した。また「神道大教にみられる「神道」の教団化過程」（井上順孝）の韓国語翻訳をおこなった。これらはウェブ上に公開されている。本プロジェクトでは、Encyclopedia of Shinto の韓国語の翻訳を担当している。

【2007 年度の研究業績】

［論文］

・「情報化時代における妙智會会員の意識 ―会員へのアンケート調査の分析を中心に―(1)、(2)」『国際宗教研究所ニュースレター』第 56 号、 第 57 号、2007 年 11 月、2008 年 1 月

・「グローバル化時代の到来と新宗教の展開 ―妙智會教団の事例―」 駒沢大学宗教研究会『宗教学論集』第 27 輯　2008 年 2 月

［分担執筆］

・「小谷喜美」「長沼妙佼」「宮本ミツ」 井上順孝編『近代日本の宗教家 101』 新書館 2007 年 4 月

［講演・シンポジウム・研究会］

・「妙智會教団会員の世代間意識調査」 日・韓次世代学術 FORUM 第 4 回国際学術大会　2007 年 6 月 23 日発表

【2007 年度以前の主な研究業績】

・「妙智會教団の研究史の分析 ―宗教社会学的視点を中心に－」『國學院大學大学院紀要』文学研究科第 37 輯　2006 年 3 月

ココラ，ラウラ 研究補助員　担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

［研究紹介］

専門としては日本の伝統芸能を研究しています。とくに歌舞伎における「芝居」と「儀式」・「信仰」との関わりに関心を持っております。現在の主な研究分野は以下の通りです。

1. 歌舞伎の三番叟ものにおける「儀式」と「パロディ」
2. 芝居年中行事
3. 能楽論と宗教
4. 日本舞踊の様式

本プロジェクトにおいては、Encyclopedia of Shinto の翻訳、校正を担当しております。

［研究業績］

・*Kabuki*, Palimpsest 出版社、ブカレスト、ルーマニア、2003.

小林威朗研究補助員　担当プロジェクト：「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」

【研究紹介】

近世後期から明治初期における神職であり国学者でもある人物を中心に研究している。特に興味を持っているのは、当該時代の神職国学者がどのような学問を受容し、どのような影響を受け、そして門人等にどのような影響を与えたのかということである。このような視点から本プロジェクトで研究会を行っている『霊能真柱』に重点を置いて研究を行っていきたい。

(1) 具体的には、着目する神職国学者が『霊能真柱』をどのように受容したか

(2) その影響を受けてその人物がどのような思想を形成したか（著作等）

(3) その思想の結実としてどのような行動をとったのか（神葬祭等）

を研究する。

本プロジェクトでは、鳥取藩の神職国学者飯田年平の調査研究、高玉安兄宛平田銕胤書簡の翻刻、本居文庫蔵『霊能真柱』の注釈作業を分担している。

【2007年度の研究業績】

［論文］

・「神道の生命倫理」（財団法人神道文化会設立六十周年記念懸賞論文「神道と生命倫理」特選受賞、2007年10月）

・「岡熊臣の思想―『読淫祀論』を中心に―」（『神道研究集録』第22輯、2008年3月）

［研究会］

・「幕末津和野藩の社寺政策」（第156回駒沢宗教学研究会・関東地区修士論文発表会、2008年3月）

三ツ松誠研究補助員　担当プロジェクト：「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」

【研究紹介】

日本近世史の立場から、幕末国学を研究している。とりわけ、国学的世界像と当該期の政治運動との関係について問い直すことを課題としている。これまで、南信・東濃地域における平田国学の受容過程や、幽界情報に対する気吹舎の態度変化を跡づけることで、篤胤没後門人の性格変容を検討してきた。現在は新政府成立後も視野に入れて、コスモロジーと政治状況とを関連づけた分析を目指している。関連して、広く政治情況と歴史叙述との結びつきに興味がある。

本プロジェクトでは、『霊能真柱』のネット公開に向けた校註、また高玉家文書の翻刻に関係する作業に従事し、それらを支える研究会の運営を補佐している。

【2007年度の研究業績】

［講演・シンポジウム・研究会］

・「「幽界物語」と気吹舎の変容」第32回「書物・出版と社会変容」研究会、一橋大学佐野書院、2007年6月9日。

・「明治維新と「幽界」―明治初年の平田国学をめぐって―」2007年度史学会大会日本史部会（近世・近現代）、東京大学、2007年11月18日。

・「紀州藩における国学者の存在形態―参沢明を例に―」千葉県史編纂近世史部会研究例会、2007年12月15日。

［資料翻刻］

・（共著）「相馬地方における平田銕胤書簡（V）」（代表松本久史「近世国学の霊魂観をめぐる思想と行動の研究プロジェクト」プロジェクト報告、『國學院大學日本文化研究所紀要』第100輯、2008年3月）

【2007年度以前の主な研究業績】

・「伊那における平田国学の伝達作用の諸相」（飯田市歴史研究所研究活動助成成果概要、『飯田市歴史研究所年報』第3号、2005年8月）

・（共著）『下伊那郡清内路村下区区有文書調査報告書』第3号（東京大学日本史学研究室、2006年3月）

ラフィーバ、ジェシー 研究補助員　担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

専門は宗教学。消費化や近代化、国際化、情報化など、特徴のある世俗化された日本社会における宗教的要素と、自らを頑なに「無宗教」と強調する日本人がいつ宗教的行為に移すかという事などに興味を持っている。とりわけ、現代日本社会における聖職者と宗教的儀式・儀礼の機能に関心を持っている。たとえば、どのように聖職者は創造・維持されるか、社会における少数派の聖職者はどう宗教的行為を定義するか、この聖職者は宗教的行為によってどうのように社会に定義されているか、聖職者同士また社会における儀式・儀礼はどういう機能を果たしているか、現代社会に存在する少数派の聖職者はどういう役を果たしているかというような事柄などを研究している。

本プロジェクトでは Encyclopedia of Shinto などの和英翻訳・英文編集を担当している。

【2007年度の研究業績】

［講演・シンポジウム・研究会］

・「現世利益と悟りの追求：求聞持法の解釈」アメリカ・カナダ日本研究センターの総合発表学会、クイーンズスクエア横浜クイーンモール３階みなとみらいギャラリープレゼンテーション・ホール、2007 年 6 月 6 日。

・「宗教とは何か―現代日本社会における宗教」フェリス大学院大学国際交流学部特別講演者、フェリス大学、2007 年 11 月。

［和英翻訳］

・岡田荘司「天皇と神々の循環型祭祀体系―古代の祟神」(『神道宗教』199・200 合併号 73 － 88 頁 2005 年)、http://21coe.kokugakuin.ac.jp/articlesintranslation/

関守　ゲイノー客員教授　担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

専門は日本宗教史、とくに修験道（その歴史、行事）、それと関連して、つぎのようなテーマに関心を寄せている。(1) 修験道と神仏分離 。(2) 羽黒修験道の儀礼の歴史　（手文を使って）(3) 女人禁制、とくに現代の山上ガ岳開放問題。(4) 修験道の寺社の歴史学、地理学研究（とくに絵図、寺社案内書などを使って）(5) 現代の修験道復 。

【2006 － 2007年度の研究業績】

［論文］

“Star Rituals and Nikko Shugendo” *CULTURE AND COSMOS* 10-1, 2006, pp. 217-50; “Sacralizing the Border: The Engendering of Liminal Space” *TASJ* 20, 2006, pp. 53-69; “Varied Reactions to the Shinto-Buddhist Separation Edicts as Seen in Shugendo Shrine-Temple Complexes 1868-1875”『山岳修験』2007.11, pp. 25-55.

［講演・シンポジウム・研究会］

“Tradition, Reason and Emotion : Female Exclusion and Preserving the Past in the Omine Mountains”（オーストラリア日本学の学会、キャンベラ2007年7月), 羽黒修験道と神仏分離　（いでは文化記念館、手向、2007年7月）“Legends of the Fall, the Iconoclasm of Sacred Space”（AAR 学会、サンジエゴ、2007年11月)、“Defining Shugendo Past and Present: The ‘Restoration’ of Shugendo at Nikko and Koshikidake”（Barnard Hall, Columbia University, ニューヨーク 2008年4月)

【2007年度以前の主な研究業績】

“Paper Fowl and Wooden Fish, The Separation of Kami and Buddha Worship in Haguro Shugendo, 1869-75 (*Japanese Journal of Religious Studies* 32.2, 2005年、pp. 197-234), 宮家準著 *Mandala of the Mountain* (翻訳、編集、序文)、「秋の峰の歴史を歩む」(『千年の修験―羽黒山伏の世界』新宿書房 2005, pp. 88-127).

ケイト・W・ナカイ 客員教授　担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

専門は日本思想史。とくに儒学など外来思想が日本においてどう土着し、本来の神観念などと絡み合い、儀礼、政治観念、自国アイデンティティーに影響を与えたかという問題に関心を持ち、研究を行なっている。具体的には、次のようなテーマに取り組んでいる。

(1) 中世・近世の記紀神話解釈

(2) 異色の儒家神道として、また日本固有の儒学形態としての水戸学

(3) 上智大学・靖国神社事件から見る 1930 年代の国家神道

本プロジェクトでは Encyclopedia of Shinto の編集作業と国際研究フォーラムの運営に参加している。

【2007 年度の研究業績】

［論文］

・“‘The Age of the Gods’ in Medieval and Early Modern Historiography”(James C. Baxter, Joshua A. Fogel 編 , *Writing Histories in Japan: Texts and Their Transformations from Ancient Times through the Meiji Era*, International Research Center for Japanese Studies, Kyoto, 2007).

［講演・シンポジウム・研究会］

・“Coming to Terms with ‘Reverence at Shrines’: The 1932 Sophia University–Yasukuni Shrine Incident,” Symposium: Shinto Studies and Nationalism, Institute for the Cultural and Intellectual History of Asia, Austrian Academy of Sciences, Vienna, 14 September 2007.

【2007 年度以前の主な研究業績】

・*Shogunal Politics: Arai Hakuseki and the Premises of Tokugawa Rule* (Council on East Asian Studies, Harvard University, 1988); 日本語訳：新井白石の政治戦略—儒学と史論（東京大学出版会、2001）。

・“‘Esoteric’ and ‘Public’ in Late Mito Thought” (Bernhard Scheid, Mark Teeuwen 編 , *The Culture of Secrecy in Japanese Religion*, Routledge, 2006)

林　淳 客員教授　担当プロジェクト：「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究—霊祭・霊社・神葬祭—」

【研究紹介】

専門は日本宗教史。とくに近世の陰陽道を中心に、さまざまな宗教者の相互関係を解明する研究を行っている。それ以外にも、つぎのようなテーマに関心を寄せている。

(1) 近世の改暦について。改暦にかかわった土御門家、天文方、暦学者の相互関係の解明。

(2) 宗教学、民俗学、仏教学、宗教社会学などの近代学問史の再検討。

(3) 近世の芸能的宗教者の活動、とくに配札活動とそれをめぐる争論についての研究。

(4) 近代仏教史の時代区分と枠組みについての研究。

(5) 愛知県の民俗信仰の調査研究。

【2007 年度の研究業績】

［論文］

・“The Tokugawa Shoguns and Onmyōdō” *CULTURE AND COSMOS* 10-1, pp.49-62

・「近世の土御門家と三河・尾張万歳」(大阪人権博物館編『万歳』、2007 年 9 月)

・「貞享暦」(『歴史と地理』610 号、2007 年 12 月)

［講演・シンポジウム・研究会］

・「仏教民俗学の学史的意義」(日本民俗学会第 59 回年会プレシンポジウム、大谷大学、2007 年 6 月 10 日)

・「陰陽道と神道」(明治聖徳記念学会、明治神宮、2007 年 7 月 21 日)

【2007 年度以前の主な研究業績】

・『近世陰陽道の研究』(吉川弘文館、2005 年)

・『天文方と陰陽道』(山川出版社、2006 年)

アイフラ、アンネマリー 共同研究員　担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

専門は日本学。主に教派神道に関心を持ち、研究を行っている。修士論文のテーマをより深めるため、出雲大社教についてより詳細に研究する予定である。とくに出雲大社教の形成と千家尊福について調べている。そのために、現在は教派神道と出雲大社教に関する一次資料・二次資料の収集、調査にあたっている。その資料を手がかりに千家尊福、どのような目的で集団を組織化していったのかを分析するつもりである。その際、思想の変化についても論じたいと思う。

主たる研究のプロセスは次の通りである。

(1) 出雲大社教の歴史的な展開とその教祖千家尊福(1845-1918)に関する資料調査。

(2) ドイツではまったく入手できなかった歴史資料の収集作業にあたる。

(3) 出雲大社教の形成に伴って千家尊福の神道概念、すなわち出雲信仰の解釈も変化していったかどうかを分析。

(4) 出雲大社教における出雲信仰と出雲大社の関係。

(5) 出雲大社または出雲大社教の東京分祠と本社との関係。出雲大社教分祠の役割と発展。

そのほか、日本神道研究の学術的方法論も勉強したいと思う。

【2007年度以前の主な研究業績】

・修士論文（2006年）：「出雲における教派神道の形成―神道大社教を手がかりに」

江島尚俊 客員研究員　担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

近代日本における宗教と近代化の問題を、仏教に焦点をあてて研究。特に、従来の研究で等閑視されてきた「教団」を軸に、近代化と伝統の葛藤を伝統宗教集団の目線から明らかにする。

(1) 従来の研究において「近代的仏教」として扱われてきた人物や運動体が、その当時、「教団」をどのように語っていたかを明らかにする。

(2)「教団」としての組織変革、体制整備のプロセスおよびメカニズムを、意思決定機関の変遷から分析する。

(3) 各「教団」における宗祖を集団統合のシンボルとしてみなし、「教団」がそのシンボルに対してどのような言説を付与していたのかを明らかにする。

(4) 学術的ウェブコンテンツ発信のためのアプリケーション開発。

【2007年度の研究業績】

［論文］

・「近代社会と仏教―矢吹慶輝を中心として―」『近代仏教』第14号、2007年11月。

［研究ノート］

・「「近代仏教」とは何だったのか―近代仏教研究の視点から　（二）―」『浄土学』第44号、2007年6月

【2007年度以前の主な研究業績】

・「沖縄における仏教寺院の信徒組織化に関する一考察―真言宗智山派Ａ寺を事例として―」『基盤研究（Ｃ）（２）　沖縄における死者慣行の変容と「本土化」―那覇市周辺地域における実態調査』、2007年3月。

・「近代仏教」とは何か―近代仏教研究の視点から（一）―」『浄土学』第43号、2006年6月。

・「日本近代仏教教団論への試み―明治期・知恩院を事例として―」『大正大学大学院論集』第31号、2006年3月

シッケタンツ、エリック 共同研究員　担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

専門は宗教史学。広く言えば、東アジアにおける近代化と宗教という研究テーマに関心を持ち、研究を行っている。博士論文のテーマは近代中国仏教の形成とそれに対する近代日本仏教の影響である。その他、今は近代中国国家（主に国民党国家）における戦死者祭祀の調査も行っている。

【2007年度以前の主な研究業績】

・修士論文（2005年）：「近代中国における日中仏教交流－民国時代の密教復興からの一考察」

高橋典史 共同研究員　担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

専門は宗教社会学。日系宗教の海外布教に関心があり、特にハワイにおける日系宗教の展開と日系移民とのかかわりについて、ナショナリズムやエスニシティの観点からこれまで調査・研究を進めてきた。今後は、ハワイ・北米地域と東アジア地域の状況の比較研究をはじめとして、近現代日本における日系宗教の海外布教を包括的に研究していきたいと考えている。また、インターネットやマスメディアに流通している宗教情報など、現代社会における新しいタイプの宗教的な諸現象の実態についても調査を進めていく計画である。

本プロジェクトでは、科学研究費補助金「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」の業務を分担している。

【2007年度の研究業績】

［論文］

・ロバート・G. リー『オリエンタルズ――大衆文化のなかのアジア系アメリカ人』（貴堂嘉之・小倉恵実・高橋典史・伊佐由貴共訳、岩波書店、2007年）

・「世代」（移民研究会編『日本の移民研究 動向と文献目録II 1992年10月―2005年9月』明石書店、2008年）

［講演・シンポジウム・研究会］

・「ハワイ日系宗教の日系人信者に見られる宗教的アイデンティティの変遷―天理教の教会継承を事例に―」日本宗教学会第66回学術大会、立正大学，2007年9月16日

【2007年度以前の主な研究業績】

・「排日期ハワイ日系社会におけるアメリカ化と宗教――日系人宗教指導者の言説に注目して――」『一橋論叢』第135巻第2号、2006年

・「第二次世界大戦後のハワイ日系仏教のアメリカ化とエスニック化」『一橋研究』第31巻第3号、2006年

武井順介 共同研究員　担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

専門は宗教社会学、社会調査論。特に社会の影響による人間の価値観や態度の変容について、その要因やプロセスに着目し研究を行なっている。具体的には、次のようなテーマに取り組んでいる。

(1) 宗教集団における信仰や信念の獲得 / 受容プロセスの研究
(2) 社会集団における病観の獲得 / 受容プロセスの研究
(3) 大学生の学習意欲と学習態度の形成プロセスの研究
(4) (3) の研究を行なうためのコンピュータシステムとウェブアプリケーションの開発

【2007年度の研究業績】

[論文]

・「神道・日本文化に関するオンライン学術情報発信のシステム構築」『神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成 研究報告Ⅲ』文部科学省 21 世紀 COE プログラム（國學院大學）（黒崎浩行、江島尚俊、藤井弘章、大澤広嗣との共著）。
・「ノンフィクション作品からみた社会的リアリティ―追体験から想像力へ」、張江洋直、大谷栄一編『ソシオロジカル・スタディーズ―現代日本社会を分析する』世界思想社、2007 年 12 月。

【2007年度以前の主な研究業績】

[単行本]

・『ライフヒストリーの宗教社会学―紡ぎだされる人生』ハーベスト社、2006 年 6 月（川又俊則、寺田喜朗との共編著）。

[論文]

・「社会調査における〈信憑構造〉とその揺らぎ」『年報 社会科学基礎論研究』第 4 号、2005 年 6 月。
・「宗教的世界への「転向」論―「闘争」から「病気治し」への個人史的意味付け」『大学院年報』第 22 号、2005 年 3 月。

フィルス，ドロシア 共同研究員 担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

専門は宗教社会学。(1) 最近の研究テーマは「日本における宗教間対話」。日本の主要な宗教団体による宗教間対話についてのデータ集集・分析。2009 年 Springer 社出版予定の図書のなかで一章を書くため。(2)2004 年に始めた日本における宗教教育と道徳教育についても研究継続。目的は、公教育に宗教教育を導入する可能性を検討。その際、日本国憲法や教育基本法の改正、宗教・道徳教育の歴史、日本人の宗教・道徳観も分析。2007 年に京都の私立中学・高校で宗教教育について調査、京都市教育委員会で、インタビュー、資料入手。文京区の公立の初・中等学校で道徳教育についてフィールドリサーチ。文京区教育委員会主催の講演会で議論。現在は成城学園、インターナショナルスクールで調査中。2006 年から富坂キリスト教センター宗教教育研究会参加。成果は来年出版予定。

【2007年度の研究業績】

[論文]

・"Religious Education in Contemporary Japan", in *International Handbook of the Religious, Moral and Spiritual Dimensions of Education*, edited by M. de Souza et al (Dordrecht, The Netherlands: Springer Academic Publishers), 2007、pp. 1039-1053.

[学会・講演・シンポジウム・研究会]

(1) "Objectives of Moral Education in Japan", Monash University Japanese Studies Centre, Melbourne, 7 September 2007.
(2) "Moral and Religious Education in Japan", International Society for the Sociology of Religion, Leipzig, 25 July 2007.
(3) "Moral and Religious Education in Japan", Japan Foundation Fellows' Seminar, Tokyo, 12 July, 2007.
(4)「アイデンティティ、剥奪と宗教への関わり」、富坂キリスト教センターの研究会、2007 年 3 月 6 日 .

【2007年度以前の主な研究業績】

"Religious Education in Japan: What Are the Problems?", *The Japan Mission Journal*, Vol. 59, No.3, 2005、pp.157-166.
"Secrecy and Kakure Kirishitan", *Bulletin of Portuguese/Japanese Studies*, Vol. 7, 2003, pp. 93-113.
「隠れキリシタンと経済的・社会的剥奪」、脇本平也、田丸徳善編『アジアの宗教と精神文化 』、新曜社、1997 年 , pp. 99-121
博士論文、"Social Stratification and Religious Affiliation in Japan", (Melbourne: Monash University), 1999.

松本喜以子共同研究員　担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

現在の研究は、“計算機シミュレーションを用いた結晶成長理論の研究”、“計算機によるゲーム理論の研究”、“ICT 活用による FD (Faculty Development)/SD(Staff Development) 促進の研究”、“学習管理システムや e-learning を活用した教育並びに専門家育成” など多岐にわたるが、いずれの研究も“研究手段として計算機を活用する”という点で一致している。

本プロジェクトでは、Web ページの制作を分担している。

【2007 年度の研究業績】

［論文］

・“Growth of a binary ideal solid solution crystal studied by Monte Carlo simulation” Kiiko Matsumoto, Toshiharu Irisawa, Masao Kitamura, Etsuro Yokoyama, *Journal of Crystal Growth* 310 (2008) 646–654

・“非分割財の交換市場モデルにおける von Neumann-Morgenstern 集合の存在性について”和光純，入澤寿美，松本喜以子 学習院大学計算機センター　年報　Vol.28 2007　P48-63

［国際会議発表］

・“Effective distribution coefficient of binary solution crystal by Kossel model” Kiiko Matsumoto*, Toshiharu Irisawa, Masao Kitamura, The 15th International Conference on Crystal Growth/The 13th International Conference on Vapor Growth and Epitaxy

【2007 年度以前の主な研究業績】

・“Effective distribution coefficients of an ideal solid solution crystal : Monte Carlo simulation” Kiiko Matsumoto, Toshiharu Irisawa, Masao Kitamura, Etsuro Yokoyama, Yoshinao Kumagai, Akinori Koukitsu, *Journal of Crystal Growth* 276 (2005) 635-642

・“Two-dimensional nucleation in ideal solid solution crystalline surface” Kiiko Matsumoto and Toshiharu Irisawa *Proceedings of the 5th Symposium on Atomic-scale Surface and Interface Dynamics*, March 1-2, 2001, Tokyo　P413-416

山田（永井）美紀子共同研究員　担当プロジェクト：「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

【研究紹介】

専門は宗教学で、とくに近現代の日本における新宗教が主な研究対象である。

新宗教信者の信仰生活においては超自然的な力に頼む側面と、教えに沿った自己規律的な側面が見られるが、この二つの側面のかかわり方の研究を行なってきた。その他、日本宗教史における新宗教の現れ方や教団組織の在り方などにも関心がある。

また、近年は、信仰を持っている人との比較の視点から、一般的な日本人の持つ宗教意識に関心を持ち調査等を行なっている。

国際社会、そしてグローバル化が進むなかで、宗教に関する一般的な素養を身に着けることの重要性を痛感し、宗教文化教育における教材開発等にも関わっている。

本プロジェクトでは国際研究フォーラムの開催準備等に協力している。

【2007 年度以前の主な研究業績】

・“Sinnyo-en in Society”, 2006, edited by Ruben L.F. Habito & Keishin Inaba, *The Practice of Altruism: Caring and Religion in Global Perspective*, Cambridge Scholars Press,pp.72-77.

・『信頼社会のゆくえ―価値観調査に見る日本人の自画像―』ハーベスト社、2007 年（ロバート・キサラ、山田真茂留との共編著）

・「日本的な宗教意識の諸相」2004 年 3 月ロバート・キサラ編『科学研究費補助金・基盤研究 (B)(2)「価値体系の国際比較（アジア価値観調査）」（2001 ～ 2003 年度）研究成果報告書』(pp.73-89)

出版物紹介

『國學院大學日本文化研究所50年誌』

（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、2008年3月、非売品）

内容紹介

日本文化研究所は、1955年（昭和30）に設立され、2005年（平成17）に50周年を迎えた。本書はその設立50周年記念事業の一環として、設立から平成18年度までの研究所の活動について包括的に記録した書物である。第1章 沿革、第2章 事業・プロジェクト、第3章 講演会・講座、第4章 刊行物一覧、第5章 紀要・所報目次、第6章 略年表、という構成である。いずれも設立当初からの情報を可能なかぎり集め、最近の成果はもとより、過去の研究所の活動についても具体的に知りうる基本資料となっている。近年の学術フロンティア推進事業や21世紀COEプログラムをはじめ、本研究所が主体的に推進してきた共同研究は数多くあるが、研究所を焦点として、それらの全体像を示している点でも、本書は多くの人々に目を通していただきたい一冊である。刊行物や『國學院大學日本文化研究所紀要』、『國學院大學日本文化研究所報』の目次についても、先行の目録類をもとに、再度、実際の刊行物にあたってタイトルなどをチェックし直している。口絵には過去から現代までの貴重な写真を収めた。研究機関などで備えておきたいというご希望のある場合には、研究開発推進機構事務課にご一報いただきたい。

『國學院大學日本文化研究所紀要　DVD』

（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、2008年3月、非売品）

内容紹介

國學院大學日本文化研究所は、平成17年に創立50周年を迎えた。このDVDは、その50周年記念事業の一環としてされたものである。本DVDには、『國學院大學日本文化研究所紀要』のすべてがPDFとして電子化され、一枚に収められている。

『國學院大學日本文化研究所紀要』は、昭和32年（1957）に第1輯が創刊され、平成19年度に最終号となる第100輯が刊行された。DVDにはこの全100輯に掲載されたほぼすべての論文、研究ノート、講演要旨などのほか、目次一覧も収められている。収録にあたっては、誤植脱字等の訂正を行い、またPDFファイルは、すべて透明テキスト化し、検索可能なものとした。こうした工夫により、日本文化研究所が積み重ねてきた学術的資産を広く利用していただくことが可能になった。今後、国内外の多くの研究者に活用されることを願う。

『國學院大學研究開発推進機構プロジェクト研究報告 人文科学と画像資料研究 第5集』

（國學院大學研究開発推進機構 プロジェクト「デジタル・ミュージアムの構築と展開」編、2008年3月）

内容紹介

本誌は、文部科学省私立大学学術高度化推進事業（「学術フロンティア推進事業」）の選定を受けて平成11年度から17年度にかけて進められた「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクトの研究成果まとめた「人文科学と画像資料研究」の最新号である。本号には、文部科学省の事業として終了した後も大学独自で継続して進められた同名のプロジェクト、およびそれを引き継いで19年度に「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトの一部として進められた事業の研究成果である13の論考が掲載されている。

「Ⅰ．画像資料と人文科学」は、平成19年度の研究活動に伴う成果として執筆された、ガラス乾板と音声資料に関する3つの論考からなる。「Ⅱ．デジタル情報を生かした教材作成にむけて」では、同名で開催されたフォーラムの内容をもととして、これまでのデジタル化と公開の実践例の紹介および今後の教材作成支援のための議論が展開されている。「Ⅲ．画像資料アーカイヴスと人文科学―劣化画像は救えたか？」では、同名で開催されたシンポジウムの内容をもととして、8年間にわたって進められた「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクトの研究成果の集大成と、それにもとづいた今後の展望が示されている。

『写真資料デジタル化の手引き　保存と活用のために』

（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、2008年3月）

内容紹介

國學院大學日本文化研究所が文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（学術フロンティア推進事業）の選定を受けて実施したプロジェクト「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」を通じて8年間にわたり培ってきた、写真資料の整理・アーカイビング、デジタル化、データベース化における方針策定と作業実務のノウハウを一冊にまとめた。

目次構成は次のとおりである。

第1章　人文科学と写真資料の活用
第2章　写真資料整理・デジタル化の基本方針
第3章　整理・デジタル化と保存措置の手順
第4章　公開と管理
第5章　作業スキルの構築と伝承

第2～4章が作業実務を詳述した内容であり、第1章に人文科学における写真利用の歴史をふまえた考察を、第5章に作業スキルの構築と伝承のための提言を載せている。

今日、人文科学分野で写真を利用した研究を進めるさい、あるいはすでに大量に写真資料を所蔵していて、これを研究やその他の活用に供するためには、基礎作業としてデジタル化・データベース化が必須である。そのための参考として本書が役立つことを願う。

『近世の好古家たち―光圀・君平・貞幹・種信―』

（國學院大學日本文化研究所編／雄山閣、平成20年2月）

内容紹介

本書は、「近世学問を検証する―近代ヨーロッパ Archaeology 日本上陸以前の考古学的学問・国学者に光をあてる―」を統一テーマとして、日本文化研究所が平成16年度より2年間にわたって実施した学術講演会と公開シンポジウム、および座談会「斎藤忠先生を囲んで　近世の好古家たち―日本考古学の基礎をきづいた人々―」をもとにして再構成したものである。

近代欧米の文化は19世紀後半に日本に上陸する。考古学においては Archaeology を受け入れる土壌に、明、清から発した金石学、考証学だけでなく、日本独自の学問として古典研究や有職故実研究などによる自国文化の追及が着実に進行していた。ここでは、そうした活動を行っていた人物の中で特に、徳川光圀、蒲生君平、藤原貞幹、青柳種信の４人の好古家に焦点をあてた。また、それぞれの研究内容に加えて、各々が地方で独自に活躍していただけではなく、面識を持ち文を交わしてそれぞれに影響や刺激を受けてきた交流のあり方などについても検証した。

座談会・講演・シンポジウム参加者：斎藤忠、眞保昌弘、篠原祐一、阪本是丸、柳田康雄、時枝務、古相正美、杉山林継

『第４回日韓学生宗教意識調査報告』

（井上順孝編集責任、2008年２月）

内容紹介

本報告書は、「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト、科学研究費補助金、基盤研究（C）「宗教教育における情報リテラシーの日韓比較」（研究代表、井上順孝）、「宗教と社会」学会、宗教意識調査プロジェクトのメンバーによって実施された、学生を対象とする宗教意識調査の報告で、下記の内容によって構成される。

Ⅰ．第９回学生宗教意識調査（日本）

Ⅱ．第４回韓国学生宗教意識調査

Ⅲ．日韓比較

Ⅳ．2007年度調査票

日本での調査については、全国35大学より4,306名の有効回答が寄せられている。宗教と教育やテレビの霊能番組、スピリチュアリティなどに関連する設問があり、その結果はマスコミからも注目され、すでにいくつかの新聞でも取り上げられている。

入手方法については下記の URL を参照。

http://www.kt.rim.or.jp/~n-inoue/index.files/jasrs.htm

遠藤 潤『平田国学と近世社会』

（ぺりかん社、2008年2月）

内容紹介

本書は、平田篤胤および気吹舎の思想と社会的実践について、独自の視点から明らかにしようとしたものである。平田国学に対する関心はもちろんのことであるが、視点としては、歴史的・社会的な文脈の理解と思想内容の分析とを、どのようにしたら一貫したパースペクティヴのもとに実現できるのかという問いが根底にはあった。19世紀の日本社会が知のあり方において近代的なそれへと変化・変容していくなかで、篤胤の学問がそのある部分に深く関わっていたこと、また社会史的には、平田国学が、神職にとって必要とされる学問として、また国家・社会の再構築のための学問として、求められて展開されたことなどを考察している。内容については不十分と感じられる部分も多々あろうが、いずれにせよ、これが校了時点での著者の到達点である。典拠を明示した年譜は、研究・調査の段階での一部の先行研究に対する苛立ちを積極的な方向へ昇華しようとしたものでもあり、著者は関連領域での「同志」が少しでも増えることを期待している。

井上 順孝編『近代日本の宗教家101』

（新書館、2007年4月）

内容紹介

19世紀から20世紀にかけての日本宗教史の激動の時代を、一人ひとりの宗教者たちの生き様を重ねあわして考えてみようという意図で編集された。神道関係者、仏教関係者、キリスト教関係者、新宗教関係者などから101人が選ばれている。明治以降2005年までに没した人が対象である。神道関係では葦津珍彦、川面凡児、芳村正秉など、仏教関係では暁烏敏、大谷光瑞、清沢満之 など、キリスト教関係では内村鑑三、賀川豊彦、新渡戸稲造など、また新宗教関係では伊藤真乗、久保角太郎、牧口常三郎などが扱われている。相対的に新宗教関係者が多いが、これは社会の変化が宗教に及ぼした影響をみようとする本書の狙いによる。それぞれの人物の記述の後半部分には、逸話的なもの、あるいはその人物の性格なり活動を特徴づけると思われる事項を記載してある。参考文献がある他、付録として、101名の生没年グラフと出身地マップ、年表がある。

執筆者は稲場圭信、井上順孝、李和珍、大澤広嗣、大谷栄一、齊藤智朗、佐々木裕子、鈴木範久、武井順介、武田道生、對馬路人、辻村志のぶ、永井美紀子、平藤喜久子、藤田庄市、藤田大誠、村上興匡、村田充八の18名。

井上 順孝『宗教社会学がよ～くわかる本』

（秀和システム、2007年7月）

内容紹介

宗教社会学の入門書。宗教社会学が宗教学の中で占める位置、宗教社会学の古典的学説、日本の宗教社会学の展開という学説紹介と、現代宗教の諸相を宗教社会学の視点から分析するときのテーマや、調査方法などの紹介とがある。ウェーバー、デュルケム、ジンメル、モース、パーソンズ、マートン、グロックといった西欧の研究者、及び日本の研究者の学説のポイントが紹介されている。また中国宗教文化圏、ヒンドゥー・仏教文化圏、ヨーロッパ・キリスト教文化圏、中東のイスラーム圏などといった宗教文化圏というとらえ方も示される。理解の助けとなるように、各項目に図解がほどこされているのが特徴である。

目次によって全体の構成が分かるので、以下に示す。「第1章 宗教を研究する視点」「第2章 宗教社会学が広げる視点」「第3章 宗教社会学の基礎理論」「第4章 宗教のもつ社会的機能とは」「第5章 日本で展開した宗教社会学」「第6章 宗教社会学と深く関係する理論」「第7章 宗教文化圏という考え方」「第8章 宗教の越境」「第9章 宗教展開の諸相」「第10章 現代日本と宗教」「第11章 現代世界の宗教問題」「第12章 現代宗教を調査する」

島薗 進、石井 研士、下田 正弘、深澤 英隆 編『宗教学文献事典』

（弘文堂、2007年12月）

内容紹介

本書は宗教を理解するための基礎的文献849点を、宗教学、宗教史学、宗教哲学、宗教社会学、宗教心理学、宗教民俗学など幅広い領域から選抜し、解題を付した事典である。また、研究対象である諸宗教（仏教・仏教学・印度哲学、キリスト教・キリスト教思想、イスラーム・イスラーム思想、古代中近東の宗教、ギリシア・ローマの宗教、儒教、道教、神道・神道学、ユダヤ教・ユダヤ思想、新宗教・宗教運動）と諸地域（日本の宗教、東アジアの宗教、南アジアの宗教、アジア諸地域の宗教、アフリカの宗教、オセアニアの宗教、アメリカの宗教、ヨーロッパの宗教、ロシア・東欧）にも配慮してある。こうした試みは、たんに網羅的という意図ではなく、現代知の特徴を先取りし、知的刺激に満ちたものとするためである。

可能であれば著者自らが自著を解説することとし、著書の意図がより明確になることねらって構成されている。

事典として利用しやすいように、事典・辞典、資料集一覧（解題付き）、講座・叢書一覧（内容論文一覧付き）、索引（和文事項索引、和文人名索引、欧文事項索引、欧文人名索引）を付した。

『増補改訂版　データブック現代日本人の宗教』

（新曜社、2007年４月）

内容紹介

本書は1997年に刊行した『データブック現代日本人の宗教　戦後50年の宗教意識と宗教行動』の増補改訂版であるが、新しいデータを加え構成も組み替えてほとんどが改訂された。

戦後60年間の日本人の宗教意識や宗教活動がどのように変化してきたのかを、具体的な世論調査や統計資料など、基礎的データを分析することによって解明しようと試みている。それゆえにたんなる資料の提供ではなく、戦後60年の宗教変動と現代における日本の宗教状況を概観することが本書の目的である。

本書の構成は以下の通り。第一章・日本人の宗教意識・宗教行動の六〇年、第二章・「信仰の有無」と「宗教は大切」の変化、第三章・信者数と宗教団体、第四章・宗教行動と宗教意識の変化、第五章・宗教・宗教団体に関する認知と評価、第六章・一九七〇年代の宗教ブーム？、第七章・若者の宗教性、第八章・諸外国との比較から見た日本人の宗教

【日本文化研究所の行事】

■国際研究フォーラム

「ウェブ経由の神道・日本宗教―インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ―」

開催日：2008年10月26日（日）

場　所：午前の部（第一部）…… 國學院大學学術メディアセンター5階　会議室　06
　　午後の部（第二部）…… 國學院大學学術メディアセンター1階　常磐松ホール

◇午前の部（第一部：研究者フォーラム）

パネリスト：　Carl Freire（University of California, Berkeley, USA）
　　Erik Schicketanz（東京大学）
　　Laurent Godinot（INALCO, FRANCE）
　　岡田昭人（東京外国語大学）
　　加瀬直弥（國學院大學）
　　平藤喜久子（國學院大學）

コーディネーター：黒﨑浩行（國學院大學）

◇午後の部（第二部：公開フォーラム）

パネリスト：　Jean-Michel Butel（INALCO, FRANCE）
　　Michael Wachutka（Tübingen University, GERMANY）
　　Alan Cummings（SOAS, UK）

コメンテータ：渡辺　学（南山大学）
　　師　茂樹（花園大学）

司　会：　井上順孝（國學院大學）

問い合わせ先：infoshubun@kokugakuin.ac.jp

＊本国際研究フォーラムは、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト、科学研究費補助金　基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」、基盤研究（C）「宗教教育における情報リテラシーの日韓比較」による連携企画です。

【研究開発推進機構の行事】

■学術メディアセンター開設記念催事

・記念講演会

講　師：嵐山光三郎（本学客員教授、作家）「芭蕉とは何か―『奥のほそ道』の謎―」
　　青木保（文化庁長官）「グローバル化・情報化時代における日本文化」

日　時：平成20年10月12日（日）

場　所：國學院大學 渋谷キャンパス AMC 常磐松ホール（予定）

問い合わせ先：kikou@kokugakuin.ac.jp

＊講演会終了後、会場にて学術メディアセンターの施設を紹介するビデオを上映いたします。

・公開学術講演会

文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」
テーマ：「神社本殿の建築的特質」
講　師：藤澤 彰（芝浦工業大学教授）
日　時：平成20 年10 月18 日（土）13 時00 分～ 14 時30 分
場　所：國學院大學 渋谷キャンパス AMC 常磐松ホール（予定）
受講料：無料
定　員：200名（先着順）
問い合わせ先：kikou@kokugakuin.ac.jp

・第34回　日本文化を知る講座（全４回）

「現代人にとっての神々の物語―教材としての神話―」
主　催：國學院大學研究開発推進機構
共　催：渋谷区教育委員会
◇11 月 8 日：「神話の想像力―教材としてのヤマタノヲロチ神話―」青木周平（國學院大學教授）
◇11 月15 日：「日本神話をどう教えるか」平藤喜久子（國學院大學講師）
◇11 月22 日：「神話としての創世記」月本昭男（立教大学教授）
◇11 月29 日：「檀君神話と韓国」丹羽泉（東京外国語大学教授）
各日とも13時半～ 15時半
場　所：國學院大學渋谷キャンパス２号館１階2101教室
受講料：無料
定　員：150名（先着順）
問い合わせ先：kikou@kokugakuin.ac.jp

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報　第１号（創刊号）

平成20年9月30日　発行
発 行 者　井上順孝
編集担当　平藤喜久子
　　遠藤　潤
印 刷 者　（株）山陽堂
発 行 所　國學院大學研究開発推進機構
　　東京都渋谷区東4丁目10番28号
　　郵便番号　150-8440
　　電話　03-5466-0162
　　FAX　03-5466-9237